

厚生労働省(内閣府と関係府省との間で調整を行う提案)

管理番号	提案区分		提案事項(事項名)	求める措置の具体的内容	具体的な支障事例	制度改正による効果 (提案の実現による住民の利便性の向上、行政の効率化等)	根拠法令等	制度の所管・関係府省	団体名	その他 (特記事項)	<追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)>		回答欄(各府省)
	区分	分野									団体名	支障事例	
3	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	国民健康保険の限度額適用認定証に係る認定要件の明確化	国民健康保険の高額療養費の支給に係る保険者の認定については、施行規則第27条の14の2第1項及び第2項に基づき認定し、同条第3項に基づき限度額適用認定証の交付を行っている。 このうち、認定要件たる施行規則第27条の14の2第1項第3号について、条文中に示される「保険料」に、運用上、滞納に係る延滞金を含むと解する市町村と含まないと解する市町村がある。 本市においては、「保険料」には延滞金は含まないものとして取り扱っているが、そのような取扱いに対しては、保険料は滞納していないものの延滞金を滞納している者に対して限度額適用認定証を交付することになるため、滞納整理の見地から「保険料」には延滞金を含むと解すべきであるとの意見もある。	平成30年度からの国民健康保険制度の広域化に当たり、事務処理の標準化を推進するものとされている。 施行規則の条文の改正又は国からの通知により認定要件を明確にすることで、同一制度における市町村間の整合性を担保し、対象となる市民の混乱を防止することができる。	国民健康保険法施行規則第27条の14の2第1項第3号	厚生労働省	川口市		寒川町、多治見市、鳥取県、高松市、熊本市、宮崎市	○左記の通り町町においても、延滞金を含まない取扱いとしているが、明確な判断基準が無い。 ○本市では、薬剤師の要件緩和は、必要と考える。 ○本市では、医療機関への業務委託により、2箇所へき地診療所を週1日ずつ開設しており、うち1か所が院外処方となっている。 ○本市では、医療機関への業務委託により、2箇所へき地診療所を週1日ずつ開設している提案があり、医療法を改正中である。医師を対象としているものがあるが、へき地においては、医師に限らず、薬剤師も貴重な人材であることから、人材の有効活用においては、本提案も同様の事情である。	国民健康保険の高額療養費の支給に係る保険者の認定については、国民健康保険法施行規則第27条の14の2第1項及び第2項に基づき認定し、認定を行った被保険者に対して同条第3項に基づき限度額適用認定証の交付を行っているところである。 限度額適用認定証の交付申請にあつては、国民健康保険法施行規則第27条の14の2第1項第3号に基づき「保険料を滞納していない旨」を届け出ることとしているところである。 地方自治法第231条の3第3項に基づき条例で定められる「延滞金」については、国民健康保険法第79条に定める「保険料」の滞納に伴い生じるものであるが、国民健康保険法施行規則第27条の14の2第1項第3号においては、要件を「保険料」に限定しており、「延滞金」の滞納をもって限度額適用認定証の交付を行わないことが適切ではないことは明らかであるため、条文の改正や通知の発出は要さないものとする。
7	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	へき地における薬局の管理薬剤師の業務許可要件の緩和について	本市の中山間地域では、民間の医療機関が閉鎖し、一時的に無医地区となったが、市内医療機関の協力により、国民健康保険を開設し、週2日診療を行っている。また、本市出身の経営者が地域の医療事情を憂い、診療所の近隣に薬局を設置し、診療所の診療日にあわせて週2日開業しているが、採算性の問題から薬局の継続が困難な状況にある。そこで、当該薬局の管理薬剤師が閉鎖日以降に他の薬局でも勤務できるように、県に管理薬剤師の業務許可を相談し、県から厚生労働省へ照会したが、昭和36年通知に基づき、「公益性のある学校薬剤師としての業務等、極めて例外的に認められるものであり、業務の許可はできない」との回答だった。なお、医師が自ら調剤することが法律上認められているが、医薬品の種類や効能は多様化、複雑化しており、専門家たる薬剤師が薬局において調剤することが望ましいと考える。 へき地においては薬剤師の確保が困難であるため、地域の暮らしに必要不可欠な薬局を維持することができなくなっており、薬局存続のため、住民による著名活動も行われている。	へき地における管理薬剤師の業務許可要件の緩和により、地域の暮らしに必要な薬局の維持が期待できる。	医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律の第7条第3項、(薬事法の施行)について(昭和36年2月8日厚生省薬務局長)	厚生労働省	秋市	「平成29年度提案募集」管理番号279号において、へき地診療所における管理者の常勤要件の緩和について提案があり、医療法を改正中である。医師を対象としているものがあるが、へき地においては、医師に限らず、薬剤師も貴重な人材であることから、人材の有効活用においては、本提案も同様の事情である。	山口市、徳島県、高知県	○本市も域内に準無医地区を抱えており、医師及び薬剤師の確保には苦慮しています。 ○本市では、医療機関への業務委託により、2箇所へき地診療所を週1日ずつ開設している提案があり、医療法を改正中である。医師を対象としているものがあるが、へき地においては、医師に限らず、薬剤師も貴重な人材であることから、人材の有効活用においては、本提案も同様の事情である。 また、「患者のための薬局ビジョン」においては2025年までに全ての薬局がかりつけ薬剤師・薬局としての機能を果たすことが求められているが、本県では薬局や薬剤師の地域偏在に加え、一人薬剤師の薬局も多く、24時間対応や在宅対応等が困難であるという意見もあり、地域の薬局が地域で連携し、地域全体でかりつけ薬剤師・薬局機能を確保する仕組みづくりが必要となっている。 このように、地域においてかりつけ薬局機能を発揮し、地域医療を維持していただくためには、都道府県知事が柔軟に管理薬剤師の業務を許可できるよう、許可要件の緩和が必要と考える。 ○本県においても薬剤師の確保に苦慮している中山間地域がある。 高齢者のポリファーマシー等の課題に対応するためにも、地域の医療を支える一員として、薬剤師の役割は大きいことから、へき地における管理薬剤師の業務許可要件の緩和により、地域に必要な薬局の維持や薬剤師の確保が期待できる。	薬局の管理者は、薬局を実地に管理する必要があり、医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律第7条第3項の規定により、原則として、その薬局以外の場所で実地として薬局の管理その他薬事に関する業務に従事することが禁止されているが、同項のただし書きにより、その薬局の所在地の都道府県知事(その所在地が保健所を設置する市又は特別区の区域にある場合には、市長又は区長。)の許可を受けた場合には、例外的に薬局の管理者が兼務することが認められる。この許可の取扱いについては、昭和36年2月8日付け薬発第44号厚生省薬務局長通知(以下「通知」という。))において、「非営利の学校薬剤師を兼ねる場合等であつて薬局の管理者としての業務を遂行するに当たって支障を生ずることがない」と認められることとされており、業務許可が認められる場合は限定されている。 少子高齢化が進行する中、へき地において、必要な水準を確保しつつ、必要な医療サービスを提供することは重要であると考えている。 運動や薬剤師の在り方については、厚生科学審議会医薬品医療機器制度部会(以下「制度部会」という。))において議論を進めているところであり、この点についても、実態を踏まえて、制度部会の中で検討し、その結果を踏まえて所要の措置を講じていきたい。
8	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	生活保護の実施等の事務手続におけるマイナンバーの情報連携項目の追加	マイナンバーによる情報連携により、生活保護の決定・実施等の事務手続において、労働者災害補償保険法による休業補償給付等の支給に関する情報を収集可能としたい。 こうした中、本市では平成29年度中に、労働者災害補償保険法に係る休業補償給付等を受給しているにもかかわらず、これを福祉事務所に届け出ず、生活保護を不正受給した事案が2件発生しており、こうした給付金の受給状況を効果的に把握する必要性が生じている。 このため、マイナンバーによる情報連携により、生活保護の決定・実施等の事務手続において、労働者災害補償保険法による休業補償給付等の支給に関する情報を収集可能としたい。	生活保護の決定・実施等の事務手続において、現行のマイナンバー制度では、例えば雇用保険法による失業等給付の支給に関する情報は入手できるものとされているが、労働者災害補償保険法による休業補償給付等の支給に関する情報は入手できるものとされていない。 こうした中、本市では平成29年度中に、労働者災害補償保険法に係る休業補償給付等を受給しているにもかかわらず、これを福祉事務所に届け出ず、生活保護を不正受給した事案が2件発生しており、こうした給付金の受給状況を効果的に把握する必要性が生じている。 このため、マイナンバーによる情報連携により、生活保護の決定・実施等の事務手続において、労働者災害補償保険法による休業補償給付等の支給に関する情報を収集可能としたい。	行政手続における特定の個人を識別するための番号の利用等に関する法律第19条第7号、別表第二の26行政手続における特定の個人を識別するための番号の利用等に関する法律別表第二の主務省令で定める事務及び情報を定める命令第19条生活保護法第29条	内閣府、総務省、厚生労働省	広島市、広島県	仙台市、所沢市、千葉市、大和市、新潟市、福井市、岐阜市、多治見市、浜松市、京都市、堺市、八尾市、神戸市、岡山市、高知県、熊本市、宮崎市	○労働者災害補償保険法による休業補償給付等の受給は申告がないと発見することが難しく、受給が疑わしい場合は生活保護法第29条に基づく個別の文書照会を実施する必要がある。 ○休業補償給付等の受給の有無については、生活保護法第29条に基づき調査による把握の実施機関が把握することは可能であるが、生活保護受給者からの収入申告がなければ不正受給につながる可能性が高く、迅速かつ正確に生活保護受給者の収入を把握するためには、マイナンバーによる情報連携により、労働者災害補償保険法による休業補償給付等の支給に関する情報が収集可能となる必要がある。 ○休業補償給付等の支給状況が的確に把握できないと、不正受給となる事例が懸念される。 ○平成29年度中に労災に係る不正受給案件が1件発生した福祉事務所があった。世帯からの申告があったが、職場で怪我をしたとの取組内容から法29条に基づき地元労働基準監督署に文書照会し、不正受給が発覚したものの、照会内容についての回答は得られたものの地元監督署限りでは回答できず、回答までに2週間程度を要した。 ○休業補償給付等の受給の可能性がある場合において、生活保護法第29条に基づく個別の文書照会では、文書照会の作成事務が負担となるほか、回答までに相当な時間を要するため、保護費の適宜変更が生じる可能性がある。 その点、マイナンバーによる情報連携が可能となれば、照会事務の負担が軽減し、即日支給が可能となることで、保護費の適宜変更の可能性は減少する。 ただし、マイナンバーによる情報連携の全体的なことではあるが、情報提供エラーの発生や提供情報に不備があるなどを避け、情報連携による正確な情報提供の確保が必要である。 ○本市においても、生活保護法第29条に基づく個別の文書照会により受給状況を把握しているため、マイナンバーによる情報連携により、事務の効率化につながる。 ○本市においても、平成29年度以降、休業補償給付が3件発生した。不正受給にまでは発展しなかったが、被保護者が申告せず、不正に休業補償給付を受給するケースの発生が考えられ、その際には、関係機関へ照会して状況を把握する必要がある。 現行の制度では、紙媒体での照会しかできないため、調査に時間を要する。情報連携を活用することにより、速やかに状況を把握し、効率的な調査が可能になると考えられる。 ○提案団体記載のとおり、本市においても休業補償給付等の受給が疑われる場合において、生活保護法第29条に基づく個別の文書照会を実施する必要がなくなり、速やかに回答を得ることができるようにするため、生活保護の決定・実施や徴収金の徴収に係る事務が効率的に行えるようになれば、不正受給の防止に効果があると考える。	【内閣府、総務省】 まず、厚生労働省において、生活保護の決定・実施等に関する事務における労働者災害補償関係情報のマイナンバーによる情報連携の必要性や当該事務の効率化などについて検討する必要がある。 【厚生労働省】 現在、休業補償給付等の請求時には申請者からマイナンバーの提供を求めないところである。本連携を実施するに当たっては、以下の課題があるため、実施の可否も含め、慎重に検討する必要がある。 ・申請者に対して、一時的に受給する短期給付(休業補償給付等)についてもマイナンバーの提供を求め、本人確認書類の送達等が必要になる一方で、それにより省却できる労災保険の請求手続に係る添付書類はなく、国民の利便性向上の効果は低いと。 ・また、申請様式の改正に伴うシステム改修費用(システムの構築や構築の改定費用等)等のコストを要すること。 ・一方で、生活保護法に基づく支払証明の照会件数(労災保険の短期給付を含む照会に限る)は年間84件(平成29年度)と少なく、十分な費用対効果が見込まれない懸念があること。	

管理番号	提案区分		提案事項(事項名)	求める措置の具体的内容	具体的な支障事例	制度改正による効果 (提案の実現による住民の利便性の向上、行政の効率化等)	根拠法令等	制度の所管・関係府省	団体名	その他 (特記事項)	<追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)>		回答欄(各府省)
	区分	分野									団体名	支障事例	
14	B	地方に対する規制緩和	環境・衛生	火葬場の経営主体について、墓地、埋葬等に関する法律(墓理法)の通知の明確化もしくは見直し	火葬場の設置・運営について、現行の通知では火葬場の経営主体は地方公共団体や宗教法人、公益法人に限られるとし、民間事業者が経営主体となることを事実上制限している。 一方近年は民事法等により民間事業者が火葬場の経営に参加する事例が見られる。 この通知自体が古いものであり、かつ民間事業者の参入を閉ざしているような通知となっていることから、火葬場の経営許可にかかわる民間事業者の参入について、時勢に合わせた通知の明確化、もしくは見直しを求める。	火葬場は市民生活に不可欠な施設であり、墓理法の通知の趣旨(持続性と非営利性の確保)等から自治体の設置・運営がほとんどである。そして、その設置・運営には多大な経費が必要であることから、自治体の財政負担が大きい。 近い将来高い確率で予想されている大規模地震が発生すると、多くの犠牲者が発生し、火葬場も被災すれば稼働不能に陥ることになる。その時には広域的な火葬で対応することとなるが、受け入れる側にも限度があり、上回る分については何らかの対応が必要になる。 その対応としては、能力に余裕を持たせて火葬場を整備することも考えられるが、国の支援(補助)制度もないことから自治体の思うところとはならず、更に、多様に運営することができる民間事業者に、火葬の協力を求めるにも通知が支障となっている。	民間事業者が多様に運営できる環境を提供することで、大規模地震等の災害時には柔軟な対応ができることから、被災者へは迅速な支援を行うことができ、また、国・地方自治体にとっても効率的な行政を行うこととなる。 なお、民間事業者の多様な運営として、例えば火葬待ちの生じている都心部から遺体を搬送し地方で火葬する事業が成り立てば、都心部の火葬待ちの解決と地方での利益還元が期待できる。	墓地、埋葬等に関する法律 墓地、納骨堂又は火葬場の経営の許可の取り扱ひについて(昭和43年4月5日環衛第8056号)	厚生労働省	富山市		三上市	○火葬場の設置・運営については、法の趣旨から自治体が行っている。特に施設管理運営については、民間に委託や指定管理者制度を導入しており多大な経費が必要となる。富市においても指定管理者制度を導入しているが、財政負担が大きいことから民間事業者の参入について、通知の見直し等を求める。  仮に、これらの点について十分な考慮をせず安易な経営許可がされれば、例えば、営利を追求するために火葬の手数料が過大となったり、営業者が採算や収益の悪化などで火葬場の経営から安易に撤退したりするような状況が生じ、火葬場の利用が困難となる者が出てくると、国民の宗教的な感情の保護の観点から看過し得ない事態が生ずるおそれがあり、ひいては、国民の宗教的感情に適合した火葬等の実施という、墓地、埋葬等に関する法律の目的が果たせなくなるおそれがある。 このようなことを踏まえ、火葬場の経営主体については、非営利性及び持続性の観点から、地方公共団体のほかは、公益法人や宗教法人に限るとされていることである。 今回の提案については、従来の経営主体だけでなく、民間事業者による経営を認めるよう求めるものであること、民間事業者による経営については、上記の問題があることから、火葬場の経営主体として相応でないとする。
15	B	地方に対する規制緩和	環境・衛生	火葬場の設置・運営の広域的な連携方法が検討されるよう、墓地、埋葬等に関する法律(墓理法)に、都道府県、市町村等による広域的な連携に向けた「協議の場」としての協議会制度の位置付け	火葬場は市民生活に不可欠な施設であり、墓理法の通知の趣旨(持続性と非営利性の確保)等から自治体の設置・運営がほとんどである。そして、その設置・運営には多大な経費が必要であることから、自治体の財政負担が大きい。 自治体は限られた財源で火葬場を整備・運営し、使用料も安価にせざるを得ず、おのずと維持管理や利用者へのサービスは必要なものだけに、高齢化と人口減少から財政事情が悪化する自治体によっては、火葬場を維持することすら負担となり、更新は重い課題となる。このような課題の解決方法として、広域化を提案するもの。 なお、下水道事業では平成27年の下水道法改正で、広域的な連携に向けた「協議の場」としての協議会制度を法に位置付け、協議会には国、下水道公社等が参画できる他、国も広域化の取組を積極的に支援している。	国の財政的支援が無いなかで自治体が火葬場の整備・運営を行うよりも、PFI制度等を活用して民間事業者のノウハウを活かし、広域的に整備・運営を行えば、資源の集中投資と効率的な施設運営となる。利用者へはサービスの向上、国・地方自治体には行政事務の効率化と費用対効果の向上となる。	墓地、埋葬等に関する法律	厚生労働省	富山市		徳島県、大村市	○広域化への協議の場として協議会制度を位置づけること、国の技術的、財政的な支援を積極的に行うこととは必要と考える。 ○協議会の設置により、広域的な連携議論が進むことになり、行政運営の合理化が期待できる。 なお、各自自治体の施設の更新時期が異なるため、国の強い指導がなければ進まないと思われる。 ○火葬場の運営基盤強化の方策としては、まずは広域化(15の要領)やPFI、建設・維持等に対する補助金制度等にも取り組むべきことを考えており、各市町村の求めに応じて、広域化に向けた協議会等の検討の場を設けることは賛同できる。	都道府県、市町村等による広域的な連携に向けた「協議の場」としての協議会を設けることは、墓地、埋葬等に関する法律においては何ら制限されておらず、各地方自治体の判断により協議会を設けることは現在でも可能である。 なお、火葬場の設置・運営の広域化については、既に広域化に取り組んでいる都道府県、市町村等の例を参照することで、推進していただくと考えている。
18	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	地方税法第20条の11に基づく税務署の調査協力についての対応改善	国民健康保険料の滞納処分に関しての調査のため、地方税法第20条の11により、税務署に対して、関係書類の閲覧協力を求めること、国民健康保険料が「国と地方団体との税務行政運営上の協力」についての「了解事項」(平成9年3月21日)「国税庁長官(自治事務次官)の対象とされていることを理由に、税務署から協力を拒まれた事例がある。地方税法第20条の11の協力要請に応じることが否かは税務署が行政目的を阻害するおそれがあるかどうかについて案件ごとに判断すべきであって、国民健康保険料が「国と地方団体との税務行政運営上の協力」についての「了解事項」の対象とされていないことをもって、協力に応じないことは適当とはいえない。税務署の協力が得られないことにより、滞納者の財産を調査することができず、国民健康保険料の徴収業務に支障が生じている。	国税庁から税務署に対して、市町村が国民健康保険料の滞納処分に必要な情報を求めた場合には協力に応じよう通知等されれば、税務署から十分かつ円滑な協力が得られることになり、国民健康保険料の滞納整理がより円滑に進行することができる。	国民健康保険法第79条の2 地方自治法第231条の3第3項 地方税法第20条の11	総務省、財務省、厚生労働省	松江市		船橋市、横浜市、川崎市、神戸市、鳥取県、玉野市、高松市、東温市、熊本市	○本市においては、同様の支障事例はないが、今後同様の事例が生じた場合には、提案市と同じく、徴収業務に支障がでるため。 また、税務署ではないが、他の自治体の税務部門へ照会した際にも、公課(国民健康保険料)であることと理由に協力要請を拒否されたことがあり、必要な情報が収集できず、滞納整理業務への支障が生じている事例があった。 ○国民健康保険料の滞納処分に関しての調査のため、国税徴収法第146条の2により、他市に対して、当該調査に関し参考となるべき帳簿書類その他の物件の閲覧又は提供を求めたところ、地方税法第22条を理由として、本人の同意書がなければ協力を拒まれた事例がある。他市の協力が得られないことにより、滞納者の財産を調査することができず、国民健康保険料の徴収業務に支障が生じている。 ○国民健康保険料に係る滞納処分についても、その法的根拠は国民健康保険法と同様、地方税法に準じていることであり、また、安定的な国民健康保険料の運営に向けては、福楽な保険料(税)の収収が必要不可欠なことから、滞納整理の円滑な進行のために、保険料分徴収税による区別なく、税務署においては協力にお願いしていただく、その一助として国から通知等を出すことは必要であると認識している。 ○本市においても、税務署の協力が得られないことにより、滞納者の財産を調査することができず、国民健康保険料の徴収業務に支障が生じている。	市町村による国民健康保険料の滞納処分の実施にあたっては、対象となる被保険者に関する資料の収集のため、金融機関や税情報保有する税務署をはじめとした官公署に協力を依頼することがある。 しかしながら、税務署の職員には、税法により一般の国家公務員よりも重い守秘義務が課されていることから、個々の納税者に関する情報は慎重に取り扱うことが求められており、税目的以外の目的で他の行政機関に提供することは困難である。 なお、所得税等については、税務署から市町村の税務所管部局に対して情報提供されていると想定されるため、国税徴収法第146条の2(※)の規定に基づき、市町村の税務所管部局に対して照会することで確認することが考えられるほか、各市町村において同一滞納者に対して一体的な対応を進めていくことで、滞納処分の円滑に進めることができると考えられる。  ※ 国民健康保険料については、国民健康保険法79条の2の規定において地方自治法231条の3第3項に規定する「法律で定める普通地方公共団体の歳入」とされており、当該規定においては地方税の滞納処分の例により処分することができることとされているため、地方税法に規定するところに従い国税徴収法における滞納処分に関する規定を準用することとなる。
19	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	福祉型児童発達支援センターにおける従業員及び員数の基準の緩和	福祉型児童発達支援センターとして多様な医療状況下にある子どもを可能な限り受け入れ、安全安心なセンターを確保するとともに、子どもへの支援や医療ケアに習熟した看護師の常駐が不可欠である。しかし、現行の基準では、主として重症心身障害児が通うセンターとして指定を受けていなければ求められる従業員数に看護師を含めることができず、センター運営の実情に合致しない。求められる従業員数に看護師を含めることができない場合には、新たに保育士等を確保する必要があるが生じることは、センターの安定的な運営を損ない、利用者にも不安を与えている。	センターにおける安定的な人材の確保に資するとともに、看護師を配置しや指定通所支援の事業やケアを行うことができるようになる。	児童福祉法に基づく指定通所支援の事業等の人員、設備及び運営に関する基準	厚生労働省	伊佐市、阿久根市、霧島市		江戸川区、綾瀬市、出雲市、大分県	○平成32年度末までに児童発達支援センターを市町村又は圏域に少なくとも1か所以上設置が求められている中、本市でも設置に向けて検討している。 今後、市の教育、保育、教育の現状と課題に照らし、本市の児童発達支援センターの運営規模や機能等を考え、本件のような基準緩和は必要と考える。 また、昨年、医療的ケア児の人数が増加している状況から、主として重症心身障害児を運ぶ福祉型児童発達支援センターでなくても、看護師を配置すれば、医療的ケア対象児のみならず、医療的ケア対象児の児童にも適切な支援が提供できるものと考えられる。 ○福祉型児童発達支援センターにおける従業員及び員数の基準が緩和され、看護師も従業員数に含めることになれば、同センターでの医療的ケア児の受け入れも進むと思われる。特に当県内には医療型児童発達支援センターがないため、基準の緩和を求める。 ○本市では、児童発達支援センターの設置を平成31年12月開設に向けて進めている。 様々な障害や医療的ケアが必要な児童がセンターを利用することが想定されるため、様々な状態に応じた支援が可能となる習熟した看護師の常駐が不可欠とされている。しかし、現行の基準では、主として重症心身障害児が通うセンター以外では看護師が求められる従業員に含めることができない。 主として重症心身障害児を運ぶせていない事業所においても、事業所の判断で看護師を配置した場合に、基準で定められている医療指導員及び保育士の総数に看護師を含むことが可能となれば、様々な障害を持つ児童や医療的ケアが必要な児童がより安心してセンターを利用することができるようになる。 ○福祉型児童発達支援センターに看護師を配置したいが、従業員数に含めることができないため、配置ができない。看護師を配置することで、他の従業員が安心して子どもの支援ができるようになり、医療的ケア児の受け入れが可能となる。	福祉型児童発達支援センター(主として難聴児を運ぶ福祉型児童発達支援センター)及び主として重症心身障害児を運ぶ福祉型児童発達支援センターを除く。以下同じ。) 人員基準は、児童に対する支援を適切に行う観点から、児童指導員、保育士及び機能訓練担当職員の総数に基づくものとしている(児童福祉施設の設備及び運営に関する基準(昭和23年厚生省令第63号))。 また、平成30年度障害福祉サービス等報酬改定において、看護職員の配置を評価する加算を創設し、医療的ケアが必要な障害児の支援の充実を図る等、既に一定の対応を行っている。



管理番号	提案区分		提案事項(事項名)	求める措置の具体的内容	具体的な支障事例	制度改正による効果 (提案の実現による住民の利便性の向上、行政の効率化等)	根拠法令等	制度の所管・関係府省	団体名	その他 (特記事項)	<追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)>		回答欄(各府省)
	区分	分野									団体名	支障事例	
33	B 地方に対する規制緩和	医療・福祉	保育教諭の経過措置等に関する見直し	幼保連携型認定こども園に置かなければならない保育教諭については、幼稚園教諭の普通免許状を有するとともに、保育士登録を受けた者でなければならないとされているところ、経過措置として平成31年度まではいずれかの資格だけでも保育教諭になることができ、当該経過措置を延長していただきたい。 なお、経過措置が延長されない場合において、保育士登録を受けているが、幼稚園教諭の免許が更新されない者については、少なくとも平成32年度に失職するのではなく、専ら3歳未満児の保育に従事する保育教諭と見なしていただきたい。	幼保連携型認定こども園には、保育教諭の配置が義務づけられており、経過措置は原則、保育教諭は幼稚園教諭免許と保育士の両方の資格を有する者でなければならないと定められている。これらの資格のうち、幼稚園教諭免許は更新制度が導入されていることから保育教諭として勤務継続するためには年に1度の免許更新をしなければならない。しかし、本市の公立こども園に勤務している保育教諭の中には、その免許を更新しない意向の者が少なからずいる。 免許更新をしない主な理由は、保育需要の高まりを受けて、保育教諭がさらに必要となる中、保育現場では十分な余剰人員がいなく、免許更新に費やす時間が確保できないからである。 経過措置が延長されないことによる問題は、無資格者を含む園児の世話をするスタッフ数の変動は緩やかな曲線を描くのにに対し、保育教諭数は平成31年度を境に大きな投資が伴ってしまうことである。本市としても、保育教諭の確保や免許更新の促進を進めているところであるが、地域において保育教諭の絶対数や免許更新機能も少ないため、引き続き、幼稚園教諭の免許更新ができていない保育教諭にも協力してもらわないと必要な人員の確保が困難であるという現状である。 以上より主に次の2点の支障を懸念している。 ①経過措置終了後、保育教諭不足に伴う待機児童が発生すること。 ②幼保連携型認定こども園への移行を阻害する要因と成り得ること。	経過措置が延長されることにより、平成32年度以降も保育の受け皿を確保することができ、待機児童の増加の抑制につながる。 また、経過措置が延長されない場合においては、幼稚園教諭の免許更新がされなくても、3歳未満児の保育教諭になることができるようになり、免許更新に伴う職員不足はほとんど発生しないと思われる。		内閣府、文部科学省、厚生労働省	九重町			旭川市、秋田市、船橋市、川崎市、須賀市、山形市、豊田市、田原市、草津市、大崎市、八尾市、兵庫県、神戸市、和歌山市、玉野市、徳島県、松浦市、熊本県、大分市、佐田市、日持市、竹田市、豊後高田市、宇佐市、豊後大野市、由布市、姫島村、日出町、玖珠町、九州地方知事会	○現在多くの保育士は幼稚園教諭免許を所持しているが、保育ニーズが高まりにより全国的に保育士不足状況が続いている。経過措置期間経過後、勤務している保育教諭が退職した場合、保育教諭の不足により待機児童が発生する可能性が排除できない。 ○認定こども園に従事する職員の大半は両方の資格を持っているが、一部にどちらか一方のみの資格を有している職員がいる事は把握しており、当該施設では31年度での経過措置終了後に、当該職員をプレ保育などへ配置転換することを検討している。 本提案の3歳未満児の保育に従事する職員と見なす取扱いは、待機児童解消の観点から非常に有益であり、定数とも前向きに検討していただきたい。 ○幼保連携型認定こども園の設置者からは、保育の担い手となる人材が不足する中で、保育士と幼稚園教諭免許の資格の併有が必要な保育教諭の安定的な確保に苦慮しているとの声が多く聞かれている。また、本市においては、未だ幼保連携型認定こども園への移行がそれほど進んでいない現状があるが、他の都道府県における移行状況を踏まえると、移行の動向が、今後活発化することも予想されるため、経過措置の終了が移行の妨げとならないよう、特例期間が延長される必要性は高いと考えられる。 ○現在移行先の園のほとんどの保育教諭は両資格を取得済みであるが、今後移行促進するうえで、経過措置期間の延長が必要である。 ○平成31年度中に、特例制度の対象とならず片方の免許状・資格取得ができない保育教諭が少なからず存在している。そのため、平成32年度以降は保育教諭としての勤務ができず、ひいては幼保連携型認定こども園での園児の受入数が減り、待機児童数が増加することが予想される。 ○本市においても、同様の支障が出るのが想定されており経過措置の期間延長を要望する。 ○企業主導型保育事業の推進等により、保育教諭等の確保が困難となる中、各施設においては、人員配置上の制限から、幼稚園免許状更新のための受講機会の確保が十分にできず、また、講習実施主体においては、受講希望者が定員数を上回っており、受講しなくては受講できない者がいる。平成31年度末においても、この状態が解消されることは見込めないため、経過措置を延長し、平成32年度末までの移行期間の延長を要望する。 ○保育需要の高まりを受けて、保育士確保が喫緊の課題となっているが、現状では、特例措置の期間中に全ての職員が保育教諭の免許・資格を取得することが困難となっており、幼稚園教諭免許と保育士資格のどちらか一方のみを有する職員の協力を得ないと必要な保育士人員の確保が難しい状況である。 ○本市においても、経過措置期間終了後を見据え、各園に対して両方の有効免許・資格の保有を啓発しているところがありますが、保育士・保育教諭の人員不足が全国的に課題となっており、大阪府においても、保育士の平成31年度の有求人倍率が、5.13となつている現状です。この中で、保育教諭の要件を具備することが困難な状況が出た場合、新たな職員の確保をすることも難しく、ひいては職員不足による保育の質の確保や待機児童解消対策上も支障があると考えています。については、経過措置期間終了後に幼保連携型認定こども園において、保育教諭数の不足により、教育・保育の提供が不可能となることがないよう、経過措置期間の延長等の措置を講じてもらうよう要望します。 ○本市においても、幼稚園教諭免許または保育士いずれかの資格のみを有する者もおり、幼稚園教諭免許を更新しなければならない者もいる。それにより、現在は幼保連携型認定こども園の職員資格の基準を満たしているが、32年度より基準に達しない者も出てくることと考えられる。さらに、人員配置基準を満たせず、幼保連携型認定こども園への移行の断念が懸念されることにも、幼稚園教諭および保育士資格もも限りがあり、32年度までに対象者全員が資格を取得することは困難な状況となっている。そこで、経過措置期間が延長されることとなれば、32年度以降も保育の受け皿を確保することができ、待機児童解消に繋がると考える。 ○平成30年2月時点で、市内にある教育・保育に携わる認定こども園の正規職員で96.9%、非正規職員も含めると施設全体では約93%の職員が、幼稚園教諭免許状と保育士資格を併有している。一方、今後認定こども園への移行も想定される認可保育所では、正規職員が約85%、非正規職員も含めると施設全体では約83%の職員が併有している。特例制度を活用した資格取得支援事業を実施しており、同事業を活用して毎年度資格取得者が増えているものの、すべての施設で併有率は100%にはなっていないため、現在の受け入れ体制の維持と幼保連携型認定こども園への移行の阻害要因とならないよう、可能であれば経過措置の延長を検討していただきたい。 ○本市においても、特例措置の期間中に免許・資格の取得を促進しているが、保育教諭不足の中で、資格・免許取得のために現場から離れる必要があり、現状では特例措置の期間中に全ての職員が保育教諭の免許・資格を有ることが困難となっている。経過措置が終了することにより、保育教諭不足に伴う待機児童が発生することがないよう、経過措置の延長をしていただきたい。また、潜在保育士の中には幼稚園免許の更新をしていない者が多いため、経過措置が延長されない場合においては、保育教諭と見なすことができない。保育士登録を受けている幼稚園免許が更新されていない者については、少なくとも3歳未満児の保育に従事する保育教諭と見なしていただきたい。 ○当該経過措置の延長については、県内施設からも要望がある。 ○保育士不足が深刻化している中で、経過措置を終了させるのは時期尚早と思われる。 ○本市では、近年、待機児童対策として施設整備を行っており、幼保連携型認定こども園においては平成30年4月1日までに14の施設を開設している。しかし、その一方で保育士や幼稚園教諭の有資格者の確保が困難な状況となっており、特に両方(保育士・幼稚園教諭)の資格を必要とする同施設においては、人材不足の面から、一方のみの有資格者や子育て支援員を採用し、採用後、不足する資格を取得させることにより、必要な従事者を確保することとなるが、その期間が足りなくなる状況を危惧しているため、特例措置期間の延長を行っていただきたい。また、経過措置が延長されない場合においても、失職するのではなく、一定程度の配慮をお願いしたい。
34	B 地方に対する規制緩和	医療・福祉	放課後等デイサービス利用対象児童の拡大	現行規定では、学校教育法第一条に規定する学校に通う児童のみが放課後等デイサービスを受けることができるが、学校教育法第二百二十四条に規定する専修学校に通う児童においても、放課後等デイサービスを受けることを可能とするよう児童福祉法の基準の緩和を求める。	専修学校3年生の児童の保護者より、希望の放課後等デイサービス事業所が見つかったので利用したいと4月に相談があったが、専修学校は学校教育法第一条に規定する学校ではないため利用できなかった。当該事業所は児童発達支援の指定を受けていなかったため、その事業所は確約できるを得なかった。その後新たに児童発達支援の指定を受けている事業所を探して、改めて申請の相談があったが、本人の誕生日が5月であり、既に18歳に到達していたため、結局は利用には至らなかった。 このように本市では、専修学校に進学したために放課後等デイサービスを利用できず、児童発達支援の利用に変更している事例がある。中学校卒業後もほとんどの児童が引き続き放課後等デイサービスの利用を希望する中、学校教育法第二百二十四条に規定する専修学校に進学した児童は、他の事業所に変更する必要があるが、日中活動の場のみでなく放課後の療育施設まで変わってしまうことは、今まで築いてきた人間関係を全てリセットして新たな関係を築かねばならず、進学による環境の変化に拍車をかけて、当該障害児に精神的負担を与えてしまう。また、新施設への手続き等の負担を保護者にも負わせることとなる。さらに、放課後等デイサービスが必要に応じて満20歳まで延長できる年齢特例要件があるのに対し、児童発達支援は年齢に関する特例がないため、年度途中でサービス終了となる等利用者にも負担を強いている。	児童福祉法の改正によって、専修学校に通う児童についても、中学校卒業後も引き続き放課後等デイサービスを利用することが可能となり、公正・公平な安定的サービスを提供することができるようになる。	児童福祉法第四条、第六条の二の二、第二十一条の五の十三、学校教育法第一条、第二百二十四条	厚生労働省	東大阪市		福島県、貝塚市、伊丹市、出雲市、府中町、宮崎市	○地域における課題 19歳以上の児童に対応可能な児童発達支援事業所が少ない。 ○放課後等デイサービスを利用していた児童が、中学校卒業後、専修学校に進学したため、放課後等デイサービスは利用できなくなり、児童発達支援のサービスに切り替えられた。利用していた事業所は、たまたま放課後等デイサービスと児童発達支援の両方の指定を受けていたため、事業所は変わらず利用できた。今年高校3年生になるこの児童は18歳になる6月末まで、児童発達支援の利用が終了となる。長年利用することで安定していた生活リズムなどが変化するなど教育を受けられなくなることでの影響を心配し、家族や支援者から継続して利用できないとの相談があった。市としては、児童福祉法で放課後等デイサービスの対象が学校教育法第一条に規定する学校とあるため、専修学校の生徒は利用できない。児童発達支援に切り替えても、年齢に関する特例がないため、誕生日までの利用になるとの説明をするしかない状況である。このように障害児の進学先等で放課後等デイサービスの利用ができないことについて、公正・公平に市民対応できるように改善していただきたい。 ○高等学校に進学しなかった(できなかった)障害児についても療育が必要であれば、放課後等デイサービスの利用ができるよう児童福祉法の基準の緩和を求める。 ○近年、特別児童扶養手当受給者など、中等度の発達障がいのある児童においても、専修学校における受け入れが進んでいるため、制度改正の必要性があるものと考え。 ○学校教育法第一条に該当しない、インターナショナルスクールや、短期学校等に在籍する学齢児に対して、放課後等デイサービス事業を利用できなかった事例あり。	



別添1

管理番号	提案区分		提案事項(事項名)	求める措置の具体的内容	具体的な支障事例	制度改正による効果 (提案の実現による住民の利便性の向上、行政の効率化等)	根拠法令等	制度の所管・関係府省	団体名	その他 (特記事項)	<追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)>		回答欄(各府省)	
	区分	分野									団体名	支障事例		
														団体名
38	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	企業主導型保育事業の開設に係る手続きについて	保育所や小規模保育事業の認可については、「市町村子ども・子育て支援事業計画」に基づいての供給調整が認められているが、企業主導型保育事業は制度上認可外保育施設であり、この供給調整の対象とはならない。 地域のニーズ調査等に基づき策定している事業計画との整合性を図り、有効かつ効率的に整備を進めること、また既存の保育園や企業主導型保育事業所が定率的に運営できる必要があることから、企業主導型保育事業の開設に当たり、「地域枠」を設ける際には、自治体へ事前協議を行うようにされた。	企業主導型保育事業は認可外保育施設であることから、市への法的手続きは事業開始後に開設届を提出するのみであり、事前に開くことが困難な制度設計となっていることから、「市町村子ども子育て支援事業計画」において、保育の量の見込みがなく、定員割れの園が多数生じている区域においても地域枠を認定した企業主導型保育事業所が開設され、保育提供体制の供給過剰状態を助長する例が生じるなど、需要(自治体)と供給(事業者)のミスマッチが生じている。	(1)企業主導型保育施設の設置に前向きな事業者(供給)と、保育施設の不足する地域への整備に前向きな自治体(需要)とのミスマッチを防ぐ。 (2)事前に設置者と協議を行うことで、地域の保育供給量をより的確に把握することができ、効率的に事業計画を策定・推進することができる。	企業主導型保育事業費補助金実施要綱第3の2の4(1)	内閣府、厚生労働省	京都府、滋賀県、堺市、兵庫県、神戸市、鳥取県、徳島県		いわき市、豊田市、池田市、山口県、高松市	○既存の認可保育所等のすぐ近くに企業主導型保育事業所が建設された場合、市内に待機児童が発生しているものの、認可保育所等と企業主導型が近接している部分だけには空きが生じることが想定されるため、企業主導型保育事業所を開設する際に「地域枠」を設ける場合には自治体へ事前に協議するようすべきであるとする。 ○自治体が整備した地域に、地域枠定員を設けた企業主導型保育事業所が開設され、需要(自治体)と供給(事業者)のミスマッチが生じることがある。 ○「平成30年度企業主導型保育事業の募集について(児童育成協会)」においては、申請に当たっての注意事項が設けられ、地域枠を設ける場合、当該地域の保育ニーズを踏まえた設定とする観点から、地方公共団体に相談に行くことを促している。このことにより、当市にも申請に先立って相談に来る事業者がいるが、すべての事業者が事前相談に来ているかどうかは不明であるため、地域の保育供給量を的確に把握するため、事前相談の機会を設けることは望ましい。 ○平成30年度企業主導型保育事業の募集について(児童育成協会)においては、申請に当たっての注意事項が設けられ、地域枠を設ける場合、当該地域の保育ニーズを踏まえた設定とする観点から、地方公共団体に相談に行くことを促している。このことにより、当市にも申請に先立って相談に来る事業者がいるが、すべての事業者が事前相談に来ているかどうかは不明であるため、地域の保育供給量を的確に把握するため、事前相談の機会を設けることは望ましい。 ○また、事業計画は支給認定(2号、3号(0歳及び1、2歳別))で確保の内容を設定するもの、企業主導型保育事業については、年齢別の定員設定までは求められておらず、事業計画で確保の内容に含める場合に考慮している。 ○制度上、市町は企業主導型の開設に関与できないため、供給過剰となる地域が生じる等支障がある。	企業主導型保育事業は、事業主拠出金を財源として、企業における従業員の仕事と子育ての両立支援の推進を図る観点から、企業が主体となって事業を実施しているが、事業の円滑な実施のためには、自治体とも連携しつつ取り組まれることが望ましいと考えており、平成30年度の事業においては、地域枠を設ける予定の事業者は、当該地域の保育ニーズを踏まえた設定とする観点から、地方公共団体に相談に行くこととしており、これを申請要件としている。従って、本件については既に措置済みであるとする。
40	B	地方に対する規制緩和	環境・衛生	飼い主登録を徹底するための登録窓口の一元化	飼い主登録の徹底を図るため、市町村、APO(動物ID普及推進会)の他、任意団体等が窓口となっている飼い主登録について一元化を行う。	環境省が推進するマイクロチップによる登録と、厚生労働省が所管する狂犬病予防法に義務づけられる犬の登録制度については、二重登録制度となっており、双方の推進の妨げとなっている。 特に、申請者である飼い主からすれば、狂犬病の登録、マイクロチップの装着のため、それぞれの窓口で登録する必要があり、それぞれで手数料を負担しており、申請者の事務負担・費用負担の観点から非効率である。 〔参考〕犬の登録手数料3,000円、狂犬病予防注射3,000円、マイクロチップのデータ登録料1,000円(チップ装着代等は別) マイクロチップデータの登録については、狂犬病法第4条に基づく登録原簿への記載にデータに新たに一つデータを追加することで対応できると考えられ、市町村側の負担も少ないと思われる。 また、登録窓口が一元化され、所有者明示と狂犬病予防接種が推進されることで、例えば登録された犬や迷子の犬が保護された際、その犬のマイクロチップの登録情報から狂犬病予防接種の状況が確認できたり、仮に狂犬病の犬が保護された場合、当該犬の所有者の居住地から、当該地域における迷子や犬の予防措置に取り組むことができたりするなど、県としての広域的な狂犬病予防対策にもつながる。	・飼い主登録が徹底されるとともに、登録制度の合理化が図られる。 ・飼い主の費用負担が軽減される。	狂犬病予防法第4条 動物の管理及び管理に関する法律第7条 動物が自己の所有に係るものにすることを明らかにするための措置について (平成18年1月20日 環境省告示第23号) 第4(2)イ	厚生労働省、環境省	徳島県、兵庫県、神戸市、和歌山県、鳥取県、愛媛県、高知県		福島県、新潟市、神山村、高松市	○飼養される犬のうち小型犬が占める割合が増えたため、室内飼いが増加している。未登録犬の発見が困難であるため、狂犬病予防法の登録の義務が強化される恐れがある。任意団体でのマイクロチップの登録と、狂犬病予防法による登録が一元化されれば、未登録の防止と、犬の逃走時や狂犬病が疑われる事例が発生した場合の初期対応に効果があると考えられる。またマイクロチップは、複数の団体が管理している現状では効果が少なく、少なくとも横断的に検索できる仕組みづくりが必要と思われる。 ○厚生労働省が所管する狂犬病予防法に基づく犬の登録制度と、環境省が推進する犬へのマイクロチップ装着は、どちらも犬の所有者を明らかにするための手段であるが、犬の所有者にとっては2重の負担となり、過分の負担をかけている。このことを踏まえ、所有者登録を推進するためには、狂犬病予防法が定める種別で代わるものとして、マイクロチップを定め、その情報を管理するルールを設ける必要がある。 ○各市町村で使用する犬の登録等のデータが、業者が構築したシステムで管理していることが多く、登録項目を1つ増やすだけでも仕様変更となり、それに伴う費用が生じる可能性がある。また、登録や注射の受付を委託している獣医師会においても、登録等データを独自のシステムで管理していることが多く、同様の支障が生じると考えられる。現在、登録等データは各々のシステム等で管理しており、転入や転出があれば、文書により登録等情報を送付しあっている。マイクロチップ等の登録窓口を一元化するのであれば、データシステムについても統一化を行うことで、各市町村におけるシステム等の管理や、登録等のデータを市町村同士でやり取りすることはなくなるため、事務負担や費用負担が軽減される。また、市町村に限らず、都道府県や警察等からもそのシステムで照会できるようにすれば、迅速に犬の所有者を発見することが可能となり、効率化が図ることができると考えられる。 ○飼い主の負担を軽減することによって、所有者明示が推進され、県に引き取られた犬種の飼い主への返還率が向上する可能性が高くなるという効果が期待できる。 ○放浪犬を捕獲した際に、鑑札を装着しているケースはほとんどなく、飼い主の特定が困難なケースが多い。マイクロチップの装着を含めた飼い主登録が徹底されることにより、迅速に飼い主の特定を行うことができる。	犬等のマイクロチップの情報登録については、動物の所有者明示を促す観点から、民間団体によって任意で行われています。一方、犬の狂犬病予防法に基づく登録については、狂犬病の発生予防及びまん延の防止の観点から、狂犬病予防法(昭和二十五年法律第二百四十七号)上の義務として行われています。 狂犬病予防法に基づき義務化されている登録の窓口(市町村)と任意で行っているマイクロチップによる情報登録の窓口(民間団体)の一元化については、飼い主の個人情報等の取扱が関係することから、法的根拠等が必要である。 自民党どうぶつ愛護推進マイクロチップPTにおいて、平成30年4月にマイクロチップ装着・情報登録制度の骨子が取りまとめられ、マイクロチップ登録手続きのワンストップ化に向けて今後検討していくこととしており、動物の愛護及び管理に関する法律(昭和四十八年法律第百五号、以下「動物愛護管理法」という。)の前回(平成二十四年)改正時の附則第14条に基づき、犬等のマイクロチップの装着に関する情報登録等の義務化について検討していきます。
47	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	放課後健全育成事業に係る放課後児童支援員の資格要件の対称者の拡大	放課後児童健全育成事業(学童クラブ)の職員については、準国家資格である「放課後児童支援員」の資格が設けられ、1単位ごとに2名の支援員を配置する必要があるが、支援員の資格要件として、保育士、社会福祉士、幼稚園や小中学校の教諭資格などの有資格者、高等学校卒業業者等であって児童福祉事業に類似する事業に2年以上従事した者、高等専門学校卒業業者等であって児童福祉事業に類似する事業に2年以上従事した者であって、市町村長が適当と認められたものが定められている。 この「児童福祉事業」又は「放課後健全育成事業に類似する事業」の定義が不明確なため、県の基準を満たしている認可外保育所で従事している者が対象となるか判断できないため、新たに人材を確保している状況である。 沖縄県の実情として、戦後の福祉事業の遅れから、学童クラブを含めた保育事業を民間である認可外保育施設等で実施してきた経緯があり、施設を新増設する民間事業所が増えてきていることから、学童クラブのニーズの高まりに対応するには、沖縄県特有の児童福祉行政を踏まえた放課後児童対策を講じる必要があると考える。	認可外保育施設での実務経験者を人材として有効的に活用することができると考えられる。また、民間の放課後児童クラブにおいて新設クラブの開設や拡充をする際も、人材確保が見込めるため、円滑に新増設を行うことが可能となる。	放課後児童健全育成事業の設備及び運営に関する基準	厚生労働省		うるま市		高松市、高知県、沖縄県	○放課後児童クラブには2人以上の支援員(1人を除き補助員で代替可)の配置が必要とされているため、交代要員を含めた人員の確保が困難な児童クラブもある。資格要件の緩和ができれば、より多くの人材を活用することができ、支援員の交代要員等人員の確保が容易になる。 ○本市においても、放課後児童支援員の確保については非常に苦慮しているところであり、基準に規定されている資格要件の解釈の拡大については、人員を確保する上で重要と考える。 ○本県では、同一市町村内だが通勤に1時間近く要する他地域から人材を確保している等、特に中山間地域で人材が不足している現状にある。現時点では本県別事業と同様の支障事例を承知していないが、本制度が規模や周辺環境などが異なる多様な全県の放課後児童クラブに一律の基準を適用していることにより、様々な支障が生じている状況は見直されるべきと考える。	児童福祉法第59条の2第1項に規定する保育等の業務を行うことを目的としている認可外保育所等の2年以上の従事経験がある者については、現行でも放課後児童健全育成事業の設備及び運営に関する基準第10条第3項第3号を適用することが考えられるが、認可外保育施設には多様な類型があることから、年末までに整理を指示したい。

管理番号	提案区分		提案事項(事項名)	求める措置の具体的内容	具体的な支障事例	制度改正による効果 (提案の実現による住民の利便性の向上、行政の効率化等)	根拠法令等	制度の所管・関係府省	団体名	その他 (特記事項)	<追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)>		回答欄(各府省)
	区分	分野									団体名	支障事例	
49	B 地方に対する規制緩和	医療・福祉	介護保険法第24条の2第2項に係る調査業務を地方自治体が指定市町村事務受託法人に委託する際の職員の資格要件緩和	地方自治体が指定市町村事務受託法人に介護認定の訪問調査(新規申請分)を委託する際の職員の資格要件を介護支援専門員に限らず、「社会福祉士」、「介護福祉士」等の福祉資格や、「保健師」、「看護師」、「准看護師」、「理学療法士」等の医療的な資格まで広げる。	これまで介護認定における新規申請分の訪問調査は、市職員が行っていたが、介護支援専門員でなくても社会福祉士等の資格と、県及び市で実施している研修受講により調査業務を実施可能としていた。しかし、指定市町村事務受託法人への委託に関しては、介護保険法第24条の2第2項によると、「介護支援専門員その他厚生労働省令で定める者に当該委託に係る調査を行わせるものとする。」とあるが、埼玉県に確認したところ、これに該当する省令が無い。介護支援専門員でない調査員はできない状況である。介護支援専門員は介護保険法第7条第5項に、要介護者等からの相談に対し、適切なサービスを受けられるように市町村やサービス事業者との連絡調整を行う者であって専門的知識及び技術を有する者と記載がある。このことから、介護支援専門員はケアプラン作成のために資格を取得するため、指定市町村事務受託法人が調査業務で募集をかけても応募が少なく人材確保が困難となっている。実際、本来であれば、平成30年4月から新規申請の調査も合わせて月540件の調査を委託するはずだったが、事務受託法人が介護支援専門員資格のある調査員を確保できないことにより、140件は市の調査員が行わなくてはならず負担がかかっている。このため、介護認定の申請から調査実施までに期間が助かり、介護保険法で定められた30日以内に認定結果を出さなければならないこと、40日以上かかることもあり、認定業務全体に遅れが生じている。	住民の利便性については、介護認定の調査業務が円滑に進むことにより、認定機関期間の短縮につながる。また、福祉資格や医療資格を持ちながら仕事に就いていない人の雇用促進にもなる。行政としても、調査員の長期雇用により人件費の高騰や事務スペースの確保などの課題があるが、調査業務の委託化により、市で任用している臨時雇員の人員削減や事務スペースの狭狭化解消にもつながる。	介護保険法第24条の2第2項	厚生労働省	所沢市	資料1「介護認定調査員の職員資格要件緩和と県で開催されている研修について.pdf」	石岡市、八王子市、山梨市、名古屋市、豊田市、田原市、神戸市、伊予市、宮崎市	○現在、当市では、社会福祉法人に訪問調査業務(更新・区分変更)を委託している。調査業務を全部委託する場合、調査員の資格が、介護保険法第24条の2第2項による介護支援専門員その他厚生労働省令で定める者となるため、現時点においても、受託者は人材確保に大変、困難にしている。 ○また、次年度以降、指定市町村事務受託法人との訪問調査業務(新規)の委託を検討しているが、ここで受託すること、介護支援専門員の人員確保が保障となる。受託法人委託する際、職員の資格要件が緩和されることで、スムーズな外部委託の実施につながり、行政としても、調査業務を外へ委託することで、時間外勤務等の人員削減及び事務の効率化につながる。また、福祉資格や医療資格を持ちながら仕事に就いていない人の雇用促進につながる。 ○本市においても事務受託法人に、更新申請の調査を中心に約1,000件/月の調査を委託している。しかしながら、調査員の多くは居宅介護支援事業所に所属する介護支援専門員であり、それぞれにケアマネジメント業務を持っていることから、これ以上の調査件数の増に対応することは難しいのが現状である。 ○また、平成30年に介護支援専門員の受験資格から、介護等業務従事者(東京都における合格者の8%程度)の受験資格が削減したことにより、介護支援専門員の受験者数及び合格者数の減少が考えられ、認定調査業務を行う介護支援専門員数の大幅な伸びは見込めない。2025年には団塊の世代が75歳を過ぎ、介護保険制度を必要とする被保険者の数が増加すると見込まれる。上記のような理由から、調査資格を有し、一定の専門知識を有する者については、必ずしも介護支援専門員の資格を必要としない制度改正により、認定調査員の担い手を増やすことが望まれる。 ○特別に病院入院中の新規申請や区分変更申請等に対し、看護師や准看護師による認定調査を実施することができれば、退院後の被保険者の生活に備えた、効果的な調査体制にもなるものと考えられる。 ○本市でも指定事務受託法人に介護認定調査を委託しているが、調査員として採用する介護支援専門員が集まらず、申請件数の増加を元にした認定に採用予定者を下回る状態となっている。また、現在の調査員の高齢化も進んでおり、調査員の安定的かつ継続的な確保も課題となっている。今後の急速な高齢化にも対応できる安定的な介護認定調査業務の実施のため、調査員要件緩和について、至急対応いただきたい。 ○支障事例としては、指定市町村事務受託法人が調査員の募集をかけても、介護支援専門員の資格を有している者からの応募が少なく人材確保が困難であり、認定事務の遅れにつながる。 ○本市においては、原則、直営調査は行わず、新規申請及び変更申請は指定市町村事務受託法人に委託している。しかし、本市指定市町村事務受託法人において、年々、調査員の確保が困難になっており、認定調査が大幅に遅れる事態となった。これにより、年度末時点において、未調査数が通常300から500件のところ、平成30年3月31日時点では、約1100件が未調査となり、相互協力で行っていた他市町村からの新規申請に対する認定調査も、近隣市町村は、自身で調査したくよう依頼している状況である。認定調査員確保のため、地方自治体が指定市町村事務受託法人に介護認定の訪問調査(新規申請分)を委託する際の調査員の資格要件を介護支援専門員に限らず、国家資格である「社会福祉士」、「介護福祉士」等の福祉資格や、「保健師」、「看護師」、「准看護師」、「理学療法士」等の医療的な資格まで広げ、また、市職員として認定調査を行った市職員OBも可能とするよう要望する。 ○本市は平成30年度から認定調査の一部を事務受託法人しているが、市内社協には受けてもらえず、委託先をプロポーザルにより民間事業者に決定した。しかしながら、全国的に、認定調査を委託可能な民間事業者はほとんどないことから、調査員資格を「国家資格所持者(保健師、保健師、理学療法士、作業療法士または社会福祉士、介護福祉士)」まで拡大すれば民間事業者は増えてくると思われ、契約の際にも競争性を持たせることが可能となる。調査員の拡充により、市且の結果通知の日報短縮が見込める。当該で実施している事務受託法人においても人材不足が生じているため、資格拡大により調査員確保は期待できると思う。	認定調査を委託する場合は、調査の質の確保の観点からアセスメントに係る技術等を持っている介護支援専門員に限るとしている。また、介護報酬は、サービスによって要介護状態区分が高いほど報酬が高くなる事業所として有利であり、認定調査員が介護状態区分を作為的に高くする恐れがあるため、認定調査の実施に当たっては、中立・公正性を確保することが必要である。これを踏まえ、どのような条件であれば介護支援専門員以外に認定調査を委託できるのか、まずは認定調査の実施状況を把握した上で、具体的な対応について平成31年度中に結論を得る。
52	B 地方に対する規制緩和	医療・福祉	重度訪問介護の訪問先に係る制限の緩和	常時介護が必要な重度障害者が在宅勤務している場合、勤務時間中に居宅で重度訪問介護を利用可能とすることを求める。	○全身の筋力が低下する難病(先天性筋線維型不均等症)により、ベッドホールド在宅勤務している場合、勤務時間中に居宅で重度訪問介護を利用可能とすることを求める。 ○重度訪問介護の提供場所は居宅や病院等に限定され、職場は認められていない。そのため、本件の場合、作業を行っていない休憩時間(12時～13時)中に限り、食事や排せつに係る支援を受けることができるが、その他の時間(9時～12時、13時～16時)は重度訪問介護を利用することができず、見守り支援を受けることができない。 ○就労していない場合にはサービスの利用が可能であるにも関わらず、在宅で勤務した場合には勤務時間中にサービスを利用できなくなることは、公平とはいえない。	重度訪問介護の訪問先に係る制限を緩和することにより、重度障害者の社会参加を支援することが可能となる。	障害者総合支援法第5条第3項、障害者総合支援法施行規則第1条の4の2	厚生労働省	さいたま市		川崎市、京都市、宮崎市	○先天性難病により、人工呼吸器装着、顔回など吸引が必要で、全身性障害のため常時介護が必要な重度障害者が、会話及びタッチパネル操作が可能のため大学卒業後就職を希望している。雇用主による合理的配慮は、本人が就労するに当たっての支援については可能であるが、個別性及び専門性の高い医療的ケアについては認められず結果として就業の機会が奪われている。常時介護が必要な重度障害者が就職する事例は稀な状況の中、特に医療的ケアについては就業の有無に関わらず生命維持のために必要となり、重度訪問介護の提供場所から就業先及び通勤中が除かれていること合理的でない。就業のための支援と生命維持のための支援を切り分け、必要な重度訪問介護が就業先にも提供されることで、医療的ケアが必要な重度障害者の雇用の機会が拡大されることを求める。	在宅就労中の障害者の支援については、障害者の在宅就労により恩恵を受ける企業自身が支援を行うべきという考えがあり、障害を理由とする差別的解消の推進に関する法律(平成25年法律第65号)においても企業等に障害のある方の困難に対する配慮が求められている。こうした中、個人の経済活動に對し障害福祉施設として公費負担で支援を行うことについては、事業主による個々の障害特性に応じた職場環境の整備(ヘルパーの配置等)などの支援の後述が、在宅就労中の支援については、慎重な対応が必要である。
54	B 地方に対する規制緩和	医療・福祉	家庭的保育事業等の設備及び運営に関する基準の見直し	以下の理由により、小規模保育事業等の連携施設の確保が進んでいない。いずれの施設も保育士確保に苦慮中であって、代替保育を提供するための職員確保が困難。 ○本市における小規模保育事業等は、正規職員のほか臨時職員を含め人員を十分に確保できていることから連携施設による代替保育の提供を必要としない施設が多く、基準第6条第2号の規定が連携施設確保の足かせになっている。 ○卒園児の受け皿となる連携施設については、保育ニーズが高まり、いずれの認可保育施設も利用希望者が多い中、小規模保育事業等の卒園児を優先的に受け入れるための枠を確保しておき(余裕がない結果、保護者が当該施設を利用することに不安や負担を感じている。 ○経過措置により、連携施設を確保しなくても事業認可が可能となっているが、経過措置終了までに連携施設が確保できない場合、認可基準を満たさないことになる。	・連携施設の確保が進み、事業者の参入や保護者による利用が促進されること、待機児童の解消に寄与する。 ・待機児童の解消により、安心して子供を預けられるようになることで、女性の就労が可能となり、女性活躍の更なる促進等に寄与する。	家庭的保育事業等の設備及び運営に関する基準(平成26年4月30日厚生労働省令第61号)第6条	内閣府、厚生労働省	さいたま市	【参考】家庭的保育事業、さいたま市認可外施設要綱	仙台市、須賀川市、石岡市、新産市、山梨市、豊田市、荏原市、大原市、倉敷市、沖縄県	○現在も小規模保育施設の連携施設の確保が進んでおらず、今後も連携施設の確保が困難であると予想されることから、経過措置期間終了後の平成32年4月1日以降に認可基準を満たさないこととなることを防ぐため、規定要件の緩和と経過措置期間の延長が必要と思われる。 ○連携施設の確保を求めることの見直しから、保育士が確保されていると判断できる基準や、見直し後も可能な限り連携施設を確保することを求めるなどが必要と思われる。 ○連携施設の確保が難しい中、連携施設として、認可基準を満たさない認可外保育施設は存在しない。 ○保育所、認定こども園への3号認定児童の申し込みが増え、3歳児の定員は、その施設の持ち上がりでほぼ一杯になってしまっている。連携しても小規模保育事業所からの入所が難しいため、私立の施設間の連携施設の確保が進んでいない状況にある。 ○連携施設として、小規模保育施設からの児童を受け入れる側の保育所としては、前年からの受け入れ枠を空けておく必要があり、経営に直結する問題となるため、連携が進まない。 ○経過措置終了までに連携施設が確保できず、万一認可取消となれば、当該事業所利用中の児童が行き場を失うことや保育の受け皿が減少するため、待機児童解消の取組にも大きな支障となる。 ○経過措置により、連携施設を確保しなくても事業認可が可能となっているが、経過措置終了までに連携施設が確保できない場合、認可基準を満たさないことになる。 ○市においても連携施設コーディネーターを設置して支援を行っているところであるが、卒園児の受け皿については、特に保育所において2歳児と3歳児の定員差の関係から、確保が困難に近づきつつあるなど、期限までに設定が完了しないリスクもあるため、経過措置の延長を求める。	①及び②について 保育の受け皿確保に当たっては、一定の保育の質が確保されている認可保育所を中心に整備していくことが必要と考えており、保育の受け皿拡充と保育の質の確保を「車の両輪」と取り組み必要がある。 家庭的保育事業等における連携施設の設けは、代替保育の提供や集団保育を受ける機会の提供など保育の質の向上の面で極めて重要な仕組みである。このため、連携施設は、地域の保育の中心的機能を有し、連携施設としての機能を総合的に担うことができ、一定の保育の質が確保された保育園・幼稚園・認定こども園が担うことが望ましいと考えており、これを緩和し、認可外保育施設対応に加えようとする提案に反対している。 また、「代替保育の提供」は、家庭的保育事業等の職員が病欠等により保育を提供することができない場合等に、当該施設を利用する保護者の安心や子どもたちが安心して保育を受けられる環境の確保にとって重要であることから、当該要件に限っても任意項目化することは困難。 なお、家庭的保育事業等の設備及び運営に関する基準(平成26年厚生労働省令第61号。以下「設備運営基準」という。)第6条第1項第6号に係る連携施設については、昨年12月に閣議決定された「平成29年度の地方から提案等に関する対応方針」に基づき、一定の保育の質が確保されている小規模保育事業A型若しくは小規模保育事業B型又は事業所内保育事業から確保することも可能となるよう見直しを行ったこと。 また、「平成28年の地方からの提案等に関する対応方針」(平成28年12月20日閣議決定)に基づき、家庭的保育事業等として、認可を行う時点で、連携施設の確保が困難であっても、市町村による利用調整の方法により、利用乳幼児に対する保育が終了する時点までに卒園後の受け皿を確保することを前提として認可することが可能である旨を周知している。 ③について 設備運営基準(附則第3条)に規定する特例措置の延長については、子ども・子育て支援法(平成24年法律第65号)の施行後5年の見直しの中で検討することとしている。	

別添1

管理番号	提案区分		提案事項(事項名)	求める措置の具体的内容	具体的な支障事例	制度改正による効果 (提案の実現による住民の利便性の向上、行政の効率化等)	根拠法令等	制度の所管・関係府省	団体名	その他 (特記事項)	<追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)>		回答欄(各府省)	
	区分	分野									団体名	支障事例		
55	B 地方に対する規制緩和	医療・福祉	一時預かり事業(幼稚園型)の人員配置基準の緩和及び幼稚園免許更新対象者の拡大	一時預かり事業(幼稚園型)の人員配置基準では、保育士又は幼稚園教諭の資格保有者を三分の一以上配置する必要があるが、幼稚園免許更新していない者(市町村長等が実施する研修を受講し、市町村長が過去の実務経験を認めた者)、小学校教諭及び養護教諭免許所有者も資格保有者として認められ、幼稚園免許未更新者が認められない場合には、免許更新ができる者に一時預かり事業を行う者及び行う予定の者も含めるようにしたい。	南房総市においては、4、5歳児のほとんどは幼稚園に通っており、教育時間前後及び長期休業中に保育が必要な子どもに対しては一時預かり事業を実施している。本市においては、幼稚園教諭の教材研究の時間を確保するため、一時預かり事業は幼稚園に勤務する者ではない専門の指導員(非常勤職員)を雇用しているが、資格保有者の確保に苦慮している。今後、当地域ではさらに資格保有者が減少していくことが予想される中、高齢者を積極的に採用していかなければ人材の確保が難しくなっていく。現時の基準による勤務体制では、一時預かり事業の継続が困難となっていく。また、水戸市においては、資格保有者の確保が困難である状況から、ほとんどの幼稚園において、教頭又は教諭及び資格を保有していない専門の指導員(非常勤職員)の2名体制で一時預かり事業を行っている。このことにより、教材研究等通常業務の時間が確保できず、教頭等の負担となっていることとあわせて、教頭等が出張等で不在の際は、一時預かり事業が行えない状況である。さらに、非常勤職員の中にある幼児教諭資格喪失者(かつては資格を所有していた者)を人員配置基準の資格保有者に含めることができない上に、現行規定では、教職員のみが免許更新の対象とされており、これらの者は幼稚園免許を更新できない。	南房総市では、小学校教諭や養護教諭免許状所有者を特別教育支援員として小学校に配置し、配慮が必要な児童等の指導に当たっている。制度改正が行われれば、小学校の長期休業中にこれらの者を一時預かり事業に従事させることができるようになる。柔軟な人員配置が可能となることで、引き続き質の高い幼児教育を保つまま、継続的に保育事業を実施することが可能となる。また、水戸市では、資格を保有していない専門の指導員(非常勤職員)に一時預かり事業を担当させることにより、教頭等の負担軽減が図られるとともに、一時預かり事業の開設日が増えることで、保護者の利便性が向上する。さらに、幼稚園教諭免許所有者で一度現場を離れた者の復職の門戸拡大や多様な働き方の促進にも資する。	児童福祉法、児童福祉法施行規則、児童福祉施設の設備及び運営に関する基準、教育職員免許法、教育職員免許法施行規則、免許状更新講習規則、一時預かり事業実施要綱	文部科学省、厚生労働省	南房総市、水戸市			川崎市、山梨県、玉野市、東温市、松浦市	○本市においては、市立幼稚園の預かり保育を実施するため、保育士又は幼稚園教諭の資格保有者を必ず配置する必要があることから、常勤職員を1名置いており、パート職員2名とともに預かり保育を実施しているが、常勤職員の教育研修や運営業務の時間を削って実施しているため、支障が出ている。また、幼稚園教諭の勤務時間の適正化について議論している中、預かり保育業務に携わる時間を削ることができないため、働き方改革が遅々として進まない状況である。幼稚園免許未更新者も預かり保育業務の資格保有者に含めることができるのであれば、人員の確保とともに常勤職員の負担軽減につながる。	【人員配置基準の見直しについて】 一時預かり事業(幼稚園型)においては、預かる児童の安全を守り、質の担保された教育・保育を提供するため、児童福祉法施行規則等において職員配置等に係る最低基準を設定している。人材確保が困難となっていることへの対応としては、平成28年度以降、①有資格者(幼稚園教諭普通免許状所有者又は保育士資格保有者)割合の緩和(1/2以上⇒1/3以上)、②有資格者以外の職員として子育て支援員以外の多様な人材を配置可能とするなど大幅な緩和を図っているところであり、保育所・認定こども園や一時預かり事業(一般型)など関連制度・事業の職員配置基準と比較しても相当柔軟化された取扱いとなっている。 一方で、御提案の免許失効者等を有資格者として認めることについては、幼児教育・保育に関する専門的な知見を有する者が不在となり、預かる児童の安全や教育・保育の質の確保が困難となることから、対応は困難である。 なお、一時預かり事業(幼稚園型)の補助基準額には有資格者(常勤・非常勤の幼稚園教諭)を適切に配置できるよう設定しており、平成28年度以降、更に長時間・長期休業中の預かりをより厚く行うことができるよう、毎年補助の充実を行っている。また、御指摘の人員配置基準は、あくまで一時預かり事業(幼稚園型)として国・都道府県の補助を受ける場合のみ適用されるものである。 【免許更新対象者の追加について】 教員免許更新制は教員として必要な資質能力が保持されるよう、定期的に最新の知識技能を身に付けることを求めた制度であるため、その更新対象は現職教員及び教育職員になることが見込まれる者に限定されている(教育職員免許法及び免許状更新講習規則)。 このため、当該事業に従事することのみをもって、免許状更新講習の受講対象者とすることは困難である。 しかし、当該事業に従事する職員を教育職員として採用する場合、上記の現職教員に該当する。(更新講習を受講する義務が生じ、幼稚園の園長から受講対象者証明を取得し更新講習を受講しなければならない)。 また、進捗が幼稚園に勤務した経験があることや、教育委員会や幼稚園等が作成する臨時任用教員リストへ登録されることなどにより、受講対象者となるため、具体的な状況について、別途、担当にご相談いただきたい。
59	B 地方に対する規制緩和	産業振興	中小企業等協同組合からの暴力団排除のための中小企業等協同組合法の改正	【支障】 近年、暴力団排除条例の制定等により暴力団の排除のための施策が全国的に導入されている中、中小企業等協同組合についても全国中央会が定める定款参考例へ暴力団排除の条項が加わったところである(平成27年)。しかし、中小企業等協同組合法には暴力団排除規定が置かれておらず、認可庁としては暴力団と関わりのある組合の認可を拒否したいが、法律上での明確な根拠がないことが支障となり、排除することが難しい。また、警察への暴力団罰金も、法律上での明確な根拠がないために行えない状況である。 【改正の必要性】 反社会的勢力の中心である暴力団を排除するには、社会全体で取り組む必要がある。犯罪対策関係会議の「世界一安全な日本」創造戦略)においても、「各種業・公共事業等からの暴力団排除の徹底」が明記されている。については、他法律(資金業法や水産業協同組合法など)と同様に、中小企業等協同組合法にも暴力団排除規定を追加することを求める。	中小企業等協同組合法	警察庁、金融庁、財務省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、国土交通省、環境省	京都府、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、和歌山県、鳥取県、徳島県、関西広域連合	石岡市、川崎市、綾瀬市、奈良県、愛媛県、熊本市、大分県			○今後支障事例が生じる可能性は高いこと、また、暴力団排除が社会全体の課題であることや資金業法など類似法令との整合性から改正が必要である。 ○反社会的勢力排除を徹底する上で、中小企業等協同組合法への暴力団等排除規定の追加は必要不可欠であると考えられる。 ○本県においても、他県と同様、既に暴力団関係者から組合設立の認可申請があった場合、認可を拒否する法令上の明確な根拠がないことから、法改正の必要性があると考えられる。 ○認可の根拠法である中小企業等協同組合法において、明確な排除規定がないことから、法に基づいて暴力団と関わりのある組合の認可を拒否することは、難しいと考える。 暴力団排除条例の制定等により、県レベルの施策として暴力団の排除が全国的に進む中、組合等団体における企業倫理を遵守する意味でも、法において排除規定を定めることに賛同する。	【警察庁】 警察としては、暴力団の資金獲得活動の実態解明を図り、中小企業等協同組合法に関連する暴力団の違法・不当な介入実態が判明したならば、主管省庁である中小企業庁に情報を提供するなどの協力を行ってまいります。 なお、各法令において暴力団排除事項を設けるべきか否かについては、各法令が規制する事業者等における暴力団の活動の有無等の実態を踏まえつつ、主管省庁において個々の法令ごとにその必要性を判断すべきものであり、必要性があると判断されたものから可能な限り早期に当該法令を改正して暴力団排除事項を導入すべきものである。したがって、まずは、主管省庁である中小企業庁において暴力団排除条項の要否が検討されるべきである。 【金融庁、財務省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、国土交通省、環境省】 現時点で、中小企業等協同組合法に基づき設立された組合が、実際に暴力団の活動に利用されているなどの情報は警察当局などから寄せられていない。今後、必要に応じて各自治体等からの情報提供等を通じて更なる状況把握を行うとともに、政府全体の取組状況も踏まえつつ対応してまいります。		
66	B 地方に対する規制緩和	医療・福祉	小型児童館における職員配置基準の地域的運用	児童館については、児童福祉施設の設備及び運営に関する基準(昭和23年厚生省令第63号)第38条により、保育士や社会福祉士等の「児童の遊びを指導する者」を配置することとされている。また、児童館設置運営要綱において、「児童の遊びを指導する者」を2名以上配置することとされている。児童の遊びを指導する者と共通の資格を有する放課後児童支援員の配置基準においても、2名のうち1名が補助員の代替可放課後児童健全育成事業の設備及び運営に関する基準(平成26年厚生労働省令第63号)第10条)となったことから児童館も並びをとり、本規定において、小型児童館の場合においては、「児童の遊びを指導する者」1名+補助員(無資格者又は子育て支援員研修修了者等)の体制でも運営を可能としていただきたい。	現在、本市において、子ども・子育て環境の充実のため、保育所、幼稚園、児童クラブ、放課後子ども教室などの整備を進めた結果、児童館に配置すべき「児童の遊びを指導する者」と共通する有資格者を持つ方を必要とする場が増加したところ。その結果、「児童の遊びを指導する者」の資格を持つ者が不足する事態が発生し、現在児童館に動いている方が退職した後に職員の応募を行っても、勤務希望者がいない等、職員が確保できず、児童館の運営に支障をきたしている。	小型児童館について、「児童の遊びを指導する者」1名+補助員(無資格者又は子育て支援員研修修了者等)の体制での運営が可能となることで以下の効果が期待できる。 現在、資格を持っていないが、将来的に子どもに関わる仕事に就きたい方への就労の機会拡大、またその後の有資格者になるための意欲向上にもつながる。 児童館に配置する「児童の遊びを有する者」のうち、保育士等の有資格者が他の児童福祉事業等に従事することができ、全国的な問題となっている、保育士不足による待機児童問題や、保育所の存続問題など、様々な児童福祉行政が抱える問題解決への一助となる。	児童福祉施設の設備及び運営に関する基準(昭和23年厚生省令第63号)第38条、児童館設置運営要綱	厚生労働省	砥部町、今治市、八幡浜市、西条市、大洲市、伊予市、四国中央市、西予市、東温市、久万高原町、松前町、内子町、伊方町、鬼北町、愛南町	石岡市、松戸市、山梨県、徳島県、高松市、松浦市、宮崎県、岩手県	○保育園等への人員配置が優先され、児童館運営のための人材確保が困難になっている。本市では、指定管理で児童館を運営しているが、指定業者からも人材確保に苦慮しているという話があり、児童館の存続にも影響してきている。 ○保育士が不足しているなかで、児童館を運営していくためには児童館専任員(児童の遊びを指導する者)を2名配置しなければならない。この要件を緩和することで、児童館運営の一助となることと期待できる。 ○本市の児童館は、小型児童館に位置づけられ、保育士等の有資格者を常時2名以上配置している(職員数:正規3名うち保育士2名、非常勤4名うち保育士3名、教員1名)。こうした現状を踏まえ、当該提案により制度改正が図られることで、今後児童館機能施設の拡充を進める上で柔軟な職員配置に資するものと考えられる。 ○本市で運営する児童館においても2名の児童館専任員を配置している状況であるが、職員の配置基準を弾力的に運用可能であれば、余剰人員を不足する放課後児童クラブ等へ配置することが可能となるため、待機児童対策に繋がるものと考えられる。 ○本市でも児童館職員(保育士)を確保できず今年度夏休みから休職している児童館がある。	児童館の運営に当たっては、児童福祉施設の設備及び運営に関する基準(昭和23年厚生省令第63号)第38条第1項の規定に基づき、児童の遊びを指導する者を置くこととされており、具体的な職員数は、ご指摘の要綱で、望ましい運営の基準として示している。 ご提案の職員不足等の実情を踏まえ、地域の実情に応じた運営が可能になるよう、今後年末までに検討していく。		



管理番号	提案区分		提案事項(事項名)	求める措置の具体的内容	具体的な支障事例	制度改正による効果 (提案の実現による住民の利便性の向上、行政の効率化等)	根拠法令等	制度の所管・関係府省	団体名	その他 (特記事項)	<追加共同提案団体及び当該団体から示された支障事例(主なもの)>		回答欄(各府省)
	区分	分野									団体名	支障事例	
83	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	老人福祉に係る「基準省令」の早期公布	老人福祉に係る「基準省令」について、可能な限り早期に公布を行うことを求める。 また、新たな基準省令を制定する場合は、周知期間や施行準備等を要することから、一定の経過措置期間を設定することを求める。	【地方分権の趣旨を反映できない】 介護保険施設等の基準は、法律で規定されているもののほか、「基準省令」に規定され、「基準省令」は条例への委任規定(従うべき基準、参酌すべき基準)を設けている。 このうち、参酌基準については、地域の実情や県の政策課題を背景に、独自の基準を設けることが可能であるが、そのためには、県は、十分な時間をかけ、関係機関や団体、県民と検討を重ねる必要がある。 しかし、今回は、「基準省令」の公布遅延によりその時間はなく、「基準省令」を条例に落とし込む作業に注力せざるを得なかった(条例の概要に係るパブコムも実施できない)。 このことは、地方分権の趣旨からも看過できない事態である。 【県民・事業者の不利益】 新たな介護保険施設である介護医療院は、県内の病院関係者等に注目されており、県は、近々の開設を検討している事業者に対しては、速やかに制度を周知し、事業化を支援する必要がある。 しかし、「基準省令」の公布が遅れた結果、事業者への周知期間が十分に確保できないほか、県の支援策を検討する時間も確保することができなかったことから、県の取組が不十分なまま、条例の施行を迫る事態になったことが否定できない。 また、その他の介護事業者においても、介護保険法施行規則(厚生労働省令)の公布が9月22日となり、事業者からの指定申請手続き等を定めた県規則の改正が4月1日に間に合わない事態となった。 さらに、全ての介護事業者に係る4月以降の報酬告示やこれを解釈する通知も3月22日となったことから、事業者の中には、4月からの新加算等の算定を諦めるものも出ていた。	本県の実情や政策課題のほか、県民・団体意見を条例に反映させることができ、地方分権の趣旨を具現化することが可能になる。 民間事業者による早期の事業化を支援することで、県民サービスの向上が期待できる。 法改正の趣旨に沿った制度運用が可能になる。	介護保険法	厚生労働省	神奈川県	宮城県、秋田市、米沢市、福島県、千葉県、習志野市、八王子市、横浜市、相模原市、横浜県、青森県、岩手県、山形県、秋田県、宮城県、福島県、茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、新潟県、富山県、石川県、福井県、山梨県、長野県、岐阜県、静岡県、愛知県、三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、徳島県、香川県、高松市、愛媛県、高知県、福岡県、佐賀県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県	介護サービスの運営基準等に関する省令の改正については、社会保障審議会の意見を踏まえ決定することとされており、同審議会の意見を踏まえ、可能な限り早期に公布するよう努めているとされている。 一方、今般の改正においてご指摘のような事態が生じたことを踏まえ、次期改正に向けては、より円滑な施行ができるよう、努めてまいります。	
84	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	障害児者福祉に係る「基準省令」の早期公布	障害児者福祉に係る「基準省令」について、可能な限り早期に公布を行うことを求める。	【地方分権の趣旨を反映できない】 障害福祉サービス事業者等の基準は、法律で規定されているもののほか、「基準省令」に規定され、「基準省令」は条例への委任規定(従うべき基準、標準とすべき基準、参酌すべき基準)を設けている。 「基準省令」は、例年1～2月初旬に公布されるため、基準省令の「従うべき基準」「標準とすべき基準」「参酌すべき基準」を踏まえて行う条例改正作業において、地域の実情に応じた内容を検討する時間が十分に確保されておらず、地方分権の趣旨が活かされていない。 【県民・事業者の不利益】 制度改正の円滑な施行にあたっては、障害福祉サービス等利用者はもとより関係機関や事業者等への十分な周知期間が必要となる。 しかし、限りどころとなる条例の公布が3月下旬になるため、新サービスの指定申請を躊躇する事業者もあり、障害児者が新制度を利用する機会を十分に確保することができない実情がある。 【働き方改革への対応】 基準省令改正を受けた条例改正作業については、議会のスケジュールに合わせるため、短時間に膨大な作業が発生し、関係する職員は長時間労働を余儀なくされており、働き方改革の取組にも大きく反している。	本県の実情や政策課題のほか、県民・団体意見を条例に反映させることができ、地方分権の趣旨を具現化することが可能になる。 民間事業者による早期の事業化を支援することで、県民サービスの向上が期待できる。 法改正の趣旨に沿った制度運用が可能になる。	児童福祉法、障害者総合支援法	厚生労働省	神奈川県	旭川市、宮城県、秋田市、福島県、千葉県、船橋市、板橋区、八王子市、横浜市、相模原市、横浜県、新潟県、岐阜県、静岡県、愛知県、三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、徳島県、香川県、高松市、愛媛県、高知県、福岡県、佐賀県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県	基準省令の改正については、その改正内容の検討等に時間を要すること、また、次年度の予算案と密接に関わる事項であるため予算編成過程において検討が必要であることから、例年1月頃の公布となっているところである。 一方で、基準省令の内容を各自治体の条例に反映させることは重要であると考えており、厚生労働省としては、自治体の条例改正スケジュールを考慮し、公布に先立って改正内容を自治体に周知している。 引き続き、自治体の条例改正に係る事務負担等に配慮しつつ、可能な限り早期に公布ができるよう取り組んでまいります。	

管理番号	提案区分		提案事項(事項名)	求める措置の具体的内容	具体的な支障事例	制度改正による効果 (提案の実現による性の利便性の向上、行政の効率化等)	根拠法令等	制度の所管・関係府省	団体名	その他 (特記事項)	<追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)>		回答欄(各府省)
	区分	分野									団体名	支障事例	
85	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	自立支援医療費(精神通院医療)の申請書及び受給者証から性別の項目を削除する。	法令により自立支援医療費(精神通院医療)の申請書及び受給者証へ性別を記載することとされている。精神通院医療においては、性同一性障害も対象となる中、性別の項目の必要性が明確でないにもかかわらず、記載が求められており、申請者(受給者)から性同一性障害を有する方への配慮に欠けるのではないかと苦情を受けることがある。なお、精神障害者保健福祉手帳についても、性同一性障害の方への配慮の観点から平成24年度より性別の記載が廃止されている。	性別の記載が必ずしも必要でないのであれば、項目を削除することで、申請者の精神的苦痛の軽減につながる。当該項目に係る書類確認、データ入力(平成29年度実績:48,475件)の省略といった事務負担の軽減も見込まれる。 ※ 平成29年度実績は、県所管域のみの実績件数。	障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律施行規則第35条第1項第1号、第41条第1項第1号、第45条第1項第1号、第47条第1項第1号、第48条第1項第1号、附則第8条第1項第1号	厚生労働省	神奈川県、埼玉県、さいたま市、千葉県、千葉市、相模原市、平塚市、鎌倉市、藤沢市、小田原市、茅ヶ崎市、秦野市、大和市、伊勢原市、海老名市、座間市、南足柄市、緑道市、寒川町、中井町、山北町、湯河原町、愛川町、山梨県、大阪府	宮城県、文京区、八王子市、新潟市、胎内市、石川県、静岡県、名古屋市、春日井市、京都市、城陽市、香取市、神戸市、出雲市、広島市、熊本県、大分県、宮崎県	○本市においても、性同一性障害の方が自立支援医療(精神通院)を受けている。性別欄を削除することで、その方々の精神的苦痛を軽減させることができ、苦情等への対応がなくなり、事務負担の軽減につながると思われる。 ○本市においても、性同一性障害のある方が自立支援医療を申請する際に、受給者証への性別記載について省略してほしいとの要望を受けることがある。その際、随時都道府県に対して、その旨を申請書等に記載したうえで、当該受給者証のみ性別を記載しないよう対応を依頼している。しかし、そもそも受給者証への性別記載が必ずしも必要ないのであれば、申請者の精神的苦痛の軽減や事務負担の軽減を考慮して、当該項目を削除されたい。 ○本市においては、平成28年4月1日から、法律などで定めがあるなど特別な場合を除き、性同一性障害の方への配慮に欠けるのではないかと苦情を受けることがある。なお、精神障害者保健福祉手帳の観点から、市が発行する証明書や各種申請書の一部について、性別記載欄を廃止しております。 ○精神通院医療では性同一性障害の方も対象となるため、申請者の心情及び人権尊重のため、項目の削除が必要と思われず。 ○本市においても、性同一性障害を有する申請者(受給者)から、性別の記載に係る精神的苦痛の訴えを受けることがある。 このことから、性別の記載が必ずしも必要ないのであれば、申請書及び受給者証における性別欄の廃止が望ましい。 ○本市においても、性同一性障害を有する方から、性別の記載をしないでほしいとの申し出があった。 ○本市においても法令に基づき、自立支援医療費(精神通院医療)の申請書及び受給者証に性別を記載している。 「具体的な支障事例と同様に、精神通院医療においては、性同一性障害も対象となる中、性別の項目の必要性が明確でないにもかかわらず、記載が求められており、申請者(受給者)から性同一性障害を有する方への配慮に欠けるのではないかと苦情を受けることがある。なお、精神障害者保健福祉手帳や手帳申請書類については、法令に基づき性別の項目を削除している。 ○性同一性障害の方が性別を変更する前に氏名を変更しており、一時的に男性名で性別欄が女性の受給者証となる事例がある。 ○窓口で相談事例あり(詳細は障がい福祉課では不明)。当時厚生労働省へ確認したが、削除できないという回答であった。 申請書・受給者証等本人が自ら記入する書類については性別の項目は不要と考えており、市単独事業では概ね性別の項目を削除しているが、法で定められているため自立支援医療費(精神通院医療)の申請書及び受給者証の項目から性別を削除することができなかった。制度改正されれば他の事業と同様性別の項目を削除したい。 ○法令により自立支援医療費(精神通院医療)の申請書及び受給者証へ性別を記載することとされている。 精神通院医療においては、性同一性障害も対象となる中、性別の項目の必要性が明確でないにもかかわらず、記載が求められており、申請者(受給者)から性同一性障害を有する方への配慮に欠けるのではないかと苦情を受けることがある。なお、精神障害者保健福祉手帳についても、性同一性障害の方への配慮の観点から平成24年度より性別の記載が廃止されている。 ○申請手続き等の事務に当たり、申請書や受給者証に性別の記載の必要はなく、性同一性障害の方への配慮の観点から性別の記載は廃止するべきと考える。	申請書等の性別の記載を削除することについては、支給認定の適切な判定などに支障が生じる可能性も考えられることから、判定への影響等について整理の上、当該記載の削除が適切か否かを慎重に検討してまいりたい。	
86	B	地方に対する規制緩和	雇用・労働	公共職業訓練に係る雇用保険関係様式の見直し	都道府県が設置する職業能力開発校の長は、求職者(雇用保険受給者)が公共職業安定所長等の指示により公共職業訓練を受講する場合には、雇用保険関係様式において、訓練等に関する事項等の証明を行う必要がある。本提案では、雇用保険関係様式のうち、公共職業訓練等の施設長の職氏名の記載を省略することにより、事務処理期間の短縮及び都道府県の事務負担軽減を図られることを求める。 【具体的な支障事例】 公共職業訓練等受講届・通所届(雇用保険法施行規則第12号)・公共職業訓練等受講証明書(雇用保険法施行規則第15号)について、公共職業訓練等の施設長の氏名の記載が求められていることにより、特に施設長の異動等が想定される場合には迅速な事務処理に支障を来しているほか、都道府県が必要以上の事務負担を強いられることとなっている。 【制度改正による懸念点】 特段想定されない。	雇用保険関係様式に係る事務処理期間の短縮により、雇用保険受給者の利益に資すると考えられるほか、都道府県の事務処理の効率化が図られる。	雇用保険法施行規則第12号・第15号	厚生労働省	神奈川県、千葉県、山梨県	福島県、栃木県、新潟県、愛知県、大阪府、福岡県、熊本県	○県も同様な事務処理を行っている。事務の効率化を図るため賛同する。 ○公共職業訓練等受講届・通所届(雇用保険法施行規則第12号)・公共職業訓練等受講証明書(雇用保険法施行規則第15号)に係る公共職業訓練等の施設長の氏名記載が求められていることについては、様式にサイズを合わせた印の準備を行ってより、少なからず経費負担も生じている。また、雇用保険に関する業務では毎月ごとの支給期に間に合わせる必要があり、必要以上の事務負担を強いられることとなっている。 ○県でも、当該証明は毎月各100件を下らず、証明に係る事務負担は大きなものとなっているため、提案のとおり氏名の記載を省略することで事務負担の軽減につながるかと考える。 ○本県においても提案案と同様の状況であり、当該様式については、公共職業訓練等の施設長名で証明すれば足り、施設長の氏名の記載までは必要ないと考える。 ○当県においても、雇用保険関係様式のうち、公共職業訓練等の施設長の職氏名の記載を省略するものについて、訓練受講者のうち雇用保険受給資格者が多数に及ぶことから、その記載に係る必要以上の事務負担が生じている。職氏名の記載を省略することにより、都道府県の事務処理の効率化が図られるとともに、事務処理期間の短縮によって雇用保険受給者の利益に資すると考える。	雇用保険法第15条第3項において、基本手当の支給資格者は、求職の申込みを受けた公共職業安定所において、4週間1回ずつ直前の28日の各日について失業の認定を行うものとされている。一方、公共職業安定所長の指示した公共職業訓練等を受ける受給資格者については、失業の認定を受けるために公共職業安定所に出頭することは訓練等の妨げともなり、また、訓練施設で受講している事実が確認できれば失業の状態にあることが明確であるので、施行規則第21条に定める届出(様式第12号)を速やかに行う上で、1か月1回、直前の月に属する各日について、第21条に定める証明書(様式第15号)を提出することをもって失業の認定を受けることとされている。これらの届出については、適正な支給のために厳格に確認を行う必要があることから、訓練施設長の証明を必要としているものであり、要望に沿った措置は困難である。	
87	B	地方に対する規制緩和	雇用・労働	公共職業訓練に係る雇用保険関係証明事務の権限及び基準の明確化	都道府県が設置する職業能力開発校の長は、求職者(雇用保険受給者)が公共職業安定所長等の指示により公共職業訓練を受講する場合には、雇用保険関係様式において、訓練等に関する事項等の証明を行う必要がある。本提案では、雇用保険関係様式に係る証明事務の権限及び基準を明確化し、事務処理の適正化を図られることを求める。 【具体的な支障事例】 雇用保険関係様式に係る証明事務を、職業能力開発校の長が行うべき根拠が法令等で明示されていないため、受給資格者に対して個人情報を含む関係書類の提出を求めたり、様式の記載内容に関する修正指示等を行うことが躊躇われるとともに、受給資格者から手続きの根拠について問い合わせがあった場合にも、適当な回答を行うことができない。 また、個人情報を含む関係書類の取扱いに係る根拠や基準が不明確であることにより、個人情報保護や適正文書管理の点で懸念がある。 【制度改正による懸念点】 特段想定されない。	雇用保険関係様式に係る証明事務の根拠等が明示されることにより、雇用保険受給者の権利利益の保護に資すると考えられるほか、事務処理の適正化が図られる。	雇用保険法施行規則第12号・第15号	厚生労働省	神奈川県、千葉県、山梨県	福島県、栃木県、新潟県、愛知県、大阪府、福岡県、熊本県	○受講者の個人情報の保護や事務処理の適正化が必要。受講者の利便性を確保する手続きや方法を含めた見直しを図ること、賛同する。 ○雇用保険関係様式に係る受給資格者関係の書類では個人情報を含む内容が多く、その取扱いには細心の注意を要しており、権限による確認作業はより厳格による管理管理など、相応の事務負担が生じている。個人情報を含む関係書類の取扱いに係る根拠や基準が不明確であり、個人情報の保護や適正文書管理の点が懸念される。 ○雇用保険関係様式に係る証明事務において、手続給付の根拠となる「公共職業訓練受講証明書」の記載と添付資料の集約、提出を職業能力開発校の長が行っているが、内容に関する審査等の事務は公共職業安定所長の所管する事務である。職業能力開発校の長に給付等に関する決定を行う権限はないにも関わらず、しかしながら、実際としては、訓練を受講しなかった際に、受講生から証明書の提出がなされなかった場合にも、詳細な事情を把握することなどについて、公共職業安定所長から指示を受けることがあり、大きな負担となっている。 ○県においても、当該証明は毎月各100件を下らず、提案案と同様に個人情報の取り扱いが躊躇されるところであり、証明事務の権限及び基準の明確化が必要と考える。 ○本県においても提案案と同様の状況であるため、事務処理の適正化と都道府県の事務負担軽減を図られたいと考える。 ○当県においても、雇用保険関係様式に係る証明事務を行う際には、個人情報を含む関係書類の提出を求める必要がある場合があるが、法令等で根拠が明確化されていないことから、提出を求める際の説明に苦慮している事例がある。雇用保険関係に係る証明事務の根拠等が明示されることにより、事務処理の適正化が図られ、雇用保険受給者の権利利益の保護に資すると考える。	雇用保険法施行規則第12号・様式第15号については、公共職業訓練施設長の証明欄を設けているところであるが、御指摘も踏まえ、訓練施設長の証明事務を行う根拠等の明確化を行うこととする。	

別添1

管理番号	提案区分		提案事項(事項名)	求める措置の具体的内容	具体的な支障事例	制度改正による効果 (提案の実現による住民の利便性の向上、行政の効率化等)	根拠法令等	制度の所管・関係府省	団体名	その他 (特記事項)	<追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)>		回答欄(各府省)	
	区分	分野									団体名	支障事例		
88	B	地方に対する規制緩和	雇用・労働	公共職業訓練に係る雇用保険関係事務のうち、都道府県が設置する職業能力開発校の長が行っている証明事務について、証明すべき事項の義務付けを見直し、事務処理の適正化及び都道府県の事務負担軽減を図られることを求める。	都道府県が設置する職業能力開発校の長は、求職者(雇用保険受給者)が公共職業安定所長等の指示により公共職業訓練を受講する場合に、雇用保険関係様式において、訓練等に関する事項等の証明を行う必要がある。本提案では、都道府県が設置する職業能力開発校の長による証明事項から通所に関する事項を除外し、事務処理の適正化及び都道府県の事務負担軽減を図られることを求める。 【具体的な支障事例】 公共職業訓練等通所届(雇用保険法施行規則様式第12号)に係る証明事務は、例えば公共職業安定所長でも十分に言い得る「数量の余剰のない確認的行為」である。加えて、証明事務が自治事務であり、かつ証明方法等について根拠等が明示されていないにも関わらず、実態として公共職業安定所長から証明内容について修正指示等を受けることがあり、それに伴う受給資格者への修正指示等は職業能力開発校の長が行っており、相応の事務負担が生じている。以上を踏まえると、通所に関する事項の証明事務については、職業能力開発校の長が行うべきではなく、雇用保険受給資格者が公共職業安定所長へ直接提出し、公共職業安定所長が確認すべきである。 【制度改正による効果】 単に通所に関する事項を職業能力開発校の長の証明すべき事項から外すのみで、手続きの流れは現行制度のままとした場合は、職業訓練受講者(雇用保険受給者)の負担が軽減されない可能性があるため、手続きの流れや方法も含めた見直しを図りたい。	都道府県が設置する職業能力開発校の長が証明すべき事項が合理化されることにより、事務処理の適正化及び都道府県の事務負担軽減が図られるとともに、事務処理期間の短縮が期待できる。	雇用保険法施行規則様式第12号	厚生労働省	神奈川県、千葉県、山梨県			福島県、栃木県、新潟県、長野県、愛知県、大阪府、福岡県、熊本県	○当県も同様な状況である。受講者の個人情報保護や事務処理の適正化が必要。受講者の利便性を確保する手続きや方法を含めた見直しを図ることで、賛同する。 ○通所に関する証明事務については、運営、期間、距離等の事柄に照らし、最も経済的かつ合理的に認められる通常の通所の経路及び方法による運賃額等を申請するものとされており、公共職業訓練を受講する場合は、公共職業能力開発校の長が通所に関する事項の証明をしているが、同様に公共職業安定所長より証明内容の修正指示等を受けることがあり、最終確認を公共職業安定所で行っていることから雇用保険受給資格者が公共職業安定所長へ直接提出し、公共職業安定所長が確認すべきである。 ○雇用保険関係様式に係る証明事務において、手当給付の根拠となる「公共職業訓練受講証明書」の記載と添付資料の集約、提出を職業能力開発校の長が行っているが、内容に関する審査等の事務は公共職業安定所長の所管する事務である。職業能力開発校の長に給付等に関する決定を行う権限はないにも関わらず、しながら、実態としては、訓練を受講しなかった際に、受講者から証明書の提出がなされなかった場合には、詳細な事情を把握することなどについて、公共職業安定所長から指示を受けることがあり、大きな負担となっている。 ○施設内訓練、委託訓練ともに、入校時に受講届・通所届として提出する場合と実習等による通所方法変更時に提出する場合がある。後者は提出件数が多く大きな事務負担となっており、本提案に賛同したい。 ○本県でも当該証明は毎月100件を下らず、通所に係る距離および運賃確認の業務は大きな負担となっている。 ○本県においても提案案と同様の状況であるため、事務処理の適正化と都道府県の事務負担軽減を図りたいと考える。 ○公共職業訓練等通所届に係る証明事務については、証明方法等について明確な根拠等が明示されないにも関わらず、証明した内容について公共職業安定所長から修正指示等を受けることがあることから、その修正について相応の事務負担が生じている。通所に関する事項については「数量の余剰のない確認的行為」であり、その事項の証明については職業能力開発校の長が行っており、相応の事務負担が生じている。公共職業安定所長が確認すべきである。都道府県が設置する職業能力開発校の長が証明すべき事項が合理化され、手続きの流れや方法が合理化されることにより、事務処理の適正化や都道府県の事務処理負担軽減が図られるだけでなく、事務処理期間の短縮によって雇用保険受給者の利益に資すると考える。	御指摘の通所に関する事項の届出は、通所手当の計算に不可欠であるが、その通所経路等については、(訓練実施場所の変更がある場合等も含めて)当該訓練施設が的確に把握できないため、訓練施設の長の証明を求めているものである。この届出を受給資格者が公共職業安定所に直接提出することとすると、届出内容の正確性を担保できなくなる上、受給資格者にとっても訓練期間中に公共職業安定所に出頭することとなり、訓練の妨げになる。 なお、御指摘も踏まえ、訓練施設の長が証明事務を行う根拠等の明確化を行うこととする。
101	A	権限移譲	医療・福祉	自立支援医療(精神通院医療)の支給認定に関する事務のうち、申請者の所得区分の審査について、申請書の所得区分の審査を市町村の事務として法令に規定	これまで自立支援医療(精神通院医療)の支給認定に関する事務のうち、申請者の所得区分の審査については、都道府県に委任している。申請書の所得区分の審査については、申請の受付を行う市町村が行えるよう、県から市町村に権限を移譲する。 ①所得区分の確認を市町村において実施するためには、事務処理特例により権限を都道府県から市町村に移譲することが必要であるが、市町村との協議・同意が必要であり、既に同意が得られない市町村が発生した場合、一部市町村の確認事務を都道府県が行うことになる。一部市町村のみより多くの時間を要する状況となり、住民サービスに差が生じることが懸念されることから、対応に苦慮しているケースがある。 従前から全面的に、申請を受ける窓口たる市町村で一定の内容確認をした上で、申請書を迅速する取扱いをできたが、これをマイナンバー制度に対応させるのであれば、市町村の事務であることを法令上規定(権限を法定移譲)すべきであり、同一の事務であるのに都道府県によって手続(と住民サービス)が異なることになるため、特例案での処理によるべきとの考え方は適当とは思えない。	①所得区分の確認を市町村の事務として法令に規定することで、市町村は番号法施行後も、法定の事務実施者として保有情報に基づく迅速な確認事務が可能となる。これは、業務の実態に沿うものである上、都道府県が事務を行う場合に比べて合理的で、住民サービスの低下につながるものではない。 ②また、特例案例とは異なり、全国的に一律の手続となるため、住民サービスに差が生じない。	障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律(平成17年法律123号)第53条第1項及び第56条第1項 行政手続における特定の個人を識別するための番号の利用等に関する法律第9条第1項及び第19条第7号	内閣府、厚生労働省	秋田県、宮城県			埼玉県、川崎市、新潟県、静岡県、沖縄県	○市町村は申請窓口であることから、所得区分の確認業務の権限を有していた方が合理的であり、また、情報照会も市町村で行うことができるようになれば事務の連携が生じるおそれもない。 ○所得区分の確認業務については、これまで同様申請窓口である市町村で行うことが必要である。このため、事務処理特例案により市町村に移譲することとしたが、移譲を受けた市町村は42/62市町村にとどまっている。 県内で統一した取扱いをするために、引き続き事務処理特例案による市町村への移譲を進めていくが、業務の実態に合わせ、全県で統一したサービスを速やかに実施するためには、法令上、市町村事務として規定することが必要である。 ○当県においては、対象件数も多い現状にあるので、市町村で事務を行えず、すべて県でとなると、新たな人員配置が必要なのは必然である。 ○県において、番号法による「所得区分の確認」を行うためには、「福祉システム」、「統合型システム」、「住民ネット」の3つのシステムの連携が必要となり、それぞれのシステム間で情報の受渡しが必要である。また、福祉サービスとの関係から、情報の受渡しに、厳格な制限があるため、システム間で情報の受渡しをする都度、厳格な情報チェックが必要である。 かつ、処理件数が多いため一括処理が必要となるが、「住民ネット」等の一部の処理については別の課への依頼が必要となる。さらに、市町では市長民税が未申告の場合も申請書を提出に来た際にその場で本人に申告させることができるが、県が所得確認を行う場合は、申告させるまでに時間を要することになる。 ○番号法により「所得区分の確認」を市町村において実施するためには、事務処理特例案により権限を市町村に移譲することが必要であるが、市町村との協議・同意が必要である。既に一部の市では同意が得られず、県が確認事務を行うことになり、その市においては、受給者証の発行が遅れるなど、市町村により住民サービスに差が生じることになる。	【内閣府】 自立支援医療(精神通院医療)の支給認定に関する事務の権限移譲に関する提案事項であるため、まずは厚生労働省において検討を行うべきと考える。 【厚生労働省】 自立支援医療(精神通院医療)の支給認定に関する事務のうち、申請者の所得区分の審査に係る事務を市町村の事務として一律に法令上に規定することについては、これにより影響を受ける市町村の意見を勘案しながら、検討してまいりたい。
111	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	幼保連携型以外の認定こども園の施設認定の手続きに係る協議の見直しについて	幼保連携型認定こども園の設置については、市町村以外の者が設置するには、都道府県の認可を受けなければならない。認可に当たっては、事前に施設を設置する市町村長への協議が必要とされている。一方、市町村が設置する場合は、都道府県への事前届出のみである。対して、幼保連携型以外の認定こども園の認定については、市町村とそれ以外の者が手続きが同じであり、認定に際しては、「当該認定の申請に係る施設が所在する市町村の長に協議しなければならない(認定こども園法第3条6項)」とされている。 この事前協議は、子ども子育て支援新制度において、保育の必要数等は各市町村が事業計画において定めることとなっており、認定権を持つ都道府県と保育の必要数等を管理する市町村の間で齟齬が起きないよう規定しているものと考えられる。 しかし、市町村立の施設を認定する場合、認定の申請者と協議の相手方が同じであるにも関わらず、都道府県知事から市町村長への協議が必要となる。実態として、大阪府では、平成27-30年の認定事務97件のうち、17件が市町村立の施設であり、認可・認定事務の集中する年度末に形式的な事務が発生しており、都道府県、市町村ともに事務負担が大きい。 当該事前協議を廃止したとしても、子ども子育て支援法第31条により、特定教育・保育施設の利用定員を定める場合や変更する場合は、都道府県知事に届出が必要とされており、保育量等を把握できるため、法の趣旨を損なう恐れはない。	市町村立の幼保連携型以外の認定こども園の認定手続きについて、都道府県、市町村の両者の事務負担の軽減に資する。	教育学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律	内閣府、文部科学省、厚生労働省	大阪府、京都市、守口市、兵庫県、神戸市、和歌山県、鳥取県、徳島県、関西広域連合			茨城県、山梨県、東京都、池田市、兵庫県、秋田市、藤井寺市	○幼保連携型認定こども園の場合と同様の手続きで良いと思われる。 ○認定の申請者と協議の相手方が同じであるにも関わらず、都道府県知事から市町村長へ協議という形式的な事務が年度末に発生し事務負担が大きい。 ○本市においては、現時点で立の認定こども園は存在しないが、公立幼稚園等のあり方について検討を進めているところであり、もし、認定こども園化の方向となった場合、複数の施設の手続きを同時に行う必要があり、都道府県、市町村の負担軽減の観点からも制度改正が必要であると考える。	就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律第三条第六項における都道府県と市町村との協議は、当該市町村以外が設置する認定こども園を想定したものであり、当該市町村立の認定こども園については、協議は不要である。

管理番号	提案区分		提案事項(事項名)	求める措置の具体的内容	具体的な支障事例	制度改正による効果 (提案の実現による住民の利便性の向上、行政の効率化等)	根拠法令等	制度の所管・関係府省	団体名	その他 (特記事項)	<追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)>		回答欄(各府省)
	区分	分野									団体名	支障事例	
112	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	保育所から幼保連携型認定こども園へ移行する際の財産処分手続に係る添付書類を簡素化する	保育所から幼保連携型認定こども園へ移行する際の財産処分手続に係る添付書類を簡素化する	大阪府では子ども子育て新制度移行時(平成27年4月1日時点)で保育所数が1,101園に対し、認定こども園数が287園(うち幼保連携型259園)であったが、平成29年4月1日現在で、保育所数984園に対し、認定こども園数が505園(うち幼保連携型434園)と保育所から幼保連携型認定こども園への移行が進んでいる。その際、当該建物が補助金の交付を受けており、かつ、処分制限期間内であれば財産処分の手続きが必要となる。財産処分手続きにあたっては、多くの添付書類(補助金交付決定書、検査済証、図面等)が必要となるが、建物が古い場合、当時行った交付決定等の書類が散逸しており、この捜索に多大な時間を要するため、認定こども園への移行を希望する園にとって、移行準備の大事な時期に建設当時の資料を捜索することが負担となっており、認定こども園への円滑な移行の阻害要因となっている。すでに、保育所から幼保連携型認定こども園へ移行する際は、包括承認事項となっており、一定の簡素化が図られているが、本府においては、認定こども園への移行が進んでいることや、認定こども園が保育所的な性質も引き継ぎ有することからも、さらなる簡素化をお願いしたい。	補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律第22条(厚生労働省所管一般会計補助金等に係る財産処分について)(平成20年4月17日厚生労働省庁発第0417001号)	厚生労働省	大阪府、京都府、奈良県、和歌山県、鳥取県、徳島県、関西広域連合	旭川市、福島県、横浜府、山形県、岩手県、京都府、大阪府、豊中市、池田市、貝塚市、枚方市、八尾市、藤井寺市、東大阪市、島本町、高松市、松浦市、宮崎市	○20年近く前の建物の財産処分時でさえ、添付書類の準備がかなり煩雑であったため、簡素化が必要であると思われる。 ○財産処分手続きにあたっては、多くの添付書類(補助金交付決定書等)が必要になるが、建物が古い場合、当時の書類が散逸しており、建設当時の書類を捜索することに多大な時間を要する。保育所から幼保連携型認定こども園へ移行する際は、保育的性質を引き継ぎ有することから簡素化をお願いしたい。 ○認定こども園への移行を希望する事業者の事務負担が大きい。 ○当市では子ども子育て新制度移行時(平成27年4月1日時点)で認定こども園数が31園(うち幼保連携型21園)であったが、平成29年4月1日現在で認定こども園数が90園(うち幼保連携型32園)と保育所等から幼保連携型認定こども園への移行が進んでいる。その際、当該建物が補助金の交付を受けており、かつ、処分制限期間内であれば財産処分の手続きが必要となる。財産処分手続きにあたっては、多くの添付書類(補助金交付決定書、検査済証、図面等)が必要となるが、建物が古い場合、当時行った交付決定等の書類が散逸しており、この捜索に多大な時間を要するため、認定こども園への移行を希望する園にとって、移行準備の大事な時期に建設当時の資料を捜索することが負担となっており、認定こども園への円滑な移行の阻害要因となっている。すでに、保育所から幼保連携型認定こども園へ移行する際は、包括承認事項となっており、一定の簡素化が図られているが、本市においては、認定こども園への移行が進んでいることや、認定こども園が保育所的な性質も引き継ぎ有することからも、さらなる簡素化をお願いしたい。 ○本市においても幼稚園から認定こども園に移行する場合、認定こども園、小規模保育事業所等を開設する際にはすべての事業者が金融機関等から建物等に抵当権を付けて施設整備資金等の借入れをしており、制度、財産処分の手続きを行っており、事業者、本市とも事務手続きに時間がかかっているため改善が求められる。 ○提案自治体と同様の状況であり、園が幼保連携型認定こども園の移行を推進している立場である以上、地方自治体の事務負担軽減のために、書類作成等を簡素化していただきたい。 ○保育所等の既存の施設から認定こども園へ移行する際に認定申請と合わせ確認申請の手続きが必要であり、その書類の量は膨大な量となる。さらに財産処分が必要な場合は加えて書類が必要となることから、認定こども園化への阻害要因になりかねない。本市においても認定こども園化を促進していることから、可能な限りの書類の簡素化をお願いしたい。簡素化の詳細としては、財産処分手続きに係る資料のうち「その他参考となる資料」について、案件により決められる内容が限定的で、添付資料として必要な平面図や交付決定通知書等よりも膨大な量の資料を求められることが多いため、あらかじめ必要な資料として設定していただくか、保育所等から認定こども園に移行する場合においては、平面図と交付決定通知書等のみとされたい。 ○幼保連携型認定こども園への移行の場合、「(厚生労働省所管一般会計補助等に係る財産処分について)(平成20年4月17日 厚労発第0417001号)」のうち、別添2「子ども家庭局所管一般会計補助金等に係る承認基準の特例1(4)」に当たり、厚生労働大臣等の承認を必要としないこととされ、申請手続の特例(包括承認事項)による報告(別紙様式2)及びその添付資料の提出でよい等、簡素化がされている。しかし、それでもなお、添付資料の準備等について、事業者の負担となっていることから、さらなる簡素化をお願いしたい。 ○本市においても、保育所から幼保連携型認定こども園への移行が進んでいる。その際、当該建物が補助金の交付を受けており、かつ、処分制限期間内であれば財産処分の手続きが必要となる。財産処分手続きにあたっては、多くの添付書類(補助金交付決定書、検査済証、図面等)が必要となるが、建物が古い場合、当時行った交付決定等の書類が散逸しており、この捜索に多大な時間を要するため、認定こども園への移行を希望する園にとって、移行準備の大事な時期に建設当時の資料を捜索することが負担となっており、認定こども園への円滑な移行の阻害要因となっている。すでに、保育所から幼保連携型認定こども園へ移行する際は、包括承認事項となっており、一定の簡素化が図られているが、さらなる簡素化をお願いしたい。 ○当市では、平成27年4月1日の新制度施行以降、保育所から認定こども園への移行する施設が増えている。その一方で、財産処分における事務が煩雑であることや、何十年前の創設時の資料の収集に苦慮している実態があるため、更なる手続きの簡素化をお願いしたい。	保育所から幼保連携型認定こども園へ移行する際の財産処分の手続きにおいては、添付資料として対象施設の図面、写真、国庫補助金交付決定通知書及び確定通知書の写し(保管されていない場合は交付済を確認できる決算書でも可)等が必要としている。 現状、手続きにおいて必要とされる添付書類は、補助金の交付時期、いかなる国庫補助金の交付を受けた事業であるかの確認を行ううえで必要最低限の資料であると考えており、引き続き、当該手続きに際しては、参考資料の添付にご協力いただきたいと思います。 なお、現在お願いしている添付書類のうち、写真に関しては、その必要性の観点から検討を行うことも考えられる。	
113	A	権限移譲	医療・福祉	処遇改善等加算の認定権限の移譲	都道府県知事、指定都市及び中核市において行うこととされている処遇改善等加算の認定に係る権限を、各市町村へと移譲する。	処遇改善等加算Ⅰ及び処遇改善等加算Ⅱに係る加算の認定は、指定都市及び中核市以外の市町村(以下、「一般市町村」とする)が管轄する施設・事業所については各指定都市及び中核市の長が行うこととされている。しかし、年度終了後に行う処遇改善等加算Ⅰ及び処遇改善等加算Ⅱに係る賞金改善実績報告書の提出先は政令市及び中核市であるか、一般市町村であるかの別なく、市町村長とされている。そのため、一般市町村においては加算の申請に対して認定を行う主体と、実績の報告を受ける主体とが異なり、事業の一元管理ができていない状況である。また、一般市町村においては、管轄する施設・事業所から加算申請書の提出があったものを、取り纏めて、都道府県へ提出し、認定を受けたことを当該施設・事業所へと通知することとなり、都道府県とのやり取りもあって、認定されるまでの過程が長期化することとなる。更には、本加算の認定が行われなければ、施設及び事業所への精算ができないため、一般市町村が管轄する施設・事業所においては、結果として精算までの期間が長期化(市町村の提出から審査及び修正後、認定まで最長5箇月程度)している。各施設の運営事業者からは、審査過程で額の変更が生じる場合もあり、歳入が確定せず、運営が不安定ともなりうることから、市町村への申請の提出から認定までより早期に行ってほしいとの声もある。	指定都市及び中核市以外の市町村が管轄する施設・事業所における処遇改善等加算Ⅰ及び処遇改善等加算Ⅱの認定事務が簡素化され、市町村における業務の効率化と共に、施設・事業所に対する精算の早期化が図られる。	施設型給付費等に係る処遇改善等加算について(平成29年4月27日府庁字本第375号、29文科初第215号、雇児発0427第8号)	内閣府、文部科学省、厚生労働省	大阪府、滋賀県、堺市、兵庫県、和歌山県、鳥取県、徳島県、関西広域連合	青森県、群馬県、川崎市、新潟県、山形県、京都府、池田市、愛媛県	○施設等から提出された加算申請書を市町村がとりまとめ県に提出し、その後、県が市町村に対して認定を行っている。このため、手続きが長期化するとともに、県及び市町村の業務が繁雑となっている。○本市においては一元管理となっているが、市町村においても簡素化され一元管理となることについて賛成します。 ○本県においても、中核市を除く全市町村分の認定作業に膨大な時間を要し、認定が長期化し、例年、年度末近くの認定となっている。 認定作業に要する時間を短縮し、各施設への精算を早めるために、認定作業を市町村へ権限移譲するのが適当と考える。 ○当県でも本加算の認定作業については書類の確認に時間を要することなどの理由で、他府県と同様に精算までの期間が長期化している。また、事務処理を簡素化するため、認定にあたっては県内すべての市町村の書類を確認してから認定を行っており、県へ認定書類の提出が遅れることで、さらに認定が遅れる事例が発生している。そのため、市町村認定を行うことで早期に事業者が精算を行うことができる。	処遇改善等加算の認定については、職員給与に直結する極めて重要なものであり、慎重な対応が求められることなどから、広域調整及び域内の給付・事業を重層的に支える役割を担い、事務処理体制の整った都道府県において一括して加算認定等の事務処理を行うこととした。そのうち、指定都市・中核市については、従前の民間施設給与等改善費における仕組みを考慮し、平成28年度の地方からの提案を踏まえ、子ども子育て会議へ諮った上で、平成29年度より施設型給付費等に係る処遇改善等加算について(平成27年3月31日府政共生第349号、26文科初第1463号、雇児発0331第10号)を改正し、認定権限を移譲したところである。 指定都市・中核市以外の各市町村への移譲については、制度開始時の考え方に加え、平成29年度から処遇改善等加算Ⅱという新たな仕組みを創設したところ。個々の職員ベースでの発給給与改善状況や研修受講履歴など、従来よりも多数の情報を適切に確認する必要があること等を考慮し、引き続き都道府県において認定を行うことが適当であると考える。 なお、処遇改善等加算Ⅰ及び処遇改善等加算Ⅱに係る各種様式について、今年度より記入・計算を簡素化しており、引き続き自治体の事務負担の軽減に取り組んでいく。

別添1

管理番号	提案区分		提案事項(事項名)	求める措置の具体的内容	具体的な支障事例	制度改正による効果 (提案の実現による住民の利便性の向上、行政の効率化等)	根拠法令等	制度の所管・関係府省	団体名	その他 (特記事項)	<追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)>		回答欄(各府省)
	区分	分野									団体名	支障事例	
114	B 地方に対する規制緩和	医療・福祉	保育士等キャリアアップ研修の実施方法を蓄めた在り方の見直し	保育士等の処遇改善加算Ⅱの要件となっている保育士等キャリアアップ研修について、代替保育等の確保が困難な状況にある中、研修の受講が困難であることを鑑み、実施方法について通信制やeラーニング、ビデオ学習による方法を認める等の見直しを図りたい。 ※指定保育士養成施設においては通信制による履修が認められており、類似研修の介護支援専門員実習向上専攻実習等において、各研修における講義の一部又は全部を通信学習とすることができると厚生労働省から通知。	大阪府では4万8千人分の研修受講が必要だが、対象となる保育士等全員が(1分野ごとに)15時間におよぶ研修を保育現場から離れて研修会場に参加することは困難。平成29年度実施の研修においても、研修定員1480名に対し、修了者は680名である。研修受講が必須化される予定の2022年度までに保育士等が研修を受講できていない場合、それまでの間処遇改善加算Ⅱの認定を受けていた事業所が2022年度以降に加算を受けられなくなる。対象園等から要件を満たすため、研修を受講させたいが、代替人員の確保等が困難であるとの問い合わせが寄せられている。	〇時間や場所に制約されなくなるため、受講者にとって、受講しやすくなる。 〇研修実施機関にとっては、講師や会場の確保を軽減できるため、研修を増やすことが可能。	「保育士等キャリアアップ研修の実施について」(平成29年4月1日付厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課長通知)	内閣府、文部科学省、厚生労働省	大阪府、滋賀県、京都府、堺市、兵庫県、和歌山県、鳥取県、徳島県、関西広域連合		北海道、盛岡市、福島県、ひたちなか市、川崎市、新潟県、須坂市、山梨県、津市、亀岡市、池田市、貝塚市、八尾市、和泉市、藤井寺市、東大阪市、泉南市、阪南市、島本町、松浦市、宮崎市	<ul style="list-style-type: none"> <li>〇対象となる保育士が、長時間に及ぶ研修受講のため、現場を離れて参加することは、円滑な保育業務の運営を考えると難しい状況にある。また、正規職員としての保育士の確保が困難な状況において、代替職員を確保することは、さらに難しい状況にある。ついては、保育所運営への負担が軽減される内容に見直す必要があると考える。</li> <li>〇対象となる保育教諭等全員が1分野につき15時間もの研修の受講が必須となり、それに伴う代替保育士の確保が困難な状況である。また、研修実施機関及び日程等が限られており、さらに受講が困難な状況にある。</li> <li>〇当市において代替保育士の確保が困難なため、所定の研修を受講できない事例が発生している。</li> <li>〇県に対して当市での研修会開催を要望しているが、その場合であっても移動時間は短縮されるものの、代替職員の確保などの問題は残ることとなる。そのため、本提案にある通信制やeラーニングの導入については、前向きに検討をしていただきたい。</li> <li>〇保育現場からは、研修受講にかかる代替保育士の確保が困難であることや、研修の実施規模により受講できないなどの意見を聞いている。現状に即した柔軟な研修実施体制が必要と考える。</li> <li>〇提案自治体と同様に、キャリアアップ研修への参加が各法人、施設、職員への重い負担となっている状況である。</li> <li>〇当県は県土が広く離島もあり、移動に多くの時間を要する。また、冬季間は雪により移動が困難である。このため、保育士の受講が困難となっているケースがある。</li> <li>〇対象園から十分な研修定員が確保されていない状況があることから、必要な人数全員の研修受講が可能か不安視する声が多く寄せられており、確実な受講を保障するよう強く求められている。研修が受講できないと加算対象とならず給与が確保される恐れもあり、状況によっては職員が退職することも想定され、保育士確保と逆行する。また、各施設では加算対象人数が複数いるものの、在籍職員数は最低基準に加えて少数名しかおらず、研修期間中の代替職員の確保等が現実的に困難であるとの問い合わせが寄せられている。</li> <li>〇当市では1万7千人の研修受講が必要であり、他の自治体と同様に、保育士不足の中、対象となる保育士等が15時間の研修に複数回出席することは困難な状況である。また地域特性として、面積が広大であるだけでなく、人口が広域に分散しているほか、冬は寒冷で積雪期間が長く北国特有の厳しい気象条件であるため、長距離移動や前後泊を要し、研修日数以上に研修を離れることとなる等、都市部在住の保育士に比べて、研修の受講はより難しい。今年度からは振興局を中心として研修を実施する予定であるが、全ての振興局で8分野を複数回実施することは費用の面でも厳しい状況であることから、十分な研修回数の確保が困難である。通信制やeラーニング、ビデオ学習等が認められれば、保育士等が遠方の会場に出向いて受講する必要がなく、多くの希望者の受講が可能になるところから、当県の各保育団体からも強く要望されているところであり、ガイドラインを見直していただきたい。</li> <li>〇保育士等キャリアアップ研修の受講が必要な保育士は、各施設で保育を行うに当たって中心的役割を担っていることが多く、研修の受講にあたり、長期間現場を離れることにより、保育に支障が生じている。また、昨今の保育士不足もあり、代替人員の確保等も困難である。</li> <li>〇現在、本町内の民間保育所1施設では、保育士不足により認可定員数の受け入れが不能となっている。保育士の処遇改善を図るための加算を受けるためにキャリアアップ研修の受講が必須となるが、保育士が不足している現状を鑑み、と、長期間にわたる研修を受講することが困難な保育士も存在することが想定される。保育士確保や研修受講による安定した保育サービスの確保及び保育士自身の生活の安定を図るべく、より研修を受講しやすしい形態に変更することが必要であると考える。</li> <li>〇本県においても、認定こども園協会や保育協議会から、研修期間中の代替職員の確保が困難なことなどにより、ビデオ学習やeラーニング等の多様な手法による研修機会を働きかけが広がっており、当該提案に賛同する。</li> <li>〇当市においても代替保育等の確保が困難のため研修の受講計画が思うように立てられないなどの意見が施設から寄せられている。</li> <li>〇小規模保育所等が増加している状況下で、保育士等が現場を離れて1分野ごと15時間の受講を平日に受講することに難しさを感ずる。実際、日曜日の開催はないかとの問い合わせもある。また、15時間のうち、体調不良等で1日欠けた場合の救済措置についても課題であるため、通信制やeラーニング、ビデオ学習が認められると課題のクリアにつながると思う。</li> <li>〇保育教諭不足が続く現状では、対象の保育教諭が多く、代替保育者の確保及び、実習時間の確保が難しくなっている。</li> <li>〇当県においては1万7千人の研修受講が必要であり、現在養成校と連携し研修実施体制を整備している状況。他県での研修に参加する機会も少ないという現状から、保育士等に対する研修の機会創出に苦慮している。一方で、研修内容の質についても一定水準以上の内容とするために検討している段階。eラーニングやビデオ学習による研修機会の拡大の必要性も感じるが、質の確保の観点から認められるか検討が必要。</li> <li>〇処遇改善加算Ⅲの加算要件となる予定であるキャリアアップ研修の受講については、他都道府県が指定する研修を修了した場合においてもその効力が有効となるが、1分野につき15時間以上を要し、概ね3日間研修に時間を要するとともに、自都道府県で受講が困難な場合は他都道府県まで移動を要することから、受講する保育等においても負担が生じている。</li> <li>〇対象となる保育士等全員が(1分野ごとに)15時間におよぶ研修を保育現場から離れて研修会場に参加することは困難であるため、処遇改善加算Ⅱの認定に際して研修受講が必須化される予定の2022年度までに、より多くの保育士等が研修を受講できるよう研修方法の見直しをしていただきたい。</li> </ul>	保育士等の技能・経験に応じた処遇改善に係るキャリアアップ研修については、現時点においても、「通信制やeラーニング、ビデオ学習」等による受講が認められており、本提案は対応済みである。
130	B 地方に対する規制緩和	医療・福祉	児童養護施設の保育士配置基準の緩和	児童養護施設には保育士を配置することとされているが、幼稚園教諭の資格取得者を配置しても、現行の基準では求められる職員数に含めることができない。幼稚園教諭の役割は、児童の健やかな成長のためにその心身の発達を助長することであり、児童養護施設で生活する児童に対しても保育士同様にその役割を十分果たし得る職種である。よって、現在、保育士を配置することと定められている職種の規定を、幼稚園教諭の資格取得者も配置できるよう要望する。	近年、児童養護施設の現場では、保育士の人材確保に苦慮している。平成29年10月末時点での鳥取県における保育士の有効求人倍率は2.64であり、求める人数の半分の希望者もない状況である。また、福祉人材センターにおける過去5年間の保育士就業人数は0人であり、保育士の確保は大変厳しい状況にある。なお、年度中途に育児休暇等を補充するための保育士確保はさらに厳しい状況にある。	幼稚園教諭資格取得者も要件に加えることで、募集枠が広がり応募が増えれば、この課題に対する解消に繋がるものと考えられる。また、幼稚園教諭の職の選択肢も増え、限られた人材の有効活用が期待される。	児童福祉施設の設備及び運営に関する基準(昭和23年厚生省令63号)第42条第1項	厚生労働省	鳥取県、滋賀県、京都府、大阪府、堺市、兵庫県、神戸市、和歌山県、徳島県、中国地方知事会、日本創生のための将来世代応援同盟		山梨市、北九州市、大分県	<ul style="list-style-type: none"> <li>〇1支障事例について児童養護施設の現場では、保育士に限らず児童指導員など有資格者の人材確保に苦慮している。</li> <li>2各地における課題等について児童養護施設では、保育実習の受け入れ先として毎年、数多くの実習生を受け入れている。保育実習の受け入れ先である児童養護施設では、就職活動の一環として、実習生と関わりのある大学等に対し、就職先としてのあっせんを依頼しているが、各大学等卒業生のうち1名程度しか児童養護施設に就職していない。</li> <li>幼稚園教諭資格取得者も要件に加えることはもちろんの事、児童養護施設が魅力ある職場であることをPRすることも必要である。</li> <li>〇保育士を含め、直接処遇職員の確保ができず、職員配置が改善できていない施設がある。女性の直接処遇職員が不足し、宿直勤務のローテーションを組むことに施設が苦労している。</li> <li>〇支援困難ケース児童の占める割合が高くなってきたことなどから、児童養護施設における職員(保育士)の定着率が低くなっていることや、福祉系の学生が児童福祉(社会的養護関係)を目指す割合が低くなっていることなどから、人材確保には困難性が認められる。</li> <li>〇平成29年度において、県内1カ所の児童養護施設で施設内での小規模グループケアの実施を新たに予定していたにもかかわらず、直接処遇職員(保育士や児童指導員)の確保ができず実施を延期した事例があった。</li> </ul>	保育士については、養成課程において、乳児保育や社会的養護に関する内容などの児童養護施設に従事するために必要な内容を履修することとされている。一方で、幼稚園教諭については、これらの履修が必須とはされていないことから、児童養護施設において、幼稚園教諭の資格を有することをもって、直ちに保育士と同様の役割を十分果たし得ると言うことではできないが、二提案に対してどのような対応が可能であるかについては、有識者及び関係団体等の意見等を踏まえながら、慎重に検討したい。

別添1

管理番号	提案区分		提案事項(事項名)	求める措置の具体的内容	具体的な支障事例	制度改正による効果 (提案の実現による住民の利便性の向上、行政の効率化等)	根拠法令等	制度の所管・関係府省	団体名	その他 (特記事項)	<追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)>		回答欄(各府省)
	区分	分野									団体名	支障事例	
147	B 地方に対する 規制緩和	医療・福祉	社会福祉法人が経営する社会福祉施設への施設監査(一般監査)周期の見直し	前年度における施設監査(一般監査)の結果、適正な運営が確保されていると認められた社会福祉施設(老人福祉施設、障害者支援施設等)の施設監査(一般監査)周期の見直し	社会福祉法人が経営する社会福祉施設(老人福祉施設、障害者支援施設等、生活保護法による保護施設)への施設監査(一般監査)の周期については、要綱で原則として毎年1回は実施を行うこととされている。(前年度における一般監査の結果、適正な運営が概ね確保されていると認められる場合には、書面による実施が可能)また、児童福祉施設への一般監査の周期については、児童福祉法施行令により、1年に1回以上と定められている。施設監査(一般監査)と法人監査についてはともに周期が2年に1回であったことと併せて、社会福祉法人への法人監査と同時に実施できるようにするため、現行の原則2年に1回を、原則3年に1回に見直すよう求める。なお、運営上、問題のある施設については、必要に応じて、前年度も実地による施設監査を行う。	施設監査(一般監査)の周期についても法人監査と同様に原則3年に1回とする。施設監査(一般監査)と法人監査を同日に実施することが可能となり、監査事務の効率化が図られ、運営上問題のある施設に対する監査を重点化することができる。	社会福祉法第70条、老人福祉法第18条、障害者総合支援法第46条第3項及び第85条、児童福祉法第46条及び第99条、認定子ども園法第19条、生活保護法第44条、児童福祉法施行令第38条、「社会福祉法人指導監査実施要綱の制定」について、「老人福祉施設に係る指導監査について(通知)」、「障害者支援施設等に係る指導監査について(通知)」、「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律」に基づく幼保連携型認定こども園に対する指導監査について(通知)」、「生活保護法による保護施設に対する指導監査について」	内閣府、文部科学省、厚生労働省	奈良県		宮城県、新潟市、金沢市、京都市、大阪市、兵庫県、広島市、徳島県、福岡県、熊本県、熊本市	<p>○本市においても、社会福祉法人が経営する社会福祉施設(老人福祉施設、障害者支援施設監査(一般監査))のうち適正な運営が確保されていると認められる老人福祉施設、障害者支援施設及び法人監査についてはともに周期が2年に1回であったことから、社会福祉法人の負担軽減及び効果的かつ効率的な監査実施の観点から、法人担当と調整のうえ、同日に指導監査を実施してきたが、法人監査の周期が原則3年に1回に変更されたことにより、同日に行うことが困難な事例が生じている。</p> <p>○本市において、児童福祉施設等が増加している中、施設監査(一般監査)の周期についても法人監査と同様に原則3年に1回となることで施設監査(一般監査)と法人監査を同日に実施することが可能となり、監査事務の効率化、負担軽減等に対するより一層の迅速な対応、運営上問題のある施設に対する監査の重点化や介護保険サービス、障害福祉サービス事業所等への指導を強化することができる。</p> <p>○本市においても、監査対象施設数が増加していることから、効率的に監査を実施する必要がある。</p> <p>○本市の監査においては、現行のとおり実施しております。貴団体のご提案から、本市におきましても周期が合わないことより、不都合が生じてくると考えております。老人福祉施設、障がい者支援施設等、生活保護法による保護施設への施設監査の周期と児童福祉施設への監査周期をあわせ、これに法人監査を間隔させることにより、双方の事務負担を考慮すれば、より効果的な監査が行われると考えます。</p> <p>○監査対象施設数の増加については本市においても、監査実施における課題となっており、運営状況が良好な施設についてはその周期が伸ばせるならば、指導等を行う必要がある施設に注力できることも繋がることから好ましいと考えます。</p> <p>○本県においても、指導監査の重点化を図るため、法人運営に特に大きな問題が認められない法人に対する監査の周期を原則3年に延長することとしている。</p> <p>○施設監査と法人監査の周期が異なるため、両監査を同日に効率的に実施することができず、また、運営が良好な法人にとっても負担軽減とならない状況となっている。</p> <p>○社会福祉法人及び社会福祉施設の両者の指導監督を所管する本市としては、効率化の観点から両者を同時に監査することは当然と考え、すでに平成29年度から、施設監査の周期を法人監査の周期と合わせ、原則3年に1回監査を実施している。</p> <p>なお、児童福祉施設については、児童養護施設等の監査は従前どおり1年に1回実施しているが、数の多い保育所の監査は実地監査を3年に1回行い、実地監査を行わない場合は書面監査を行うこととしている。</p> <p>○座席に開示する。</p> <p>本県では、老人福祉施設、障害者支援施設(自治事務)については、指導監査の重点化・効率化の観点から、法人及び施設の監査を同日に実施すべく、法人指導監査の周期に合わせて、原則、3年に1回へ変更したところ(保護施設(法定受託事務)については、従前のとおり変更なし)。</p> <p>その一方で、児童福祉施設(自治事務)については、原則年1回の一般監査を行っており、子ども・子育て支援新制度の施行に伴い、保育所等が増加する中、問題のある施設や新規参入施設に重点化するなど、メリハリのある施設監査を行うことが必要となっている状況。</p> <p>○法人監査と施設監査の周期が違うことにより、法人本部が置かれている施設と、当該施設の施設監査の監査年が異なる場合があり、施設の負担が増えている。</p> <p>また、本県においても、幼保連携型認定こども園の増加に伴い、監査対象施設数も増加している。</p> <p>○社会福祉法人への法人監査と、障害者支援施設への一般監査は、周期が異なることで事業所によっては、毎年何らかの監査が実施される、事業者の負担軽減の観点から、問題のある施設以外は原則3年に1回の実施に見直しすることが望ましい。</p>	
157	B 地方に対する 規制緩和	医療・福祉	生活保護法第29条に基づく年金事務所に対する調査権限の付与について	現行の生活保護法第29条に基づく年金調査は、日本年金機構中央年金センターへ文書による照会・回答を行う必要があるが、その文書や取り取り時間を要し、年金支給に係る不正受給対策が遅れている。 <p>また、今般の年金支給期間の短縮で年金該当者が増え、福祉事務所での再調査の結果、今まで発見できなかった受給者の年金保険料納付期間が見つかるケースが多くあった。それに伴って、生活保護受給者が福祉事務所へ収入申告せず年金を滞り受給し、福祉事務所が日本年金機構から回答を受け取る頃には全額消費してしまふケースがあり、福祉事務所としては不正受給防止の対応に大変苦慮している。</p> <p>一方、地方公共団体の税務担当職員による税務調査では、地方税法第29条の11に基づき、必要に応じて税務署において資料の閲覧ができる。生活保護担当職員も生活保護法第29条に基づく同様の権限により、事前に被保護者の年金支給決定や支給日等の情報が分かれば、これに係る不正受給を防止することができる。</p>	本市において生活保護受給者は高齢者や障害者が約7割を占めている。年々かかる時間や78歳徴収金の事務処理で費やしてきた時間を大幅に短縮できる。 <p>○29条調査で年金支給に関する全ての事項ができることにより、被保護者の年金受給権の可否、年金額や受け取り見込額、年金受け取り月日、納付期間に寄与する。</p>	○最寄りの年金事務所でも調査できることにより、これまで照会・回答にかかった時間や78歳徴収金の事務処理で費やしてきた時間を大幅に短縮できる。 <p>○生活保護法第29条及び第29条第2項、○日本年金機構における生活保護法第29条に基づく照会回答事務(集約化について)(平成29年3月3日付竹俣課保護係長通知)</p>	厚生労働省	郡山市	【提案②参考資料】生活保護法第29条に基づく年金事務所に対する調査権限の付与.pdf	宮城県、石岡市、ひたちなか市、所沢市、大和市、福井市、岐阜市、多治見市、山梨市、田原市、札幌市、大阪市、堺市、八尾市、西宮市、出雲市、熊本市	<p>○直接、最寄りの年金事務所へ赴き、窓口で調査依頼をすることがあるが、繁忙期や調査対象者が多いと、対応を断られるときがある。相談の予約をしても数週間先になることもあり、迅速な処理の支障を来している。</p> <p>○生活保護受給者の年金収入の有無等については、事務手続きが簡素でないことや、遅やかに状況を把握できないことから、裁定請求が遅れ、結果的に法第63条による費用返還額や法第78条による費用徴収額が、高額になってしまうことが多い。</p> <p>○年金支給開始の申告が無くなった後の課税調査等で年金の支給が発覚し、結果保護費の不正支給が発見されたケースが複数発生。個別に年金事務所へ文書照会を行ったとしても、日本年金機構中央年金センターにて照会を行うような状況であり、日本年金機構中央年金センターへの照会では、照会文書発送日から回答受領日までおよそ1か月程度要するものが現状である。要保護者から保護申請を受けた際にも、申請日当日に調査文書を送ったとしても、法定期限である14日以内に当該調査の回答が得られないのが現状である。</p> <p>○現在、生活保護法第29条に基づき、日本年金機構へ文書による照会を実施する際に、回答を得られるまでに約3週間を要している。また、早急に年金情報が必要な場合には、地区担当員が年金事務所へ出向き調査を行うが、その際に、事前に本人に調査目的を説明し、委任状に記入・捺印してもらう必要があるため、事務処理に時間が掛かっている。生活保護担当職員に調査権限が付与されれば、それらに掛かる時間が削減され、不正支給の早期発見・早期対応が可能となるため、必要な権限であると考える。</p>		
											<p>○老人福祉施設の監査は、適切な入所者処遇や入所者の生活環境等の確保等を目的として、原則1年に1回の監査が求められているものである。法人監査と施設監査の周期を揃えた場合、監査頻度の低下によって上記目的が達成されないことが危惧されるため、施設監査の周期見直しは不適切であると考えられる。</p> <p>○ 障害者支援施設等に対する指導監査は、適切な障害者(利用者)の支援(個別支援計画、食事、入浴、排泄、衛生、自立援助、防災対策等)が確保されていることを確認するため、原則毎年1回の実地監査が求められているものであり、監査の効果的な実施との理由をもって施設監査の頻度を減らすことは、利用者処遇の低下を招きかねないことから不適切であると考えられる。</p> <p>○ 保育園等における保育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培うものであることから、保育の受け皿の拡充と同時に保育の質の確保・向上が求められており、保育園の保育の質や子ども等の安全を確保するため、各都道府県等において毎年1回以上、人員配置基準を満たしているか等について実地監査を行う仕組みとしている。</p> <p>また、児童養護施設等の社会的養護の施設では、施設に入所する子どもへの最善の利益を図るため、権利擁護や被措置児童等虐待防止、子どもの自立支援、職員の資質向上などの取組が確実に進められていることを確認する必要があることから、1年に1回の監査を行っている。このように、児童福祉施設についてはより一層の質の確保が求められているなか、法人監査と同様に実施することが効率的との理由によって頻度を減らすことはそれに逆行するため不適切であり、実現は困難。</p> <p>○ 保護施設の指導監査は、原則年1回実地監査を行うこととし、前年度の実地監査の結果、適正な施設運営が概ね確保されていると認められる施設は例外的に2年に1回と差し支えないこととしているところである。保護施設の監査は、入所者の自立や自治に向けた適切な支援が実施できる体制が整っているかを確認することを目的としており、その監査内容については、入所者の適切な処遇や生活環境等の確保、入所者の自立等に向けた支援の実施状況や職員の体制、防災対策など、入所者の日常生活や生命の安全に直接関わる重要な確認項目が多く、監査内容の性格上、基本的には毎年の確認が必要であると考えられることから、法人監査業務との効率化というのみを以て、監査の周期を緩和することは適切ではない。</p> <p>○ 幼保連携型認定こども園の監査については、小児保健課の子どものための教育・保育等の提供等の適正かつ円滑な実施を確保するため、学級の編成、職員、設備及び保育に関する基準等の遵守状況を実施検査等で確認し、必要な指導助言を講ずることとしている。</p> <p>実施頻度については、認可保育所等である都道府県等による定期的かつ計画的な実施としているが、児童福祉施設である幼保連携型認定こども園は、児童福祉施設が、原則1年に一度以上、実地調査を行うこととの趣旨を踏まえている。</p> <p>そのため、法人監査の業務との効率化というのみを以て、監査周期の考え方を変更することは適切でないと考えている。</p>		
											<p>生活保護法第29条に基づく調査に係る回答事務については、照会件数も多く、照会事項が定例のものであることから、日本年金機構における照会回答に関する業務の効率化の観点から、平成29年4月1日より香川県高松市の日本年金機構中央年金センター(以下「高松集約センター」という。)へ集約している。集約化後は、年金事務所において照会回答の業務を行っていたが、専門の部署がなくなる体制も懸念されていたため、回答送付までの期間のばらつきがあったほか、一定の時間を要する場合もあった。一方で、集約化後は、体制を整え「照会」回答業務を行っているため、現在では特段の事情がなければ概ね1週間～10日程度で回答を送付している。</p> <p>この提案のように、最寄りの年金事務所へ照会回答の業務を行うことは、従前の取扱いに異なるところであるが、これにより必ずしも回答が早くないとはならないとされている(なお、業務上緊急に回答を行う早急回答が必要な場合は、その旨を付け、従前どおり年金事務所へ照会いただくことも可能である。)</p> <p>また、保護の実施機関が速やかに当該年金の支給情報を把握し当該被保護者に請求できるようにするための方策として、現時点で実施時期は未定であるが、行政手続における特定の個人を識別するための番号の利用等に関する法律(平成26年法律第27号)に基づく情報提供ネットワークシステムを使用した日本年金機構との円滑な情報共有の方策について、取り組みを進めていくことが必要である。</p> <p>なお、支給資格期間短縮に伴う対応については、「年金支給資格期間短縮に伴う円滑な年金請求手続を実施するための生活保護事務局と国民年金担当事務局との連携について」(平成29年3月16日社援係0316第1号、年金係0316第4号)通知より、保護の実施機関等の生活保護担当事務局と市区町村国民年金担当課等の国民年金担当事務局、日本年金機構・年金事務所が、連携して取り組む方策を行っている。この一環として、高松集約センターへ照会をせずとも、市区町村の国民年金担当事務局に照会することで保護の実施機関が被保護者の請求状況等を把握することと可能とする特に対処している。この趣旨は、支給資格期間短縮の施行日(一度に約70万人以上の年金の新規裁定発生があるが、この中に一定程度存在すると考えられる被保護者について、照会を高松集約センターで受けること、回答が大規模に遅れることが懸念されたためである。</p>		







管理番号	提案区分		提案事項(事項名)	求める措置の具体的内容	具体的な支障事例	制度改正による効果 (提案の実現による住民の利便性の向上、行政の効率化等)	根拠法令等	制度の所管・関係府省	団体名	その他 (特記事項)	<追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)>		回答欄(各府省)
	区分	分野									団体名	支障事例	
207	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	介護保険事務における証の再発行申請等への個人番号記載の義務付け廃止	<p>【支障事例】 紛失や破損等による介護保険被保険者証及び負担限度額認定証並びに介護保険負担割合証の再交付申請や届出において、申請者に個人番号を記載するよう求められているが、証の再交付事務には情報連携する必要はなく、申請に基づき、再交付するのみであり、個人番号記載の必要性を市民に対して説明することは難しい。</p> <p>また、再交付申請件数は年間約2000件あるが、要介護状態にある高齢者が実行することはほぼないため、介護保険事業者が「手続きに訪れる。その際、申請書に個人番号が記載されていることはないため、職員が調査の上記載している。情報連携しないにもかかわらず、個人番号を職員が記入することで、処理時間は年間約2000分増加している。</p> <p>よって、既に発行済みである保険証等の再交付事務において、個人番号を記載する義務付けを廃止していただきたい。</p>	<p>【効果】 個人番号を入力するために、本人確認や委任状の確認等の事務があるが、個人番号の記載や確認をしないことにより、時間が短縮され、能率的に保険証等を交付することができ、また待合時間の短縮により市民サービスの向上につながる。</p> <p>破損や紛失等による再交付に当たって、個人番号を取得すること、及び情報連携をすることは、不要な取得に当たると考えられることから、不要な情報連携を回避することができる。</p>	行政手続きにおける特定の個人を識別するための番号の利用等に関する法律 介護保険法施行規則	内閣府、厚生労働省	各務原市	01介護保険被保険者証等再交付申請書.pdf 02介護保険負担割合証再交付申請書.pdf	<p>米沢市、浪江町、石岡市、ひたちなか市、菅志野市、八王子市、大塚市、山梨市、田原市、出雲市、高松市、今治市、砥部町、筑後市</p> <p>○紛失や破損等による介護保険被保険者証及び負担限度額認定証並びに介護保険負担割合証の再交付申請や届出において、申請者に個人番号を記載するよう求められているが、証の再交付事務には情報連携する必要はなく、申請に基づき、再交付するのみであり、個人番号記載の必要性を市民に対して説明することは難しい。</p> <p>よって、既に発行済みである保険証等の再交付事務において、個人番号を記載する義務付けを廃止していただきたい。</p> <p>○再交付申請では、年間約300人から再交付申請があり、そのうち半数が介護保険事業者が代行手続きをするため、個人番号の記載は困難であり職権での補記が必要がある。また、情報連携の必要もなかったため、市民へ個人番号記載の必要性についての説明ができない。以上のことから、再交付申請にあつての個人番号記載する義務付けを廃止してほしい。</p> <p>○マイナンバー記入に要する市民の負担及び事務負担が大きい状況である一方、マイナンバーによる情報連携の必要がないことから、制度改正の必要性を認めます。</p> <p>○介護保険法施行規則において、介護保険被保険者証、負担割合証、負担限度額認定証等の交付・再交付の申請や、氏名・住所等被保険者情報の変更届出の際は「姓・氏名・生年月日等」に加え個人番号(マイナンバー)を記入するよう定めているが、既に被保険者資格を有する者が対象であることからマイナンバーを収集する必要はなく、また情報連携も想定されないため、必要性が説明できない。</p> <p>○マイナンバーの記入にあつてはマイナンバーカード等による本人確認を行う必要があるが、介護保険関係の手続きは当事者が要介護の高齢者であることから、マイナンバーの管理・記入が困難な人や本人確認書類を所持しない人も多く、窓口での説明や手続きに時間を要している。</p> <p>○介護事業者が代理申請する場合においても、マイナンバーの管理や代理申請の条件が厳しく負担が大きいため、マイナンバー欄は空欄にする例が多く見られる。</p> <p>よって、既に発行済みである保険証等の再交付事務において、個人番号を記載する義務付けを廃止していただきたい。</p> <p>○マイナンバーの記入に当たっては本人確認が必要であるが、マイナンバーを確認できる書類や本人確認できる書類を所持していない高齢者も多く窓口事務が煩雑になっている。</p> <p>○介護保険被保険者証等の再交付申請に関しては、個人番号が未記載となっていることが多く、未記入については職員が保険証に記載しているものの、情報連携においては当該事務処理の必要性はないものと捉えている。</p> <p>○再交付申請であることから、改めてマイナンバーを収集する必要はないと思われ、また情報連携も想定されないため、必要性がないと考える。</p> <p>再交付申請者が家族・介護事業者の代理申請が多く、マイナンバーの管理や代理申請の条件が厳しく負担が大きいため、マイナンバー欄は空欄にする例が多く見られ、市が職権で補記する事務が生じている。</p> <p>○介護保険被保険者証等再交付申請書の個人番号記載欄は、ご本人でない方の申請も多く、未記入の場合が多いため事務負担が大きい。</p> <p>個人番号を利用して情報連携を行う必要がない業務なので、記入の義務付けの廃止及び記入欄の廃止をしていただきたい。</p> <p>○再交付申請(届出)は情報連携のうえ、マイナンバー記載の上での申請は10件程度であり、当市においても事務処理上の負担となっている。</p>	<p>【内閣府】 まず、厚生労働省において、提案の事務の処理におけるマイナンバー利用の必要性を確認・整理した上で、同省と連携しつつ検討する。</p> <p>【厚生労働省】 介護保険における被保険者証等の交付や再交付の事務については、被保険者の情報を、個人番号を利用して検索・管理する目的により、申請書等に個人番号の記載を求めている。提案については、介護保険事務全体における個人番号を利用した事務処理に支障がない限りにおいて、住民の負担と地方公共団体の事務負担の軽減が図られるよう、地方公共団体における運用の実態等も踏まえ、個人番号の記載の義務づけの要否について、関係府省と連携しつつ検討してまいりたい。</p> <p>なお、個人番号の導入にあたり、申請者等が高齢であることにも鑑み、申請受付時等の対応については、申請者が自身の個人番号がわからず申請書への個人番号の記載が難しい場合等には、市町村の住民基本台帳又は住民基本台帳ネットワーク等を用いて当該申請者の個人番号を検索し、職員が記載して差し支えないこと等を示している。</p>	
208	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	医療保険事務における証の再発行申請等への個人番号記載の義務付け廃止	<p>【支障事例】 紛失や破損等による医療保険被保険者証及び高齢受給者証並びに資格証明書の再交付申請において、申請者に個人番号を記載するよう求められているが、証の再交付事務には情報連携する必要はなく、申請に基づき、再交付するのみであり、個人番号記載の必要性を市民に対して説明することは難しい。</p> <p>よって、既に発行済みである保険証等の再交付事務において、個人番号を記載する義務付けを廃止していただきたい。</p>	<p>【効果】 個人番号を入力するために、本人確認や委任状の確認等の事務があるが、個人番号の記載や確認をしないことにより、時間が短縮され、能率的に保険証等を交付することができ、また待合時間の短縮により市民サービスの向上につながる。</p> <p>破損や紛失等による再交付に当たって、個人番号を取得すること、及び情報連携をすることは、不要な取得に当たると考えられることから、不要な情報連携を回避することができる。</p>	行政手続きにおける特定の個人を識別するための番号の利用等に関する法律 国民健康保険法施行規則	内閣府、厚生労働省	各務原市	03国民健康保険被保険者証等交付申請書.pdf	<p>ひたちなか市、新宿区、八王子市、横浜市、川崎市、多治見市、豊田市、鳥取県、出雲市、山陰小野田市、今治市、香川県</p> <p>○証の再交付事務には情報連携を行う必要はなく、市民に対して、個人番号を記載することの主旨を説明することが難しい。</p> <p>○再交付申請(届出)は、国民健康保険事務全般において、行政側が個人番号を把握しているにもかかわらず届出時に個人番号を記載せよという制度自体を見直す必要があると考える。</p> <p>○証の再交付事務には情報連携する必要はなく、申請に基づき再交付するのみであり、個人番号記載の必要性を市民に対して説明することは難しい。</p> <p>○再交付申請(届出)は情報連携をしない高齢者も多く窓口事務が煩雑になっている。</p> <p>○再交付申請については職員が保険証に記載しているものの、情報連携においては当該事務処理の必要性はないものと捉えている。</p> <p>○再交付申請であることから、改めてマイナンバーを収集する必要はないと思われ、また情報連携も想定されないため、必要性がないと考える。</p> <p>再交付申請者が家族・介護事業者の代理申請が多く、マイナンバーの管理や代理申請の条件が厳しく負担が大きいため、マイナンバー欄は空欄にする例が多く見られ、市が職権で補記する事務が生じている。</p> <p>○介護保険被保険者証等再交付申請書の個人番号記載欄は、ご本人でない方の申請も多く、未記入の場合が多いため事務負担が大きい。</p> <p>個人番号を利用して情報連携を行う必要がない業務なので、記入の義務付けの廃止及び記入欄の廃止をしていただきたい。</p> <p>○再交付申請(届出)は情報連携のうえ、マイナンバー記載の上での申請は10件程度であり、当市においても事務処理上の負担となっている。</p>	<p>【内閣府】 ○国民健康保険法施行規則については、「平成29年の地方からの提案等に関する対応方針(平成29年12月26日閣議決定)」において、「(中略)国民健康保険法施行規則(昭33厚生省令53)において、個人番号の記載を義務付けている事務手続については、国民健康保険事務全体における個人番号を利用した事務処理に支障がない限りにおいて、住民の負担と地方公共団体の事務負担の軽減が図られるよう、地方公共団体における運用実態等を踏まえ、個人番号の記載の義務づけの要否について関係府省が連携して検討し、平成30年中に結論を導く。その結果に基づいて必要な措置を講ずる。」となっており、現在、厚生労働省と協議中である。</p> <p>○後期高齢者医療制度については、まず、厚生労働省において、提案の事務の処理におけるマイナンバー利用の必要性を確認・整理した上で、同省と連携しつつ検討する。</p> <p>【厚生労働省】 ○国民健康保険法施行規則に対しては、平成29年においても同省のご提案をいただいでおり、「平成29年の地方からの提案等に関する対応方針(平成29年12月26日閣議決定)」において、「(中略)国民健康保険法施行規則(昭33厚生省令53)において、個人番号の記載を義務付けている事務手続については、国民健康保険事務全体における個人番号を利用した事務処理に支障がない限りにおいて、住民の負担と地方公共団体の事務負担の軽減が図られるよう、地方公共団体における運用実態等を踏まえ、個人番号の記載の義務づけの要否について関係府省が連携して検討し、平成30年中に結論を導く。その結果に基づいて必要な措置を講ずる。」となっている(現在、関係府省と協議中)。</p> <p>○後期高齢者医療制度においても、上記の国民健康保険と同様に、後期高齢者医療事務全体における個人番号を利用した事務処理に支障がない限りにおいて、住民の負担と地方公共団体の事務負担の軽減が図られるよう、地方公共団体における運用実態等を踏まえ、個人番号の記載の義務づけの要否について関係府省が連携して検討する。</p>	

管理番号	提案区分		提案事項(事項名)	求める措置の具体的内容	具体的な支障事例	制度改正による効果 (提案の実現による住民の利便性の向上、行政の効率化等)	根拠法令等	制度の所管・関係府省	団体名	その他 (特記事項)	<追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)>		回答欄(各府省)
	区分	分野									団体名	支障事例	
209	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	障がい者福祉事務における証の再発行申請等への個人番号記載の義務付け廃止	【支障事例】 紛失や破損等による自立支援医療受給者証や身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、障害福祉サービス受給者証、地域相談支援受給者証、療養介護医療受給者証の再交付申請において、申請者に個人番号を記載するよう求めているが、証の再交付事務には情報連携する必要はなく、申請に基づき、再交付するのみであり、個人番号記載の必要性を市民に対して説明することは難しい。 よって、既に発行済みである受給者証等の再交付事務において、個人番号を記載する義務付けを廃止していただきたい。	【効果】 個人番号を入力するために、本人確認や委任状の確認等の事務があるが、個人番号の記載や確認をしないことにより、時間が短縮され、能率的に受給者証等を交付することができ、また待合時間の短縮により市民サービスの向上につながる。 破損や紛失等による再交付に当たって、個人番号を取得すること、及び情報連携をすることは、不要な取得に当たると考えられることから、不要な情報連携を回避することができる。	行政手続きにおける特定の個人を識別するための番号の利用等に関する法律 障害者総合支援法施行規則	内閣府、厚生労働省	各務原市	04障害者手帳記載事項証明書 再発行申請書.pdf 05自立支援医療受給者証再交付申請書.pdf 06受給者証再交付申請書.pdf 07身体障害者手帳申請書.pdf 08福祉医療受給者証再交付申請書.pdf	宮城県、浪江町、ひたちなか市、川崎市、大和市、静岡県、城陽市、出雲市、今治市、熊本市、大分県	○紛失や破損等による自立支援医療受給者証や身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、障害福祉サービス受給者証、地域相談支援受給者証、療養介護医療受給者証の再交付申請において、申請者に個人番号を記載するよう求めているが、証の再交付事務には情報連携する必要はなく、申請に基づき、再交付するのみであり、個人番号記載の必要性を市民に対して説明することは難しい。 ○再交付は「個人番号を記載してもいい情報連携をする必要がある事務」ではないことから、申請者にとっても職員にとっても余計な負担となり無意味な時間をかけるだけになっていく。市民サービスの向上のために記載義務をなくしてほしい。 ○障がい福祉事務における申請書には、マイナンバーの記載を要する申請書が多く、窓口でのマイナンバー確認が必要となっている。再発行や返還に係る申請書からマイナンバーの記載を省略できることになれば、よりスムーズな事務を執り行うことが可能である。 ○紛失や破損等による自立支援医療受給者証や身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳等の再交付申請において、申請者に個人番号を記載するよう求めているが、再交付事務は申請に基づき再交付するのみであり、情報連携する必要はない。また、個人番号の記載義務は、事務効率の向上のみならず、重要な個人情報を持ち歩くことのリスク軽減や待ち時間の短縮等、市民サービスの向上につながる。 よって、既に発行済みである受給者証等の再交付事務において、個人番号を記載する義務付けを廃止していただきたい。 ○再発行事務で、個人番号記載の必要性の説明を求められ、窓口では説明に苦慮する。能率的に受給者証等を交付するために制度改正は必要と考えられる。 ○紛失や破損等による障害福祉サービス受給者証、地域相談支援受給者証、療養介護医療受給者証の再交付申請様式において、個人番号記載欄を設けているが、証の再交付事務には情報連携する必要はなく、申請に基づき、再交付するのみであり、個人番号記載の必要性を市民に対して説明することは難しい。 よって、既に発行済みである受給者証等の再交付事務において、個人番号を記載する義務付けを廃止していただきたい。 ○再交付申請に個人番号を使用した事務処理を行うことにはいかかわらず、個人番号の記入を求める様式となっているため、記載があれば本人確認事務、記載がなければ職員が調べて記入する事務が発生するため、非効率な処理となっている。 ○紛失や破損等による自立支援医療受給者証や身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、障害福祉サービス受給者証、地域相談支援受給者証、療養介護医療受給者証の再交付申請において、申請者に個人番号を記載するよう求めているが、証の再交付事務には情報連携する必要はなく、申請に基づき、再交付するのみであり、個人番号記載の必要性を市民に対して説明することは難しい。 ○自立支援医療及び手帳再交付事務においては、当県でも情報連携の必要がないことから、個人番号の記載がないことによる支障はない。 個人番号の項目を削除することにより、申請時の確認時間短縮、申請から交付までの期間短縮による住民サービスの向上が期待できる。 ○当県においても、不要な個人情報の取得につながるため、情報リスクの回避の観点から廃止を希望する。 ○紛失や破損等による自立支援医療受給者証や精神障害者保健福祉手帳の再交付申請において申請者に個人番号を記載するよう求めているが、個人番号記載の必要性を申請者に対して説明することは難しく、市町からは個人番号を記載する義務付けを廃止を求められている。	【内閣府】 まず、厚生労働省において、提案の事務の処理におけるマイナンバー利用の必要性を確認・整理し、同省と連携しつつ検討する。 【厚生労働省】 障害者保健福祉事務における各種再発行申請等については、受給者証等の汚損、滅失等により申請者が受給者番号等の記載をすることが困難な場合に、個人番号から申請者を一意に特定して資格情報を呼び出して確認することが可能であることから、申請時に個人番号の記載を求めている。 提案については、障害者保健福祉事務全体における個人番号を利用した事務処理に支障がない限りにおいては、住民の負担と地方公共団体の事務負担の軽減を図られるよう、地方公共団体における運用の実態等も踏まえ、個人番号の記載の義務づけの要否について、関係府省と連携しつつ検討してまいります。 なお、身体障害者手帳(以下「手帳」という)は、更新の仕組みを取っておらず、平成28年1月1日のマイナンバーの利用開始以前に手帳を取得した者の個人番号を取得できる機会が限られていることや、転居の際には手帳所持者が住所変更届等を行い、転居先の都道府県においてマイナンバーを把握する必要があるものの、必ずしも把握されていないとを踏まえれば、手帳の再交付申請も、あらかじめ機会を通じて個人番号を記載するよう求めることは、手帳返還事務におけるマイナンバーの利用や他の行政機関に対する手帳の情報の提供を行う上で有用であると考えられる。
210	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	育児休業等の期間延長にかかわる要件緩和	育児休業の取得及び育児休業給付金の支給期間の延長要件である「保育が実施されない場合」の検証資料を、入所保留通知書の提出がなくても育児休業等の延長が可能になるように制度を改正して欲しい。 本市のように利用保留児童が生じている自治体の場合、意図的に入所枠に空きのない保育所のみを希望しうえて入所申込みをすれば、保護者は容易に保留通知を入手できるため、厚生労働省等の要件の定めにかかわらず、事実上無条件で育児休業等の延長が認められているのが現状である。 また、保留通知の取得を目的とした入所申込みにより、保護者と自治体に不要な事務的負担が生じるとともに、特に内定辞退がなされた場合は、本来希望の保育所に入所できなかったはずの児童が入所できないケースが生じ、公平な利用調整が困難になっている。 さらに、申込児童数や利用保留児童数等が想定より多く計上される等、正確な情報把握が困難になっており、待機児童対策をはじめとした国と自治体の保育施策全体を歪める恐れがある。	現在、育児休業の取得及び育児休業給付金の支給の期間については、育児休業・介護休業法及び雇用保険法において、原則として児童が1歳になるまでとされ、法令の要件を満たす場合には最大2歳まで延長できる。延長の要件は、厚生労働省令において「保育所等における保育の利用を希望し、申込みを行っているが、(省略)当面の実施が行われない場合」とされ、実務上はこの要件の確認資料として、雇用主やハローワークが保護者に市町村の発行する入所保留通知書の提出を求めているが、当面復職の意思がなく育児休業等の延長を希望する保護者が、保留通知の取得を目的とした入所申込みをする例が多数生じている。 本市のように利用保留児童が生じている自治体の場合、意図的に入所枠に空きのない保育所のみを希望しうえて入所申込みをすれば、保護者は容易に保留通知を入手できるため、厚生労働省等の要件の定めにかかわらず、事実上無条件で育児休業等の延長が認められているのが現状である。 また、保留通知の取得を目的とした入所申込みにより、保護者と自治体に不要な事務的負担が生じるとともに、特に内定辞退がなされた場合は、本来希望の保育所に入所できなかったはずの児童が入所できないケースが生じ、公平な利用調整が困難になっている。 さらに、申込児童数や利用保留児童数等が想定より多く計上される等、正確な情報把握が困難になっており、待機児童対策をはじめとした国と自治体の保育施策全体を歪める恐れがある。	保護者と自治体の事務的負担が軽減されるとともに、公平な利用調整が可能となり、保護者・児童の利益が守られる。 また、申込児童数や利用保留児童数等の正確な情報把握が可能になる。	雇用保険法第61条の4、雇用保険法施行規則第10条の11の2の3第1号、育児休業・介護休業法第5条第3項第2号、育児休業・介護休業法施行規則第6条第1項	厚生労働省	大阪市、堺市、京都市、兵衛市、兵庫県、神戸市、和歌山県、徳島県	盛岡市、花巻市、仙台市、ひたちなか市、所沢市、松陽市、江戸川区、川崎市、逗子市、豊田市、福岡市、大阪府、豊中市、奈良市、枚方市、八尾市、富田林市、和泉市、藤井寺市、墨本町、五野市、松浦市、宮崎市	○保育所に入れない証明としては、入所保留通知書の提出を求めているが、これは、給付の受給要件を満たすかどうかの確認を行う上で必要と認識しており、提出を不要とすることは困難である。 ○保育所に入れない証明としては、入所保留通知書の提出を求めているが、これは、給付の受給要件を満たすかどうかの確認を行う上で必要と認識しており、提出を不要とすることは困難である。	

管理番号	提案区分		提案事項(事項名)	求める措置の具体的内容	具体的な支障事例	制度改正による効果 (提案の実現による住民の利便性の向上、行政の効率化等)	根拠法令等	制度の所管・関係府省	団体名	その他 (特記事項)	<追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)>		回答欄(各府省)	
	区分	分野									団体名	支障事例		
211	B 地方に対する規制緩和	医療・福祉	共同保育の実施可能日の適用拡大	保育所等が、自園の児童に加え他の保育所等を利用している児童も受け入れて保育を行う共同保育について、現状実施が認められている土曜日に加え、同様に利用児童の少ないお盆、年末年始(12月29日～1月3日以外の12月28日、1月4日等)等に適用範囲を拡大で欲しい。	現状、土曜日のみ、近隣の保育所等が連携し、1か所の保育所等で共同保育することが認められているが、その他の場合、保育所等で提供される保育は、入所決定された施設内で提供されるものであり、入所決定された場所以外で保育を提供することは認められていない。 例えば3つの施設で共同保育を行う場合、本来は各施設最低2名×3施設＝6名の職員が必要であるが、共同保育をすることで最低2名で可能となり、このことで保育士の負担軽減、離職防止に一定の効果がある。しかし、土曜日と同じ保育コースが少ないお盆・年末年始等は、共同保育が望まれていないため、上記の例では最低6名の職員が必要となり、保育士不足の効率的な配置ができていない。また、お盆・年末年始等も勤務であることを敬避する保育士も一定数いることから、保育人材確保の支障となっている。 また、保育所等は基本的には月曜日から土曜日まで開所する必要があるが、保育コースが少ないお盆・年末年始等において、保護者の同意の上で保育協力日等を設定して保育士の休みを確保している例がある。保育が必要な場合は、当然保育所等は預かる必要があるが、保護者が保育所等に気を使って休暇を取らざるを得ない例もある。	例えば3つの施設で共同保育を行う場合、4名の職員が休暇を取れる可能性があり、保育士の負担軽減となることで、就労促進や定着率の向上など保育士不足解消につながるから、保育利用可能な児童数の増がみこまれ、待機児童解消に資する。 また、保護者にとっても、共同保育が可能となれば保護者が保育所等に気を使って休暇を取らざるを得ないという心理的な負担感が少なくなり、利便性も向上する。	「待機児童解消に向けて緊急に対応する施策について」の対応方針について ・特定教育・保育等に要する費用の繰の算定に関する基準等の改正に伴う実施上の留意事項について ・児童福祉施設の設備及び運営に関する基準 ・幼保連携型認定こども園の学級の編制、職員、設備及び運営に関する基準	内閣府、厚生労働省	大阪府、兵庫県、神戸市、和歌山県、鳥取県、徳島県			仙台市、福島県、山形県、貝塚市、出雲市	〇本市において、同一設置主体で、保育所・夜間保育所が隣接して立地している施設が存在しており、土曜日の共同保育を行っているが、お盆・年末年始においては、提案団体と同様に、それぞれの入所児童の職員配置基準を満たすよう、勤務形態を調整している。 本提案は、保育の質を低下させるとなく、保育士の業務軽減が可能となり、保育士の定着化に資するものである。 〇土曜日以外にもお盆期間など利用者が少ない期間において共同保育を認めることは、保育士の休暇確保等の観点から有効であると考える。市内の事業者よりお盆期間中の共同保育実施について相談を受けたこともあり、一定の効果は見込める。	お盆や年末年始等、保育所等の利用児童が少ない場合に、近隣の保育所等が連携し、1か所の保育所等で共同保育することは、保育士等の勤務環境改善につながるものであり、各市区町村の判断により、実施することができるため、対応済みである。 なお、土曜日については常態的に閉所する場合には公定価格上の減算の措置があるが、お盆や年末年始等についてはそのような措置はない。
221	B 地方に対する規制緩和	医療・福祉	児童福祉施設の実地検査に係る効果的・効率的な運用の見直し	児童福祉施設の実地検査について、対象施設が増加している中、限られた職員数で検査を効果的・効率的に実施し、児童福祉施設の質の向上を図っていくためには、地域の実情に応じた実地検査の実施が必要であるとする。そのため、例えば、過去の監査において指摘がない(少ない)施設や、実施状況を勘案し、施設の運営に大きな問題がない(優良施設)と認められる場合等には、都道府県の判断で弾力的に検査を実施できるよう、実施頻度に関する規定を見直す等運用の改善を図りたい。 ※認可外保育施設については、通知により弾力的運用が認められている	「実地検査」を行うべき保育所も増大する一方、職員の増員等の体制整備は容易ではなく、1施設あたりの監査に充てることのできる時間・労力を削減せざるを得ない状況と見られる。そのため、安全対策、処遇、会計処理の状況等を適切に検査することが難しくなる恐れがある。	都道府県の判断で「実地検査」の頻度、方法を設定できるようになれば、優良施設等については、3年に1度の実地検査の実施とする(あるいは「安全対策及び処遇と会計にかかる」実地検査)を分けて実施する等の効率化により生み出した時間を用いて、優良施設とは認められない施設、新規に設置された施設等の実地検査に注力し、より徹底して行うことが可能となる。その結果、安全確保、処遇の向上、会計処理の適正化等が実現できる。優良施設等側から見れば、実地検査を受ける際に必要となる時間・事務量が削減されるため、児童の処遇に充てる時間・事務量を増やすことができることとなる。 以上により、児童福祉施設全体の質の向上が図られる。	児童福祉法施行令第38条	厚生労働省	宮城県、三重県、広島県、日本列島の将来世代応援知事同盟		青森県、秋田市、新潟市、山形県、愛知県、兵庫県、神戸市、徳島県、松浦市、熊本市、沖縄県	〇本市では、保育所・家庭的保育事業等の認可及び1年以上の実地検査(施設監査)を行っている。対象施設・事業が増加するなか、検査で指摘が多い施設等には年2回以上の実地検査を行い、職員の負担が増加している。また、検査対象の施設等から、「指摘が少ない施設と指摘が多い施設が、毎年同一の検査を受けることを見直すべきではないか」との意見も出てきている。当市としても、過去の検査で指摘が少なかった施設等は、検査項目を絞ったスポット検査を行い、検査時間の短縮を行う等、検査内容の見直しに努めている。しかし、児童福祉法施行令第35条の4、第38条に「1年に1回以上の実地検査が義務づけられているため、1年に1回」の検査頻度は見直すことができない。当市の意見として、各施設等の状況に応じたより実地検査を行うために、児童福祉法施行令に定められた「1年に1回」の検査頻度の見直しを図りたい。 〇本市においても新制度移行後、保育所等の施設は増加傾向にあり、現地に直接運営状況等を確認することの重要性は認識するものの、限られた人員で全ての施設の実地検査を行うことは難しくなりつつある状況にある。提案にあるとおり、過去の実地検査において特段問題の見受けられない施設については毎年度ではなく2年あるいは3年に1度の実地検査が認められる等地域の実情に応じた弾力的運用が認められることは、適切な検査を継続していくうえでも必要であるとともに、より重点的な指導を行うことが可能になると考える。 〇本市の検査は、現在従来どおり1年に1度の実地検査を行っています。施設数の増加、職員体制の状況を見直し、認定こども園については半日の検査を実施しています。半日での実地検査では検査できる内容に限界が出てきている状況です。ご提案にあるように「優良施設」については、実施頻度を見直す等の対応を行うことが必要であると考えます。 〇本市においても、認定こども園等の施設数が増加する一方で、実際に監査を行う職員数が不足しているのが現状である。そのため、本市の判断で実地検査の頻度、方法を設定できるようになれば、職員の1施設あたりの監査に充てる時間を増やすことができ、保育の質の向上に繋がると考えるため、提案に賛同するものである。 〇本市において保育施設数が増加する一方、職員の増員等実地検査体制の整備は容易でないため、施設に対する監査が適切に行うことが難しくなる恐れがある。 〇本県においても、実地検査を行う際には、担当職員、対象施設ともに事前準備や当日対応に多大な労力を要している。優良施設等への対応を軽減することにより、担当職員、対象施設ともに業務の効率化が図られると考えられる。 〇検査対象保育所数が増加している中、限られた職員数で実地検査を行っているため、都道府県の判断で確認監査と合わせた柔軟な対応ができれば、児童福祉行政全体の質の向上が図られる。 〇本県においても、保育所数は年々増加しており、限られた職員で毎年全保育所に対し実地検査を行うことに苦慮している。そのため、1日で2か所(午前、午後)の保育所へ実地検査を行っているが、幅広い項目を適切に監査するだけの時間が確保できないことが課題となっている。従って、効果的・効率的な指導監査を行えるよう、地域において弾力的な運用を求める意見には賛成である。	保育園等における保育は、生涯にわたる人形格形成の基礎を培うものであることから、保育の受け皿の拡充と同時に「保育の質」の確保・向上が求められており、保育園の保育の質や子どもの安全を確保するため、各都道府県等において毎年1回以上、人員配置基準を満たしているか等について実地検査を行う仕組みとしている。 一方、指導監査の方法については、「児童福祉行政指導監査の実施について」(平成12年4月25日児発第471号)において、「監査対象施設の規模及び前回の指導監査の結果等を考慮し弾力的な指導監査を行うこと」としており、現行においても各自自治体の判断で、弾力的な運用が可能であることから、本提案は対応済みである。	
228	B 地方に対する規制緩和	医療・福祉	保育所型事業所内保育事業の受入れ児童の対象年齢の拡充について	〇事業所内保育事業は原則3歳未満の子を対象とした事業であるが、定員の規制がないことから、保育所型事業所内保育所(利用定員が20人以上)のような規模の大きい施設においては、通常の認可保育所と同様に3歳児以降の子どもにおいても集団による教育・保育の提供が可能。 〇現在特区において、特区小規模保育事業(※1)を実施しているが、保育所型事業所内保育事業においても同様に、3～5歳児の受け入れを可能とする ※1 国家戦略特区法の改正(29年9月施行)により特区内の小規模保育施設において、3歳以上の保育認定子どもの受け入れが可能となり、地域型保育給付の対象とされた。 〇上記により認可保育所などと同様に卒園後の受け皿も担保されるため、保育所型事業所内保育事業においては、連携施設の確保を不要とする。	〇事業所の保育施設については、企業主導型保育事業(認可外保育)での整備が増えているが、信頼性の高い認可施設としての設立を希望する事業所にとっては、現行制度では3～5歳児は受け入れられない。 〇本市では、地域型保育事業の連携施設については私立保育園による対応が困難なため、基本的に公立保育所が担っているが、施設数に限りがあることから確保に苦慮している。	〇大規模の事業所内保育施設の整備が行いやすくなり、保育の受け皿増加に寄与する 〇連携施設の確保にかかる事務負担を軽減できる	児童福祉法、子ども子育て支援法、家庭的保育事業等の設備及び運営に関する基準	内閣府、厚生労働省	沖縄市		盛岡市、花巻市、山形県、豊中市	〇事業所内保育所を含む家庭的保育事業の開設相談においては、連携施設の確保に苦慮しているという声も寄せられることもあり、提案内容のとおり措置されることで、事業者の参入が促されることが考えられる。特機児童の解消に繋がるものと思われる。 〇従業員枠で3歳児以上の子どもを保育している保育所型事業所内保育所のような規模の大きな施設において、受け入れ対象年齢を拡大することにより、保育の受け皿増加に寄与する。 〇本市においても、保育所型事業所内保育事業からの地域枠の進級先には苦慮しているところがある。また、従業員枠については、3～5歳児まで在籍できるものの、地域枠の児童が少ないため保育の園の人数が少なく、経営を維持し適切な集団保育等が提供できないケースもあることから、従業員枠を設定していても進級せずに別の保育所や幼稚園を選択する利用者もある。このことから、保育所型事業所内保育事業の地域枠についても3～5歳を設定できるようにすることで、地域枠はもとより従業員枠の利用者についても継続使用が滞ること、運営事業者にとってもより安定した運営が図られること、また、保育の受け皿の確保に寄与し待機児童解消の一助になる。	事業所内保育事業においては、人口減少地域や離島、認定こども園など満3歳以上児を受け入れる施設の確保が困難な地域や、満3歳以上児にも待機児童が発生している地域等、特段の事情がある場合には、3歳以上の児童を受け入れられることとしており、現行制度においても対応が可能である。 また、家庭的保育事業等の設備及び運営に関する基準(平成28年厚生労働省令第61号)第45条に規定する保育所型事業所内保育事業の連携施設に係る特例措置については、子ども子育て支援法(平成24年法律第65号)の施行後5年の見直しの中で検討することとしている。	

管理番号	提案区分		提案事項(事項名)	求める措置の具体的内容	具体的な支障事例	制度改正による効果 (提案の実現による住民の利便性の向上、行政の効率化等)	根拠法令等	制度の所管・関係府省	団体名	その他 (特記事項)	<追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)>		回答欄(各府省)
	区分	分野									団体名	支障事例	
230	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	保育教諭の経過措置の延長	幼保連携型認定こども園の職配置基準に係る特例措置の期間延長	現在、幼保連携型認定こども園において勤務する保育教諭は、保育士か幼稚園教諭のいずれも資格を有する必要があるが、平成31年度までは経過措置として、どちらかの資格を有すれば保育教諭となることができる。当市としても、経過措置期間内に、施設に対して保育教諭になるために必要となる保育士と幼稚園教諭の資格を取得するよう働きかけているところであるが、施設の利用希望者が増加し、職員配置上、保育現場に十分な余裕がなく、また、幼稚園教諭の養成機関も限られているため、平成31年度までの特例措置の期限までに市内の保育教諭が必要な資格を取得することは困難な状態となっている。この状態で、特例措置が終了すると、幼保連携型認定こども園への円滑な移行や、幼保連携型認定こども園における保育等が実施できなくなり、子どもを預かってもらえなくなった住民に混乱が生じることが予想される。						旭川市、仙台市、秋田市、船橋市、川崎市、須賀市、山梨市、豊田市、田原市、草津市、大阪府、大阪市、八尾市、兵庫県、神戸市、和歌山市、倉敷市、玉野市、徳島県、宮崎市、松本市、京都市、和歌山市、倉敷市、九洲地方知事会	子ども・子育て支援新制度におけるいわゆる「5年後見直し」については、平成30年5月28日に開催した子ども・子育て会議において議論が開始されたところであるが、検討項目として「幼保連携型認定こども園における保育教諭の資格の特例」を挙げている。 同会議は、認定こども園団体、自治体関係者等が構成員となっているが、5月28日の会議の場では、本特例を延長して欲しい旨の意見が述べられている。 今後、引き続き、同会議において議論を行い、その方向性を定める予定である。
267	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	住居確保給付金の再支給要件の緩和	生活困窮者自立支援法に基づく住居確保給付金について、傷病等により就職活動ができないまま当初支給期間が終了した者が、その後就職活動を再開し、支給要件を満たした場合に再支給できるようにすることを求める。	住居確保給付金の再支給については、生活困窮者自立支援法施行規則第16条により、解雇(自己の責めに帰すべき理由によるものを除く。)その他事業の都合による離職により経済的に困窮した場合に限り、認められている。 ○住居確保給付金の支給開始後、傷病により就職活動ができないまま当初支給期間(3か月)が終了した者について、その後に疾患の治癒により就職活動を行うことが可能となり、かつ、就職を容易にするため住居を確保するための必要があるとも認められる場合であっても、再支給することができない。 ○本市(当県)における有効求人倍率は全国平均を下回っており、また、保護率も全国平均を大きく回っている。生活保護の受給開始後に経済的に自立する事例は多く、生活保護の受給前に生活困窮者に対して自立を促進していくことが重要である。 ○住居確保給付金は高い常用就職率があり、生活困窮者の自立支援策として有効である。 【参考】 ○平成29年時点の人口千人あたりの生活保護受給者の割合(%) 全国平均16.8%、青森県23.38%、青森市30.55%	住居確保給付金の再支給要件を緩和することにより、生活保護を受給する可能性がある者の就労を支援し、自立を促進することが期待できる。	生活困窮者自立支援法第5条、生活困窮者自立支援法施行規則第16条、「住居確保給付金の支給事務の手引き」(「生活困窮者自立支援制度」に係る自治体マニュアル)、「住居確保給付金の支給事務の取扱問答(問7-5)」	厚生労働省	青森市	大和市、福井市、城陽市、西宮市、出雲市、熊本	○住居確保給付金の再支給要件は「受給者が住居確保給付金の支給期間中又は支給期間終了後に、常用就職した後に、新たに解雇された場合、(中略)再支給することができるものとする。」と規定されている。 住居確保給付金の支給が1か月や2か月といった派遣契約を複数回更新し、実際は1年～2年継続勤務した後に契約満了により離職したとしても、制度上は非常用就職であり、かつ会社都合退職(解雇)とは見なされない。そのため、受給者が離職により再び住居を喪失するおそれがあり、生活保護申請を希望しない場合であっても、金銭給付を伴う再支給を申請することができない。 ○記号事例と同様の事例のほか、下記のような事例もある。事例を限定せず、再支給要件の緩和について検討を行ってほしい。 (支障事例) 夫婦で生活しており、過去に夫が受給していた。妻が失業したため、給付金の支給を希望していたが、夫が生計中心であったため再支給の要件に該当せず、支給を断念した。他自治体より本市へ転入。転入後はアパートを借りて就労をしていたが、自己都合により退職。他自治体にて受給歴があると申し出があり、支給を断念した。 (再支給を認めたい事例) 雇用期間6ヶ月以上の常用就職であっても、あらかじめ契約更新がない旨規定されていた雇用を満了した場合、支給開始後、一時的な気象で就業活動ができないまま、3ヶ月の受給期間が終了。その後、体調が回復し、就職活動を再開する場合、自己都合による退職であったとしても、相当期間の就労があり、退職後も熱心に就職活動をしたと認められる場合には、自立相談支援機関や自治体の判断で再支給の検討ができるようにしてほしい。 ※給付金利用者の中には、雇用期間の定めがない常用雇用に就いたとしても、就労定着が難しい場合もある。また、職歴の浅さ等からいったんは雇用期間の定めのある常用雇用に就かざるを得ない者もいるため、給付金利用者・申請者の属性に配慮した再支給要件を再整備していただきたい。 ○本市にも同じような事例により、支給が中止され再支給で生活保護になったケースがある。再支給は生涯一度だけという条件について緩和を求め、住居確保給付金は、高い就職率があり、生活困窮者の自立促進を期待できる制度であるため、再支給要件の緩和を求める。 ○住居確保給付金については、該当者が少なく要件が上らない状況が続いており、支給要件の緩和により生活困窮者の自立促進が図れると考える。	

別添1

管理番号	提案区分		提案事項(事項名)	求める措置の具体的内容	具体的な支障事例	制度改正による効果 (提案の実現による住民の利便性の向上、行政の効率化等)	根拠法令等	制度の所管・関係府省	団体名	その他 (特記事項)	<追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)>		回答欄(各府省)
	区分	分野									団体名	支障事例	
271	B 地方に対する規制緩和	農業・農地	農林漁家民宿での食事提供について	農山漁村における交流人口の拡大による農林漁家所得向上、就業機会の創出と地域活性化を推進するため、農林漁家民宿で食事提供できる対象者の範囲を宿泊者以外にも拡大する必要があると考える。そこで、各都道府県が定める基準のもと、農林漁家民宿において宿泊者以外にも食事提供することが条例改正等により可能である旨を通知などで明らかにしていただきたい。	農林漁家民宿が、ビジネスとして維持・発展していくためには、宿泊客の安定確保はもとより、宿泊客以外の観光客等に対しても郷土料理を中心とした食事を提供することによる安定的な収入確保が重要である。実際、規制緩和を利用して開業した事業者からは、宿泊を伴わない利用(体験と食事のみなど)に関する問合せが増えており、宿泊者以外にも食事提供が可能となれば、年間利用客も増え、収入増や所得向上につながるという要望があがっている。 また、農山漁村には、飲食店が少ないことから、風景や自然景観を楽しみながら地域の郷土料理を食べることができないなど、観光客のニーズへの対応不足が交流人口拡大の阻害要因の一つとなっている。 現行、農林漁家民宿の宿泊者には飲食店営業許可の規制緩和の特例により、食事を提供することが可能であるが、宿泊者以外にも食事提供する場合には、当該許可施設を使用することはできず、新たに食事を提供するための専用の施設整備を要し、飲食店営業許可を別途取得する必要がある。しかし、この場合、施設整備に対する負担が大きいため、整備を断念するケースが多いことから、これまでの宿泊者への食事提供の実績等を勘案し、農林漁家民宿に対する飲食店営業許可の更なる規制緩和が求められる。	・農山漁村における交流人口の拡大と観光消費額の増加 ・宿泊客以外の観光客等に対しても郷土料理を主とする食事を提供することによる農林漁家民宿の収入確保	平成17年7月21日付け厚生労働省通知「農林漁業者等による農林漁家体験民宿施設の取扱いについて」	厚生労働省	山形県	平成17年7月21日付け食安監発第0721002号厚生労働省医業食品局食品安全部監視安全課長通知	徳島県	-	御提案いただいたケースのように、営業者が農林漁家体験民宿を営む農林漁業者であっても、不特定又は多数の者に反復継続して食事を提供する場合には、その他の飲食店と同様に取られるべきと考える。
274	B 地方に対する規制緩和	医療・福祉	家庭的保育事業者等による連携施設の拡充	1 連携施設の確保における「保育所」の定義に以下を加え、要件を緩和すること。 ① 認証保育所 ② 企業主導型保育事業所 ③ 特区小規模保育事業所 2 代替保育の連携施設の確保を求めないとする場合(事業実施場において代替保育が提供される場合)の要件や運用上の取り扱いを具体化、明確化すること。	1 現在、連携施設の対象としての「保育所」は、国の施行通知において「認可保育所に限る」とされている。新たに、「認証保育所、企業主導型保育事業所、国家戦略特別区域小規模保育事業所(入園対象年齢の拡大)」を加えることにより、保育所(認可施設)以外の選択肢が広がり、連携施設の確保が進むと考えられる。 2 代替保育は、地方分権改革提案を受け、家庭的保育事業者等の設備及び運営に関する基準の一部改正(平成20年4月27日付)により、「連携施設の確保の例外」として、一定の要件を満たすときには、事業実施場所で代替保育が提供される場合、「事業規模を勘案して小規模保育事業A型事業者等と同等の能力を有する」と市町村が認める者を適切に確保することにより、代替保育の連携施設の確保を求めない」として基準が緩和されたところである。 現状、区市町村では、「小規模保育事業A型事業者等と同等の能力を有する」と市町村が認める者の判断に支障が生じている(下列参照)。要件や運用上の取り扱いを具体的かつ明確に示すことで、家庭的保育事業者等における保育の質を担保しつつ、連携施設確保の例外規定の適切な運用を図ることができる。 ① 各区市町村が独自に任用した家庭的保育者の補助員 ② 職員の病欠、休暇等に備え、小規模保育および事業所内保育事業者が、自社雇用の保育士を予め確保し適切に対応している場合(同一法人を連携施設として認めることが可能か)	○保育所(認可施設)以外の選択肢が広がり、連携施設の確保が進むと考えられる。 ○家庭的保育事業者等における保育の質を担保しつつ、連携施設確保の例外規定の適切な運用を図ることができる。	児童福祉法第34条の16第1項および第2項、家庭的保育事業者等の設備及び運営に関する基準第6条、家庭的保育事業者等の設備及び運営に関する基準第9条5(2)号(児童養育施設法第2条)、群馬県家庭的保育事業者等の設備および運営の基準に関する条例第6条	内閣府、厚生労働省	特別区長会		盛岡市、神戸市	○連携施設の対象として企業主導型保育事業所の追加に賛同。	(1)について 保育の受け皿確保に当たっては、一定の保育の質が確保されている認可保育所を中心に整備していくことが必要と考え、保育の受け皿拡充と保育の質の確保を「車の両輪」として取り組む必要がある。 家庭的保育事業者等における連携施設の設置は、代替保育の提供や集団保育を受ける機会の提供など保育の質の向上の面でも極めて重要な仕組みである。このため、連携施設は、地域の保育の中心的機能を有し、連携施設としての機能を総合的に担うことができる、一定の保育の質が確保された「保育所・幼稚園」認定とも備わることが望ましいと考え、連携施設の確保を優先して取り組むこととする。 (2)について ご指摘の「小規模保育事業A型事業者等と同等の能力を有する」と市町村が認める者については、事業規模や保育士数等を考慮し、当該事業所から保育士を派遣するにあたって、当該事業所の本来の業務に支障が出ず、適切な業務を遂行できる事業者を想定しており、対応済みである。
275	B 地方に対する規制緩和	医療・福祉	家庭的保育事業者等による連携施設の確保について、経過措置期間の延長	家庭的保育事業者等による連携施設の確保について、経過措置期間を延長すること。 本規定については、平成32年3月31日までの経過措置が設けられており、各区市町村では、国の施行通知の考え方も踏まえつつ、積極的な関与・調整を図っているところである。 しかし、特に、「卒園後の受け皿」では、連携機種の大半を占める保育所および認定こども園の利用調整を市町村において実施しているため、家庭的保育事業者等が自ら確保できる施設に限られている。また、3歳児において認可保育所の受け皿の不足(待機児童の発生)が生じている。このような状況により、全ての家庭的保育事業者等が、経過措置期間中に連携施設を確保することができず、結果として事業認可の取消(それに伴う保育定員の減少等のサービスの低下)が生じる恐れがあり、経過措置の延長が必要である。	経過措置期間の延長に伴い、3歳児の定員増等について、長期的な視点により待機児童対策に取り組み、受け皿の確保を進めることが可能となる。	児童福祉法第34条の16第1項および第2項、家庭的保育事業者等の設備及び運営に関する基準第6条、群馬県家庭的保育事業者等の設備および運営の基準に関する条例第6条	内閣府、厚生労働省	特別区長会		盛岡市、仙台市、須賀川市、神奈川県、豊田市、大塚市、神戸市、西宮市、倉敷市、沖縄県、那覇市	○本市においても卒園後の受け皿確保に関し連携施設確保に向けた支援を継続して行っているが、連携先である保育所等における面積基準や保育士不足等の関係で新たに3歳児の受け皿が限られている。そのため連携協力を行う必要がある3つすべての協定締結が困難である状況が続いている。上記の状況に鑑み、平成32年3月31日までとなっている経過措置期間の延長を希望する。 ○経過措置終了までに連携施設が確保できず、万一認可取消となれば、当該事業所利用中の児童が行き場を失うことや保育の受け皿が減少するため、待機児童解消の取組にも大きな支障となる。 ○本市においては民間保育事業者等が連携施設になることの負担が大きいため、民間保育所等が連携施設となっている件数が少なく、大半が近隣の公立保育所を連携施設として設定している。しかし待機児童数が増加しており、定員の空き枠がないため、「卒園後の受け皿」としての機能が果たせていないのが実状である。 ○3歳児において認可保育所の受け皿の不足(待機児童の発生)が生じている。 ○経過措置により、連携施設を確保しなくても事業認可が可能となっているが、経過措置終了までに連携施設が確保できない場合、認可基準を満たさないことになる。 ○市においても連携施設コーディネーターを設置して支援を行っているところであるが、卒園後の受け皿については、特に保育所において2歳児と3歳児の定員差の関係から、確保が限りに近づきつつあるなど、期限までに設定が完了しないリスクもあるため、経過措置の延長を求める。 ○本県(政令・中核市除く)における連携施設の成立率は、県・市町村の協賛補助による支援の効果もあり、平成28年度38.0%、平成29年度69.6%と徐々に上昇している。しかし、経過措置終了までに100%を達成することは、小規模保育所が年々増加していることにより大変困難が見えてくる。一方で、卒後の受け皿を増やし、3歳児以降、入ムズに保育所等につなげていくことも大変重要であることから、連携施設の設置だけでなく、市町村の利用調整の際に特別優先枠を設けるなど、他の制度の活用も必要と考える。		

管理番号	提案区分		提案事項(事項名)	求める措置の具体的内容	具体的な支障事例	制度改正による効果 (提案の実現による住民の利便性の向上、行政の効率化等)	根拠法令等	制度の所管・関係府省	団体名	その他 (特記事項)	<追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)>		回答欄(各府省)	
	区分	分野									団体名	支障事例		
276	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	幼保連携型認定こども園の保育教諭の幼稚園教諭免許と保育士資格の併有要件(経過措置)の見直し	子ども・子育て支援新制度において、幼保連携認定こども園の保育教諭は、幼稚園教諭免許と保育士資格の両方の免許・資格を有することとされている。経過措置として、平成31年度末まではいずれかの免許・資格を持つ者は保育教諭になることができることとされているところ、同経過措置の期間の延長を提案する。	平成32年度以降は幼保連携型認定こども園の保育教諭は幼稚園教諭免許が必要となるため、免許を更新しなければ保育教諭として人員基準に導入できないこと、また、幼稚園教諭免許を再更新していない潜在保育士も数多くいることが想定されることから、施設の認可時において保育教諭の確保が困難となり、幼保連携型認定こども園の新設・移行が進まないことが危惧される。本県では、幼稚園教諭免許の更新講習を受講できる機関が国立大学1校のみであったことから、短大2校とも受講できるよう受け皿を拡大したところであるが、その他、道庁教育や県外大学の受講での対応を言っても、受講者のニーズを考えると31年度末までの更新は非常に厳しい状況である。このままでは平成32年度時点でも免許の未更新者が多数発生し、保育教諭の確保が困難となることから、幼保連携型認定こども園への円滑な移行や園の新設に重大な支障が生じるおそれがある。	今後、保育料の無償化などにより、保育需要が一層高まることが予想される中、「平成27年度から31年度までの5年間」の経過措置を見直し、「認可から5年間」に改正することにより、幼保連携型認定こども園の新設及び移行の促進、ひいては待機児童対策にもつながることが期待できる。		内閣府、文部科学省、厚生労働省	九州地方知事会	九州地方知事会共同提案(事務局:大分県)	旭川市、仙台市、船橋市、川崎市、須崎市、山梨市、豊田市、田原市、草津市、大原市、津市、大原市、八尾市、兵庫県、神戸市、和歌山市、倉敷市、玉野市、徳島県、徳島市、松浦市、熊本市	【添付資料】 「幼稚園教諭免許更新講習」二一調査結果	子ども・子育て支援新制度におけるいわゆる「5年後見直し」については、平成30年5月28日に開催した子ども・子育て会議において議論が開始されたところであるが、検討項目として「幼保連携型認定こども園における保育教諭の資格の特例」を挙げている。同会議は、認定こども園団体、自治体関係者等が構成員となっているが、5月28日の会議の場では、本特例を延長して欲しい旨の意見が述べられている。今後、引き続き、同会議において議論を行い、その方向性を定める予定である。
278	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	放課後児童支援員の資格取得制度等の見直し	放課後児童健全育成事業の設備及び運営に関する基準が定める放課後児童支援員の資格要件に係る実務経験年数の短縮	基準省令において、放課後児童支援員は、都道府県知事が行う研修を修了した者でなければならないとされている。当該研修の受講要件は複数あるが、このうち「実務経験年数」については、短縮を望む者が市町及び現場から多く寄せられている。具体的には、資格取得者が退職した場合、しばらくの間、新たに採用した者が放課後児童支援員になることができず、基準省令上の配置(2名以上)が難しくなる事態が生じている。また、放課後児童支援員たるべき人材の要素を備えるためには、必ずしも2年という期間が必要とは言えず、むしろ、実際に基づくノウハウ、児童・保護者や他の職員からの信頼関係等を踏まえて総合的に判断されるべきものと考えられる。	資格取得のための実務経験年数が短くなることで、資格取得対象者が増え、現在の人材不足の問題(人員配置の困難さ)を解消する一助となる。支援員の人材不足が深刻な中、放課後児童クラブの特種児童解消のためにも効果があると考える。	放課後児童健全育成事業の設備及び運営に関する基準	厚生労働省	九州地方知事会	九州地方知事会共同提案(事務局:大分県)	秋田県、ひたちなか市、多治見市、山梨市、宮市、広島市、高知県、松浦市	なお、提案元の佐賀県では、放課後児童クラブを有する全市町(19市町)が本提案に賛同	放課後児童支援員には、その必要とされる専門性に鑑み、保育士や教員等の有資格者又は実務経験がある方になっていただくことが必要であると考えている。一方で、支障事例のような事態が生じることも承知しており、経過措置期間経過後の放課後児童支援員研修のあり方考える際に、こうした問題への対応策もあわせて検討していくこととした。

別添1

管理番号	提案区分		提案事項(事項名)	求める措置の具体的内容	具体的な支障事例	制度改正による効果 (提案の実現による住民の利便性の向上、行政の効率化等)	根拠法令等	制度の所管・関係府省	団体名	その他 (特記事項)	<追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)>		回答欄(各府省)
	区分	分野									団体名	支障事例	
279	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	要保護状態にある外国人が属する国の領事館等に対する、保護制度適用の確認の廃止	領事館等に対する保護制度適用の確認について、これまで確認したすべての国で保護措置が無く、また、定期的に調査を行っても未回答の国があり、確認事務自体が形骸化しているため、当該事務の廃止を求めるもの。	○保護の実施機関(福祉事務所)は、要保護状態にある外国人からの保護申請書等を領に報告するとともに、報告を受けた際は、その外国人が属する国の領事館等に対し、必要な保護又は保護を受けることができないことを確認し、その結果を保護の実施機関に通知することとなっている。 ○本県がこれまで確認した全ての国(中国など7カ国)が、保護措置は無いとの回答であり、確認自体が形骸化している。 ○照会しても、当該年度で最初の照会のみ回答し、その後は未回答の国(韓国)もある。 ○本県では年間20件程度の確認を実施している(1件の確認には2週間程度要している状況)。 ○生活に困窮する外国人に対する生活保護の措置について(昭和29年5月8日厚生省社会局長通知)は、自治体に対して、自分の国、外国人に対しても生活保護法に準じて保護を行うことを定めたものであり、この通知に基づき事務処理を行っている状況にある。	○事務負担等の軽減 事務を廃止することにより、福祉事務所及び県本庁における業務の効率化及び郵送料の軽減に繋がる。 ○事務処理の迅速化 外国人についても、生活保護法に準じ処理することが求められている。領事館等の回答を待つことなく、予約金等調査終了後、速やかに保護決定が可能となり、事務処理の迅速化に繋がる。	厚生労働省	九州地方知事会	九州地方知事会共同提案(事務局:大分県)	宮城県、ひたちなか市、所沢市、千葉県、大和市、新潟市、浜松市、京都府、堺市、香川県、熊本県	○保護の実施機関(福祉事務所)は、要保護状態にある外国人からの保護申請書等を都道府県に報告するとともに、報告を受けた都道府県は、その外国人が属する国の領事館等に対し、必要な保護又は保護を受けることができないことを確認し、その結果を保護の実施機関に通知している。これまで確認した全ての国が、保護措置は無いとの回答である。また、年間5件程度の確認を実施しているが、1件に係る確認には2週間程度要している状況である。このような状況で有り、事務を廃止することにより、福祉事務所及び本庁における業務の効率化及び郵送料の軽減に繋がるものと考えられる。 ○外国人についても生活保護法に準じ迅速な処理することが求められているため、要保護状態の外国人の申請を都道府県に報告し、その属する国の代表者若しくは領事館等の回答を待って保護を決定した事例はない。 ○領事館等に対し確認を行っても保護措置がなく、事務を廃止することにより福祉事務所及び県本庁における事務負担の軽減に繋がる。 ○照会によっても、回答までにかかりの時間を要し、保護決定までの期間に影響を与えている。 また、本市でも、回答があった全ての国で保護措置は無しであり、照会が形骸化している。 ○県においても、年間数件ではあるが、当該事務を実施している。過去10年間において、保護措置があるとの回答は無い。事務が形骸化しており、廃止にすべきだと考える。 ○本市においては特定の国籍の外国人からの保護申請が多く、都道府県等に対する確認が既に形骸化している状況。 ○本県では年間照会数は少ないが、照会する国がほぼ同じであるため、対応が偏々によって異なるものではないと、認識しており機軸的照会になっているのが現実である。	日本人と同様に日本国内で制限なく活動できる在留資格を有し、適法に日本に滞在する永住、定住等の在留資格を有する外国人については、「生活に困窮する外国人に対する生活保護の措置について(昭和29年5月8日社会局長通知)」に基づき、行政措置として生活保護の決定実施の取扱いに準じて保護を行っている。この措置は、生存権保障の責任が第一義的にはその者の属する国家が負うべきと考え方を基本としつつも、 ①昭和29年に旧来の生活保護法にかえて現在の生活保護法が制定された際、日本国憲法第25条に規定する理念に基づき生活保護法に基づき受給権を有する者を日本国民に限定したことから、それまで、旧生活保護法に基づき生活保護を受けた外国人が適用対象でなくなったもの、当時、現に生活保護を受けている外国人が少なからず存在したこと ②また、昭和27年のいわゆるサンフランシスコ平和条約の発効に伴い、在日韓国・朝鮮人等は、日本国籍を離脱することになったが、当時生活保護を受けていた者に対して直ちに保護を廃止することは、人道上的問題があったこと等を踏まえて、譲じられたものである。 その後、昭和57年に難民の地位に関する条約が発効したが、同条約において難民に対する公的扶助は、自国民に与える待遇と同一の待遇を与えることが締約国の責務とされていること、難民に対する保護の措置はこの昭和29年通知により行われることとされ、今日に至っている。このため、外国人からの保護の申請があり、保護の実施機関が、当該外国人が要保護状態であると認めた場合には、申請書等の写し等の書面を添えて都道府県知事に報告し、都道府県知事は、当該要保護者が、その属する国の代表者若しくは領事館又はそれらの設置による団体から必要な保護を受けることができるかどうかを確認し、その結果を保護の実施機関に通知することとしている。(局長通知13)(4) すなわち、この確認の手続は、生存権保障の責任が第一義的にはその者の属する国家が負うべきであるところ、その可否を確認するものであり、行政措置として外国人に生活保護の決定を行う前提となる重要な手続である。 したがって、当該事務については必要な事務であり引き続き行っていたべきであると考えている。
281	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	保育士登録の取消しに係る本人通知に関する事務の運用改善	保育士登録の取消しに際して、収監等により所在が不明である場合には、法務部局を通じて本人に通知できるようにするなど運用を改善されたい。	県内で、実判決を受けた保育士がおり、県として保育士登録を取り消す手続きを進めたが、当該保育士が収監されたため、登録取消しの通知の送付先が不明であった。 収監について法務局に問い合わせたところ、「法的な調査権に基づく照会できなければ回答できない」とのこと。そこで、公示送達による通知の是非について、厚労省へ問い合わせたが、不利益処分であることから、適用については慎重に検討されたいとの趣旨の回答があった。 また、保育士登録証の返納も求めることができないため、公示送達による通知に至らなかったところである。 現状、都道府県は、本籍地である市町村への犯罪照会により対象者の現住所を把握することはできるが、収監された場合については、その収監先を把握することが困難であり、都道府県における登録取消しの本人への通知という法的義務を果たすにあたって支障となっている。	法に定める保育士の要件を満たさなくなった者に対する取消し事務から登録証の返納に至るまでの事務を確実に進めることができるようになる。 取消し処分を受けた者から確実に登録証を返納させることは、本来その資格を持たないものが児童の保育にあたってしましリスクを回避することにもつながり、住民の安全・安心につながる。	児童福祉法、児童福祉法施行規則	法務省、厚生労働省	九州地方知事会、日本創生のための将来世代応援知事同盟	九州地方知事会共同提案(事務局:大分県)	山梨市、松浦市	児童福祉法第18条の5に規定する欠格事由(以下「欠格事由」という。))に該当することになった者の保育士登録の取消しに関する事務については、児童福祉法施行規則の一部を改正する省令(平成30年厚生労働省令第26号)において、施設等からの報告により、保育士(国家戦略特別区域法(平成25年法律第107号)第12条の5に規定する国家戦略特別区域に設置する保育士を含む。以下同じ。)が欠格事由に該当するおそれがあると認めるときは、関係地方公共団体に情報の提供を求めることにより、その該当の有無を確認する仕組みを整備した。 当該規定に基づき、都道府県知事は、報告の対象となった保育士、当該保育士の家族、当該保育士の勤務する施設等を運営する事業者、当該施設等の市町村等に対し、情報提供を求めるとともに、報告があった事業者の職員の氏名、その職員の状況の把握に努め、当該保育士が欠格事由に該当するおそれがあると認められた場合、適宜、当該保育士の本籍地の市町村に対し、保育士の犯罪の経歴に関する情報の照会を行い、欠格事由の該当の有無を確認することとなった。 上記により、当該保育士が欠格事由に該当していることが確認できた場合において、保育士がいずれかの刑事施設に収容されていることが判明し、収容先の施設が不明であることにより、児童福祉法施行規則6条の35第1項に基づき登録取消しの通知ができないときは、当該都道府県知事は、法務省矯正局に文書で照会することにより、収容先の施設を把握することができると考えられる。
291	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	指定難病医療費助成制度の自己負担上限管理制度的の見直し	自己負担上限管理制度的は、管理票を交付する都道府県はもとより、管理票を特参する患者、管理票の記載を行う医療機関において多大な事務負担となっており、記載漏れや記載誤りの発生しやすい制度となっている。従来の特定疾患治療研究事業の制度のように医療機関ごとに上限額を管理する制度(セルフ単位での管理)にすることで、各医療機関の会計コンピュータ上の管理に対応でき、医療機関等の負担や支給誤り等を防止することとなる。	自己負担上限管理制度的(受給者ごとに1か月の自己負担額の上限を設ける制度)は複数の医療機関を利用する場合を想定して、受給者とともに交付された自己負担上限管理票に、各医療機関において、診療ごとに医療費を記載することとなっている。 このことは、管理票を交付する県のみならず、管理票を特参する患者、管理票の記載を行う医療機関においても多大な負担を強いられるとともに、記載漏れや記載誤りなども発生するとの声もある。 例えば、従来の特定疾患治療研究事業の制度のように、医療機関ごとに上限額を管理する制度(セルフ単位での管理)にすることで、各医療機関の会計コンピュータ上の管理に対応でき、医療機関等の負担や支給誤り等を防止することとなる。	制度を運営する都道府県、医療機関、患者の負担軽減となる。	厚生労働省	香川県		群馬県	○本県においても、自己負担上限管理制度的は、患者、医療機関及び県の負担は、大きく増えている。自己負担管理を医療機関で完結できる制度の構築が望ましい。 ○自己負担上限管理制度的は、医療機関における負担となっており、記載誤りがあることや、記載方法が複雑で行政への問合せも多い。 しかしながら、医療機関ごとに自己負担上限額を設定した場合、複数医療機関を受診される受給者の方の自己負担額が増え、実行制度より不利益となることが考えられる。また、複数医療機関の医療費合算が自己負担上限月額を超えた場合、療養費申請で対応する運用とする場合、療養費申請の手続きを行うために、申請者、医療機関及び行政の負担が増える可能性がある。 ○自己負担上限管理票記載モレや、記載過りにより、上限額が適切に管理されず、償還払や医療機関による調整等を強いられる例がある。現行制度のあり方は改善の余地があると考えられるが、提案内容のように医療機関別に上限額を設定するした場合、医療機関側としては業務負担軽減となると思われるが、複数科にまたがる受診や院外処方による調剤等、セルフが複数科に渡る患者に対してそれぞれ自己負担上限額を設定することは、患者自身の経済的負担増につながるかと懸念される。	ご提案のように、医療機関ごとに上限額を管理する場合、当該医療機関は、他の医療機関において患者が支払った医療費が把握できないため、患者は、複数の医療機関の自己負担額の合計が上限額に達していたとしても、なお当該医療機関において自己負担上限額に達するまで医療費を支払う(自己負担すること)が生じる可能性があり、後日、償還されたとしても一時的に自己負担が増えることが想定されることから、かえって、患者の利便性の低下につながるおそれがある。そのため、ご提案の医療機関ごとに上限額を管理する制度の適用については実施困難である。

別添1

管理番号	提案区分		提案事項(事項名)	求める措置の具体的内容	具体的な支障事例	制度改正による効果 (提案の実現による住民の利便性の向上、行政の効率化等)	根拠法令等	制度の所管・関係府省	団体名	その他 (特記事項)	<追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)>		回答欄(各府省)
	区分	分野									団体名	支障事例	
297	B 地方に対する 規制緩和	医療・福祉	指定難病及び小児慢性特定疾病医療費助成制度の事務処理におけるマイナンバーによる情報連携項目の追加	マイナンバーによる情報連携で、指定難病及び小児慢性特定疾病医療費助成制度の事務処理における「所得区分」を収集可能としていただきたい。	所得区分は、医療受給者証に必須の記載事項であるが、情報連携の提供情報ではないため、保険者と郵送によるやり取りをしなければならない。書送付による事務が煩雑であり、手間と時間がかかるほか、保険者からの返送があるまで医療受給者証を送付することができず、医療受給者証発行までに時間を要している一因となっている。	郵送によるやり取りがなくなることで、大幅な時間短縮が図られるほか、郵送代も削減されるなど、行政の効率化・財政改善が図られる。 また、医療受給者証の発行が早まることで、患者もより早く医療費助成を受けられることができ、これまでのように償還払いによる払い戻しの手続きが不要になったり、償還払いによる額を減らすことが可能となるなど、患者や家族の利便性の向上につながる。	・健康保険法施行規則第98条の2 ・国民健康保険法施行規則第27条の12の2 ・児童福祉法第19条の3第7項 ・児童福祉法施行規則第7条の22 ・難病の患者に対する医療等に関する法律第7条第4項 ・難病の患者に対する医療等に関する法律施行規則第25条 ・行政手続における特定の個人を識別するための番号の利用等に関する法律第19条第7号及び別表第二の9の項及び119の項	内閣府、総務省、財務省、文部科学省、厚生労働省	相模原市		秋田市、群馬県、川崎市、新潟市、石川県、静岡県、京都市、神戸市、西宮市、山口県、愛媛県、高知県、熊本県、大分県、宮崎市	<p>○本県においても、医療受給者証に「所得区分」を記載することは、保険者への照会を始め、大きな負担となっている。公費負担の縮減効果が不明確であるため、まずは「所得区分」の記載の廃止を検討したい。</p> <p>明確な効果が期待でき、「所得区分」の記載を継続する場合は、マイナンバーによる情報連携で、「所得区分」を収集可能としていただきたい。</p> <p>○本市では、年に約60回、郵送でのやり取りが生じている。</p> <p>特に、各型国民健康保険組合においては、送達まで1か月もかかることが多いため、受給者証発行に過度の時間を要している。</p> <p>○保険者への所得区分の照会では、郵送による書類送付のための手間及び郵送代がかかる他、回答まで一定期間が必要なため、受給者証の発行まで時間を要している。</p> <p>所得区分をマイナンバーによる情報連携の項目とすることで上記の支障は解消される。</p> <p>○本市においても、申請書類は揃っているにも関わらず、保険者への所得区分照会を行うために医療受給者証の交付が遅れる場合がある。</p> <p>照会に係る書類送付についても、照会先やタイミングが異なる他、保険者や課税状況によっても所得課税証明が必要となるため、事務が煩雑である。</p> <p>○同様の支障事例が生じている。マイナンバーによる情報の連携が可能となれば、県からの所得区分照会への回答の事務と年度ごとに所得区分が変更となった方の報告の手間が省ける。</p> <p>○書類送付による事務が煩雑であり、手間と時間がかかるほか、保険者からの返送があるまで医療受給者証を送付することができず、医療受給者証発行までに時間を要している。</p> <p>○受給者証の発行が遅いため、患者、家族に経済的な負担や償還払い等の手続き等の負担を強いっている現状がある。マイナンバーによる情報連携を行うことで患者の利便性の向上につながる。</p> <p>○所得区分は、医療受給者証に必須の記載事項であるが、情報連携の提供情報ではないため、保険者と郵送によるやり取りをしなければならない。</p> <p>書類送付による事務が煩雑であり、手間と時間がかかるほか、保険者からの返送があるまで医療受給者証を送付することができず、医療受給者証発行までに時間を要している一因となっている。</p> <p>○現在、所得区分(適用区分)は保険者に郵送で確認しているが、マイナンバーによる情報連携で取得し確認できれば、タイムリーな対応が可能となり、事務の簡素化、適正処置につながる。</p> <p>しかしながら、所得区分(適用区分)の記載を必須とする本制度の根本的な見直し、廃止については、従来から要望しているもの。</p> <p>○高齢者等の現況適用区分(所得区分)の郵送での照会に2週間ほど要しており、情報連携が可能となれば、大幅な業務改善が見込まれる。</p> <p>○所得区分の記載は、保険者と書類によるやり取りをしており、手間と時間がかかっていることから、マイナンバーによる情報連携が収集可能となれば事務処理の簡素化に繋がる。</p>	<p>【内閣府、総務省】</p> <p>まず、厚生労働省において、児童福祉法による小児慢性特定疾病医療費及び難病の患者に対する医療等に関する法律による特定医療費の支給に関する事務における所得区分に関する情報のマイナンバーによる情報連携の必要性や当該事務の効率性などについて検討する必要がある。その上で必要があれば、情報連携に向けた所要の対応を検討する。</p> <p>【財務省、文部科学省、厚生労働省】</p> <p>本件の所得区分の確認は、認定を受けようとする者(申請者)が実施機関(都道府県等)を経由して保険者へ申し出ることとされており、当該申し出を受けて保険者が所得区分の判定を行うものである。そのため、ご提案の情報連携については、具体的な事務フローを精査の上で、関係法令の整合性や保険者及び地方自治体におけるシステム改修のための技術面、予算面、効率性等を踏まえ、その実施の可否も含め関係府庁で連携して検討していく。</p>
306	B 地方に対する 規制緩和	医療・福祉	「次世代育成支援対策施設整備交付金」の事務の簡素化	○次世代育成支援対策施設整備交付金に係る厚生労働省との協議・申請段階において、整備区分が大規模修繕又は防犯対策強化整備事業の交付基準である、公的機関(都道府県又は市町村)の建築費等の見積もりと、民間工事請負業者2者の見積もりを比較して、いずれか最も低い方の価格を基準とされている要件について、民間工事請負業者2社の見積もりを廃止すること。	○市有施設の改修にかかる補助金・交付金の申請において、民間事業者の見積もり徴収を要件とする事例は極めてまれであり、またその内、民間見積価格を採用した例もほとんどないことから、必須とは考えられない見積もりを徴収している。 ○また、民間事業者の見積もりを徴収する場合、入札前に公共工事の内容(内容によっては、詳細な図面提供が必要)を一部民間業者に提供することになるため、当該業者のみ準備期間を与え、入札において有利に働く可能性があるなど、公共工事における公平性の担保について懸念される。 ○当該交付金に係る年度毎に発出される協議開始の通知から協議書提出までの期間が短いことから、短期間での見積もりを民間業者に依頼することになり、対応できる業者選定に努力を要するとともに、民間業者に対しても負担を強い	○民間事業者の見積もりを廃止することにより、入札前の事前情報提供が不要となり、公平性の確保が図られる。 ○協議・申請に係る手続きの簡素化が図られる。	次世代育成支援対策施設整備交付金交付要綱 5、別表1-2、別表1-3、次世代育成支援対策施設整備交付金における大規模修繕等の取扱について 3(2)	厚生労働省	指定都市市長会		山梨市、和歌山市、北九州市	<p>○平成29年度の次世代育成支援対策施設整備交付金において大規模修繕の補助協議を行ったが、民間2社の見積もりが必要であったため、業務を発注するわけではないのに、民間業者が無理を言って見積書の提出をお願いし負担を強いることとなった。本市としても予算用に入札までに事前に民間業者に見積書を徴収することはなく、入札により業者も決定されることから、公的機関の見積もりで問題ないと考ええる。</p> <p>○補助金の申請に係る見積もりを徴収すると、入札前の情報提供をすることで、入札時に不公平が生じる</p> <p>○公平性を考え民間事業者からの見積もりが取得できず、工事のスケジュールから交付金の協議を見送った事例あり。</p>	<p>次世代育成支援対策施設整備交付金における大規模修繕又は防犯対策強化整備事業の交付基準の算定について、公的機関の見積もりが適正金額であるか否か確認する必要があることか、当該見積もりと民間事業者の見積もりとの比較は必須である。</p> <p>また、次世代育成支援対策施設整備交付金においては、地方自治体が策定した整備計画に基づいて実施される児童福祉施設等に関する施設整備事業を交付の対象としているところ、対象施設の整備計画の策定は整備交付金の協議開始の通知をもって行われるものではなく、それ以前より地方自治体において策定されているものと思慮され、見積もりが必要であることは事前に把握し得るため、民間業者見積もりを依頼する期間が短期間になるとは考えにくい。</p> <p>今後とも、協議にかかる事前の準備については各自自治体に対し、周知してまいりたい。</p>

管理番号	提案区分		提案事項(事項名)	求める措置の具体的内容	具体的な支障事例	制度改正による効果 (提案の実現による住民の利便性の向上、行政の効率化等)	根拠法令等	制度の所管・関係府省	団体名	その他 (特記事項)	<追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)>		回答欄(各府省)
	区分	分野									団体名	支障事例	
316	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	介護保険被保険者証等の交付及び再交付申請における個人番号記入の見直し	介護保険法施行規則において、介護保険被保険者証、負担割合証、負担限度額認定証等の交付・再交付の申請や、氏名・住所等被保険者情報の変更届出の際には住所・氏名・生年月日等に加入個人番号(マイナンバー)を記入するよう定められているが、既に被保険者資格を有する者が対象であることから改めてマイナンバーを収集する必要はなく、また情報連携等も想定されないため、必要性が説明できない。 ・マイナンバーの記入にあたってはマイナンバーカード等による本人確認を行う必要があるが、介護保険関係の手続きは当事者が要介護の高齢者であることから、マイナンバーの管理・記入が困難な人や本人確認書類を所持しない人も多く、窓口での説明や手続きに時間を要している。また、申請する高齢者にも、マイナンバーがなければ申請できないのではないかという不安を与えている。 ・介護事業者が代理申請する場合においても、マイナンバーの管理や代理申請の条件が厳しく負担が大きいことから、マイナンバー欄は空欄にする例が多く見られ、市が職権で補記する事例が生じている。	・手続きが従来どおりとなり、高齢者及び代理申請する介護事業者、および自治体窓口担当者の負担が軽減される。	介護保険法 介護保険法施行規則 行政手続における特定の個人を識別するための番号の利用等に関する法律	内閣府、厚生労働省	今治市	【提案趣旨に賛同】 宇和島市、新居浜市、西条市、伊予市、四国中央市、西予市、上島町、東温市、久万高原町、松前町、松野町、鬼北町、愛南町	盛岡市、滝沢市、米沢市、浪江町、石岡市、ひたちなか市、習志野市、八王子市、大田市、山梨市、田原市、辻貫市、高松市、宇和島市、内子町、松浦市	○介護保険法施行規則において、介護保険被保険者証、負担割合証、負担限度額認定証等の交付・再交付の申請や、氏名・住所等被保険者情報の変更届出の際には住所・氏名・生年月日等に加入個人番号(マイナンバー)を記入するよう定められているが、既に被保険者資格を有する者が対象であることから改めてマイナンバーを収集する必要はなく、業務を煩雑にするだけである。 よって、既に発行済みである保険証等の再交付事務において、個人番号を記載する義務付けを廃止し、業務の簡素化していただきたい。 ○当事者では、年間約300人から再交付申請があり、そのうち半数が介護保険事業者が代行手続きをするため、個人番号の記載は困難であり職権での補記する必要がある。また、情報連携の必要もないため、市民へ個人番号記載の必要性についての説明ができない。以上のことから、再交付申請にあたっての個人番号記載する義務付けを廃止してほしい。 ○マイナンバー記入に要する市民の負担及び事務負担が大きい状況である一方、現状マイナンバーによる情報連携の必要性がないことから、制度改正の必要性を認めます。 ○介護保険法施行規則において、介護保険被保険者証、負担割合証、負担限度額認定証等の交付・再交付の申請や、氏名・住所等被保険者情報の変更届出の際には住所・氏名・生年月日等に加入個人番号(マイナンバー)を記入するよう定められているが、既に被保険者資格を有する者が対象であることから改めてマイナンバーを収集する必要はなく、また情報連携等も想定されないため、必要性が説明できない。 マイナンバーの記入にあたってはマイナンバーカード等による本人確認を行う必要があるが、介護保険関係の手続きは当事者が要介護の高齢者であることから、マイナンバーの管理・記入が困難な人や本人確認書類を所持しない人も多く、窓口での説明や手続きに時間を要している。 介護事業者が代理申請する場合においても、マイナンバーの管理や代理申請の条件が厳しく負担が大きいことから、マイナンバー欄は空欄にする例が多く見られる。 よって、既に発行済みである保険証等の再交付事務において、個人番号を記載する義務付けを廃止していただきたい。 ○対象が高齢者であることから、申請においてマイナンバー欄を空欄にする例が多く、市が職権で補記することが多い。 ○介護保険被保険者証等の各証書の交付・再交付申請に際しては、個人番号が未記載となっていることが多い。未記載分については職員が調査の上記載しているものの、情報連携においては当該事務処理の必要性はないものと捉えている。 ○再交付事務において個人番号を使用した事務処理を行うことはないにもかかわらず、個人番号の記入を求める様式となっているため、記載があれば本人確認事務、記載がなければ職員が調べて記入する事例が発生するため、非効率な処理となっている。 ○介護保険法施行規則に定める被保険者証・負担割合証等の交付・再交付など情報連携が想定されない申請・届出において個人番号(マイナンバー)の記入を求める規定を見直すこと。 ○事務処理上の支障がないため、申請書への補記もしていない。 ○介護保険被保険者証等再交付申請書の個人番号記載欄は、ご本人でない方の申請も多く、未記入の場合が多いため事務的負担が大きい。 個人番号を利用して情報連携を行う必要がない業務なので、記入の義務付けの廃止及び記入欄の廃止をしていただきたい。 ○再交付事務だけでなく年間180件程度のうち、マイナンバー記載の上での申請は10件程度であり、当市においても事務処理上の負担となっている。	【内閣府】 まず、厚生労働省において、提案の事務の処理におけるマイナンバー利用の必要性を確認・整理した上で、回答と連携しつつ検討する。 【厚生労働省】 介護保険における被保険者証等の交付や再交付の事務については、被保険者の情報を、個人番号を利用して検索・管理する目的により、申請書等に個人番号の記載を求めている。 提案については、介護保険事務全体における個人番号を利用した事務処理に支障がない限りにおいて、住民の負担と地方公共団体の事務負担の軽減を図られるよう、地方公共団体に於ける運用の実態等も踏まえ、個人番号の記載の義務づけの要否について、関係府省と連携しつつ検討してまいります。 なお、個人番号の導入にあたり、申請者等が高齢であることにも鑑み、申請受付時等の対応については、申請者が自身の個人番号がわからず申請書等への個人番号の記載が難しい場合等には、市町村の住民基本台帳又は住民基本台帳ネットワーク等を用いて当該申請者の個人番号を検索し、職員が記載して差し支えないこと等を示している。
319	B	地方に対する規制緩和	医療・福祉	介護保険法第24条の2第2項に係る調査業務を地方自治体が指定市町村事務受託法人に委託する際の職員の資格要件緩和	本市における介護認定調査員は、介護支援専門員の資格がなくても看護師、社会福祉士等の資格と、県及び当市で実施している調査員研修受講により介護認定調査業務を実施可能としている。 本市が委託している指定市町村事務受託法人への調査員に関しては、基礎資格として看護師、介護福祉士、歯科衛生士に加えて、介護保険法第24条の2第2項「介護支援専門員その他厚生労働省令で定める者に当該委託に係る調査を行わせるものとする」に基づき、介護支援専門員の資格を求めている。 指定市町村事務受託法人からは、市と同じ調査を行うことから、必要とされる資格要件について、市と同等してもらいたいと要望がある。 支障事例としては、指定市町村事務受託法人が調査員の募集をかけても、介護支援専門員の資格を有している者からの応募が少なく人材確保が困難としている。 さらに、「介護支援専門員」資格の更新研修(54時間)の期間中は「要介護認定調査」事務が滞り、その分、認定手続きの遅れが生じている。平成29年度は、委託法人の調査員4名が8日間の更新研修を受講。その結果、調査委託件数が64件減となった。	指定市町村事務受託法人での「要介護認定調査」事務に従事する者に対し、その資格要件を本市と同様とすることで、指定市町村事務受託法人における介護認定調査員の人材確保が容易となり、認定手続きの遅れが軽減されると同時に、さらなる認定手続きの迅速化が図られる。	介護保険法第24条の2第2項	厚生労働省	那覇市		南伊豆町、名古屋市、田原市、神戸市、宮崎市	○本市でも指定事務受託法人に介護認定調査を委託しているが、調査員として採用する介護支援専門員が集まらず、指定事務受託法人では、申請件数の増加を元に想定した採用予定数を下回る状態となっている。また、現在の調査員の高齢化も進んでおり、調査員の安定かつ継続的確保も課題となっている。今後の急速な高齢化にも対応できる安定的な介護認定調査業務の実施のため、調査員要件緩和について、至急対応いただきたい。 ○支障事例としては、指定市町村事務受託法人が調査員の募集をかけても、介護支援専門員の資格を有している者からの応募が少なく人材確保が困難であり、認定事務の遅れにつながる。 ○本市においては、原則、直営調査は行わず、新規申請及び変更申請は指定市町村事務受託法人に委託している。 しかし、本市指定市町村事務受託法人において、年々、調査員の確保が困難になっており、認定調査が大幅に遅れる事態となった。 これにより、年度末時点において、未調査数が通常300から500件のところ、平成30年3月31日時点では、約1100件が未調査となり、相互協力で進めていた他市町村からの新規申請に対する認定調査も、近隣市町村には、自身で調査いただくよう依頼している状況である。 認定調査員確保のため、地方自治体が指定市町村事務受託法人に介護認定の訪問調査(新規申請分)を委託する際の調査員の資格要件を介護支援専門員に限らず、国家資格である「社会福祉士」、「介護福祉士」等の福祉資格や、「保健師」、「看護師」、「准看護師」、「理学療法士」等の医療的な資格まで広げ、また、市職員として認定調査を行った市職員〇Bも可能とするよう要望する。	認定調査を委託する場合は、調査の質の確保の観点からアセスメントに係る技術等を有している介護支援専門員に限ることとしている。また、介護報酬は、サービスによって介護状態区分が高いほど報酬が高くなり事業所にとって有利であり、認定調査員が要介護状態区分を作為的に高くする恐れがあるため、認定調査の実態に当たっては、中立・公正性を確保することが必要である。これらを踏まえ、どのような条件であれば介護支援専門員以外に認定調査を委託できるのか、まずは認定調査の実施状況を把握した上で、具体的な対応について平成31年度中に結論を得る。